

「よろしい、引受けた、僕が引受けた以上は大丈夫、安心して待つてゐろ」
 「ではこれを持って行け、不足だつたらお前も些し用意して置いて一時立替へろ、或は一度歸つて來てもよい云ふまでもないが事は何れ秘密に相違ない、そのつもりでゐてくれ」

「よし解つた、然しもう大分更けた、夜道は辛いな」

「無論明日の朝早く行つたがよい、今夜は酒でも飲まう」

兩人はその夜深更に及ぶまで飲んでゐたが、やがて龍馬は辭し去つた、半平太の妻は盃盤を片附けてゐたが「おや」と云つて聞耳を立てた。

「ほんとに困つた龍馬さんです、他の事なら我慢するけれど、あればかりはほんとに嫌で〜たまらない」
 妻女は斯うつぶやきながら眉を顰めた。

「何ぢや、痣がどうかしたのか」と半平太は云つた、痣とは龍馬の異名であつた、そして龍馬は半平太の事を、臆々と呼んでゐた。

「あなた御存知ないのですか、わたくしあればかりは……」

「何があればかりぢや」

「だつて龍馬さんは宅へゐらツしつて歸る時には、必と門の傍で小便をなさるので、いつでもなんですからねえ」

「いゝぢやないか」

「いゝえ、些ともいゝ事なんかありません、玄關から門までもつと隔たつてゐれば構ひませんけれど、すぐ鼻の先ですから玄關を出ると臭くつて〜あれだけはあなた何とか有仰つて下さいまし」

「仕方がない、その位の事ならいゝぢやないか、龍馬は天下の人物ぢやから、小便を門傍で垂れる位は我慢しろ」

半平太と云ひ龍馬と云ひ、英雄の面目躍如たるものがある、

斯くて翌早朝、龍馬は丹川に長藩の志士を訪うたが、果して久坂玄瑞からの使命を齎らせたのであつた、長使を歸した龍馬は、その足で直ぐ高知へ歸つて半平太を訪う

て何事か密議したが、龍馬の姿は日ならず長州萩に現はれた、十一月には筑前の平野國臣、筑後の眞木和泉守、肥後の轟武兵衛、豊後の小川彌右衛門等を歴訪し、十二月には飛んで大阪住吉陳營に在つた、この頃攝海の警備をする爲、各藩の武士が屯して居つたが、土藩士の屯集してゐる所は住吉にあつたからである、さうして再び半平太の許に復命したのは十二月も中早を過ぎた頃であつた。

この龍馬の遊歴は長薩の志士と會見し、併せて京阪の形勢を視察するのが目的であつた。

『京師の模様はどんなであつたな』

半平太は盃を龍馬に差しながら云つた。

『和宮御降嫁はいよ／＼事實となつた、十月の二十日に京師を御發駕、中山大納言、菊亭中納言、其他多くの公卿衆、御差副御附の女房など五六百人供奉申上げて御下向遊ばされたとある』

『薩州では唯に會つて來た』

『筑前の平野、筑後の眞木、豊後の小川、肥後の轟などの士に會つたが、いよ／＼薩藩に擁つて義旗を京師に擧げるといふ事だ、京師には中山殿最も勤王の志厚いと噂ぢや、勤王の敵といふは關白尙忠殿、密に幕府と通じ、事毎に勤王家の有志を疎外するといふので、まづこれらの紳縉家を襲撃しやうと云うて居つた、薩藩長藩ともなか／＼勤王の士が多い、當藩も此際大ひに禪を締めて掛らねばならん喃』

『さうぢや、愚圖々々しては居られん、まづ當路の者か説伏せなければならんが、さて唯から説いたものか』

『參政吉田はどうぢや』

『無論説かねばならぬ、が、まづ市原を叩いてみやう』

市原といふは大監察市原八郎左衛門の事であつた、半平太はまづ此者を動かさねばならぬと思つた。

『然し大分ひと頃と違つて勤王の旗色が顯著して來たぞ』

『此機會だ、此機會を逃がしてはならない、いくら我々が勤王々々と云つても藩論が』

一致しなければ何にもならぬ、藩の者が擧つて勤王家とならねば駄目だ、一人でも幕府臭い者がゐるうちは澄んだ水とは云へぬ』
 兩人はその夜も深更まで話し會つたが、もとより國家を憂ふる話以外には何もなかつた。

翌日半平太は藩廳に市原を訪うた。

『用件のみを卒直に申上げませう、今年の夏拙者が江戸へ參つた時、長州の久坂玄瑞、薩州の樺山三圓と共に三藩勤王の密約をしました』

『と云ふとどんな事ですか』

『現下國家の狀態を御覽になればお解りでせう、我々の眼中には唯天子と國家あるのみです、此時に當つて藩は結足して勤王の志を奨勵しなければならぬので、三藩協力一致でその志を貫徹しやうと云ふのです、無論當藩にも人物は、勢居りませうが、萬一怯懦逆論を稱へるの士がないとも仰りませんが、京師の模様は危機に迫つて居ります、此際當藩でも階級などに顧慮せずどしどし人材を登用し、要路の者に勤王を稱へ

させ、藩内擧つて勤王家にならなければならぬと思ひます、明年は藩長の志士が團結して京師に上り、江戸の暴政を根抵から一變するだらうと思はれます、當藩も共に此擧に賛じ一國力を協せて、多年腐敗し來つた幕府の眼を覺させ、外には夷狄を拂はねばなりません、さうして勤王の大義を天下に明瞭にしたいと思ひます、貴君のお考へは如何でせう』

半平太は斯う云つて市原の顔をジツと見た。

脱 藩

一

武士半平太は全力を搾つて大目付市原八郎左衛門に迫つて、縦横に天下の形勢を論じた、けれど八郎左衛門の態度は半平太に取つて意外に冷たくそして卑劣であつた、半平太が熱辯を振つて説く勤王論に對して、些の辯駁を試みるでもなく、さればとて佐幕論を吐くでもない、彼の心は恰度、古池から掬ひ上げた蛸蚪が、春日の當つて

ある大地に、何の用捨もなく投げ出されたやうに、汚なく醜かつた、半平太はそのぬらくら魂に向つて、恥辱しめる勇氣も張合も抜けて終つた、こんな腰抜に何時間説いた所で時間を空費するに止まると思つたので其のまゝ藩廳の門を出た。

その頃土藩に在つて學才衆に秀で、薩主容堂公の寵を一身に集め、隠然一大勢力を把握してゐる者があつた、半平太は失望しながら家へ歸ると、直に同志を集めて市原如き者に會つた自分の愚さを自嘲して、さて誰を説いたものであらうかと協議を開いた、その時衆議はまづ第一に吉田東洋（名は元吉）を説き伏すべしと云ふになつた、吉田東洋とは即ち、藩内に一大潜勢力を持つてゐる家老であつた。

『彼なら我々の論に耳を傾けてくれるであらう』

『彼は學問も才智も優れてゐる、而も要路にある身であるから、藩を擧げて勤王の大義に殉はせるのはまづ彼より同意せしめなければなるまい』

『彼が動いたら、必ず藩の全體が動くだらう』

斯うした詞は同志の面々の口を衝いて出た、半平太もその心組であつたから、早速

帶屋町の吉田邸を訪れた。

『早速ながら是非貴君のお力を拜借しなければならぬ事があります、まづ其前に貴君にお訊ねしたいのは、目下の天下の形勢を何と御覽になりませうか、一つ御説が拜聴したいと思ひますと、例の長い腮を突出して云つた、當時土藩の家老職に在つて、其名聲普き東洋に向つて兀然と天下の風雲を論じかけやうと云ふ半平太も、無論池中の物ではなかつた。』

『大分世間がやかましくなつて参りました、然し當藩は決してこの渦中に巻き込まれぬ要心をせねばなりません』吉田は徐に斯う云つた。

『勿論盲目に動く事は慎まねばなりません、機會は捉へなければなるまいと思ひます、譬へにも申す通り、先んずれば人を制す、今や日本の天下は、外に夷狄を控へながら、内には太平に酔うた諸氏が安閑として、惰眠を貪つて居ります、此時に當つて薩長の二藩は夙に勤王の大義を唱へ、相呼應して從來の形勢に一轉機を與へやうとして居るのではありませんか然るに我土藩は如何でせう、機は今です、今にして土佐

全藩を勤王の大義に伏せしめなければ、遂に如何なる汚名を蒙るか分りません、一日も早く當藩の旗色を明かにしたいと思ひます、一人二人勤王論を主張する者が居つたところで、他がこれに従はなければ何にもなりません、拙者もあらん限りの力を以て勤王の爲に叫びますが、貴君の位置を以てして土佐全藩を指導したなら、その赴く所は蓋し瞭然たるものがあります、どうか御熟考の上よろしく御盡力が願ひたいものです」

「貴君の御意向といふのはそんな事なのですか」

「さうです、此事を願ひしたい爲に参りました、そうして猶一つには貴君の御説も拜聴したいと思つて参りました」

「はゝゝゝゝ」

吉田は突然大聲で笑ひ出した、半平太の眼は光つた。

「貴君はどんなお心でそんな事を云はれるのか、拙者には一向合點が参らん、なるほど近頃幕府のやり方がどうだとか、或は勤王倒幕、公武御合體、などと様々の言を耳

にしますが、これ畢竟するに天下の志士だとか浪士だとか申す輩が、何か事あれかしと待ち構へ居つて、何でもよい、口には美しい事を唱へ、其實はどさくさ騒ぎに紛れて事を仕やうといふ、怪しからん輩の話です、貴君は失禮ながら之等の浪士輩に煽動されたのではありませんか」

「はゝゝ、これは御家老のお詞とも覺えませんが、不肖半平太の頭腦には、日本といふ國があるのみです、日本の國には萬世一系の天子の在します事を忘れてはなりません、忝多し事ではありますが、朝廷といふものがあつて幕府があるのです、幕府あつての朝廷ではありますまい、我々は日本開けて以來の大和魂を持つて居る以上、何處までも朝廷を頭に戴き、國家の爲に働かなければならんと思ひます、浪士は浪士、我等は我等、失禮ながら武市は人に乗せらるゝ程の不用意漢ではありません」

「御説一應は御尤もです、浪士とか申す輩も貴君と同じやうな議論をしてゐますが、然し彼等浪士輩は、常に何かしら不平を持つて居るので、三百年といふ長い間に築いた國の礎などは殆んど顧みない、日本の國が今日あるは、これ一偏に徳川幕府が三

百年間に於ける苦心の結果であるといふ事も考へねばなりません、唯徒らに私利私慾の爲に、この大なる功績を没し去り、甚しきに至つては、國賊呼はりさへ致す者があるといふ、實に言語道斷の話です、假りに私利私慾の爲ではないとしても、徒らに事を破りたいのです、例へば頑是な小兒が玩具を破壊すのと同じやうな考へで、何の考へがあるでもない、何の理由があるでもない、唯單に破壊したい、そうして新しい玩具が欲しいといふやうなものではありませんまいか、勿論貴君のお考へがさうぢやないふのではありません、そんな奴等が隠かでない言を流布して、一人でも多く自分等の味方に致さうとして居るから、そんな渦の中に巻き込まれぬやう御用心なされいと申すのです」

「御注意は千萬有難うございます、すると御家老の御意見と申すのは要りどういふのですか」

「さうですな、まづ唯今のところ、世間で兎や角と申すを傍觀致して居るがよろしからうと思ひます」

「傍觀致して居るうちに世の中が一變したら何うなりました、夷狄は遠慮なく神州を犯さうとして居りますぞ、それでも傍觀の態度を取つて居られますか」

「それは幕府で相當の處置を採るでせう」

「ところが幕府は……いやこれは今此處で貴君に改めて申上げずとも、既に幕府が外敵に對つて如何なる失敗を致して居るか御存じの筈ですから申しません、すると貴君は幕府にさへ任せて置けば、我々は國體を汚されやうと、外敵が攻め寄せて來やうと、手を拱ねいて居やうと有仰るのですか」

「左様ではない、いざといふ時には日本全國舉つて立たなければなりません、目下のところ、この難關を公卿殿上人に任せたら何んな事になるかもしれません、男子のやるべき事を女子に任すと同じやうなもので、實に此上もない危険ではありませんか、勤王といふ詞もよいが、朝廷は今日まで政治向には一際關係しなかつた、云はゞ荒い風には當つた事のない方々です、それをこの國事多端の折柄引出して來て、幕府を倒さうといふのは、それこそ日本の國を危くする基だらうと思ひます、貴君が薩長

の人々と事を擧げやうとなさるのを止めは致さん、己に善いと思つた事なら進んでなされたがよいでせう、然し拙者は當藩の家老職に居る者ですから、斷じて貴君方と與にする事は能きません」

半平太は一刻の後、失望と憤懣とを胸の中深く押包んで自宅の敷居を跨いだ、同志の者等は半平太が如何なる返事を齎らすかと手具臚引いて待ち構えてゐた。

『やはり駄目ぢやつた、彼は畢竟幕府の狗ぢや』

半平太は嚙んで吐き出すやうに云つた。

『我々の意あるところが通じませんか』

『全然話にならない、いくら説いたところで糠に釘ぢや、第一我々とは考へ方が異つてゐる、彼は幕府あつて朝廷あるを知らぬ奴ぢや、我々を唯徒らに事を好む浪士輩と見てゐる、勤王の大義を説いても、それは一つの口實ぢやと吐し居つた』

『先生、それは眞實ですか』

『彼のやうな奴が居る間は藩論も一定せぬ、全藩擧つて勤王黨たらしめやうとしたの

は聊か早計ぢやつた、まだ彼等のやうに幕府の走狗が他に、大勢ゐるぢやらう、我々の考へてゐる事は目前達しられさうにもない』

半平太は沈痛な口調で云つて一同を見廻した、一同の面上には一道の殺氣が迸つた。

二

幕府が一種の政略として行つた和宮降嫁の事は、文久元年十二月を以て入輿の御式を行ひ、引續いて祝賀の爲天下の諸侯に總登城を命じたりして、只管公武和合の成れるを喜んだ、然しこの事たるや、もとより幕府に誠意があつて行つた事ではなく、唯一時巧みに世人を瞞着し籠絡せんとしたに過ぎない、始め降嫁の事を京都に申請した時、恐多くも朝廷に於かせられては之を允し給はなかつたにも不拘、強ひてその宿意を達したのである、であるから、幕府の意志では強ひて此事を實行したならば、些しは世人も幕府に對して同情を持つだらうと思つた、ところが盲人千人目明千人の譬への

通り、世人は忽ち幕府の心術を看破つて終つた、そればかりではない、一時を糊塗し
 瀾縫した祟りはすぐに酬つて来た、といふのは降嫁の事は幕府閣老に於てこそ希望し
 て居たけれど、大奥に於ては情に於て聊かも歓迎して居なかつたのである。
 茲に於て幕府は天下の人心を瞞看する事が能きなかつたのみならず、又自家からも
 火を出さねばならぬ事になつた、内外表裏とも盡く齟齬して終つた。
 櫻田事變後、大老の遺志を繼いだのが安藤對馬守信睦であつた、信睦は前轍を少し
 も改めず、苟くも幕政に反する者はどしどし捕縛したので、天下の志士は身を置く所
 もない、と同時に益々倒幕の念を強めて行つた。
 武市半平太が土藩の態度に焦慮してゐる時、長藩では藩主を始め家老等も公武合體
 に賛成してゐるといふ有様であつたから、長藩の志士等も半平太と同じやうな心で悶
 悶の情遣る方もなかつた、然し幕府の搜索追捕が益々急であるが爲、相會して協議す
 る事さへも能きなかつたから、總べては書信を以て素懷を返べてゐた。
 「貴公に又足勞を煩はしたいが」

文久二年の正月、龍馬が半平太の所へ年始旁々遊びに行つた時、半平太は持つた
 盃を下に置きながら斯う云つた。

「又何處ぞへ行くのか」

「萩まで行つてくれぬか、久阪の所へ手紙を持つて行つて貰ひたいのぢや、それから
 歸りには京阪の動靜を調べて来てくれ」

「畏まつた、何日發たう」

「七草過ぎてからでよい、十日頃に發つて貰はふか」

「よろしい、此前萩に行つた時、久阪玄瑞には是非會ひたいと思つたが機會が無かつ
 た、今度は面白い話も聞かせて貰へるだらう」

「立派な勤王家ぢや、然し云ふ事が往々に過激に走る、氣を注げて口を利けよ」

斯くして龍馬は正月の十四日、長州萩の久阪玄瑞の許を訪れてゐた、そうして廿
 二日まで滞在、長州の藩情を委曲に聞いて久阪に別れ、山陽道を上つて翌月十四日大
 阪に出たところが、幕府の壓迫は日に／＼甚しく、到底何の某と名乗つては歩けな

いといふのは、去月十五日、即ち龍馬が久阪の許を訪れた翌日、江戸に於ては又もや水戸の浪士が安藤對馬守を坂下門に襲撃して、多少の傷を負はせた事件があつた爲、殊更志士や浪士の捕縛が急になつた、龍馬は藩士であるから敢て幕吏を怖れるのではないが、徒らに嫌疑を受けて武市よりの使命を遅らすやうな事があつてはならぬといふ懸念から、大阪へ入る前にまづ住吉神社に詣でてその通夜堂に一夜を明し、翌十五日書面を以て陣營の同志檜垣清治といふ者を招んだ。

その日は北風の吹き荒む寒い日だつたが、朝からよく晴れた天氣であつた、早速訪ねて来た檜垣と共に、まづ阿部野の古戦場を逍遙し、南朝の忠臣北畠顯家の墳墓を弔ひ、日暮に及んで大阪へ入つたが、檜垣の周旋で旅館三文字屋といふのに投宿する事ができた、そしてその日から五日間ばかりは、宿の一室に閉籠つて陣營の同志を招んで阪地の情況を聴取し、それから京都に入つて動靜を探り、藩に歸つたのは三月一日であつた。

『まだ家へは歸らない、晝飯を食へたぎりちやから腹が減つて仕様がな、湯に入つて飯を食べてそれから緩り話をしやう』

『よし、今日は誰が來ても留守ちやと云へ、さうして龍馬に何か美味しいものを食はしてやれ』

待ちかねてゐた龍馬が歸つて來たので、半平太は機嫌よく迎へて、何かと妻君に呟ける、やがて風呂から歸つて來た龍馬は、打寛いだ態で相對した。

『何はさて、貴公は水藩浪士が江戸に於て行つた事は聞いたであらう喃』と半平太はまづ口を切つた。

『詳しく聞いた、あれはまだ萩に滞在してゐる時であつたよ、その後至る所で大層な噂ちや』

『事の善悪はさて措き、水藩には中々元氣のある者が多い喃、流石は烈公お膝下ちや、聞けば僅かに六人ちやつたさうな』

『何に致せ、彼櫻田事件があつて間もない事ちやから、途上の警固は嚴重であつたさうちや、而かも當の安藤對馬守には手傷を負はせたのみであつたといふから、さぞ

かし残念な事ぢやつたらう、第一六人で警固を破らうといふのが無理ぢや』

『貴公の知つてゐる者が六人の中にゐたか喃』

『いや、まだ會つた者は一人もないが平山繁義といふは聞えた一刀流の使ひ手ぢや』

『何はしかれ、斃れて後已むの精神は偉い、暴擧には相違ないが、斯ういふ事が度々

あると、天下の志士浪士は益々多くなるであらう、惰眠を貪る奴等にはよい警鐘ぢや』

『國々にはまだ幾人の安藤對馬がある、それらの腹の底は冷たくなつたであらうな』

兩人は顔を見合せて哄笑したが、龍馬は詞を改めて

『これが久阪よりの返書ぢや、會つてみると案じの通り熱烈火のやうな勤王家ぢやつ

た、十四日に行つて翌日は明倫館へ伴れて行つてくれ、何かと世話をしてくれ、彼

の云ふのには、諸侯方も恃むに足らず、さればとて公卿方も恃むに足りない、此上は

天下の志士が一團になつて義軍を起さうといふのぢや、薩州の樺山からも久阪の許へ

書面が再々來たが、薩州は當藩や其他とは異つて志士の勢力がなかく盛んぢやとい

ふ、然して薩州では後見島津久光公が近く上京されるといふ話もあるさうぢや、長

州は相變らず長井雅樂が公武合體を説いてゐるので、久阪は非常にその事を焦慮して

居つた、萩には廿二日まで滞在したが、それから京阪へ行つた、大阪へ着いたのが二

月の中旬であつた、どうも京都大阪は思つたよりも諸國から志士が集つてゐる』

『どんな模様ぢや、何か噂はなかつたか』

半平太は思はず膝を進めた。

『京都に居る諸國の志士は久光公が上京されたならば、これを機會として事を舉げ

やうというてゐる、筑前の平野次郎を始め、名ある志士が大分入込んでゐる模様ぢや、

そうして密かに中山大納言殿の雜掌田中河内介殿など、欸を通じてゐるとの風説もあ

る、このやうに志士が多くなつたなら幕府も何とか公平な處置をせねばなるまい』

半平太は龍馬が齎した久阪の書面に依つて、長藩の事情が明瞭になつた、そうして

京阪の同志の消息も聞く事ができた、然しながら久阪の書面中にある志士糾合義軍を

舉げやうといふやうな事は、まだ半平太の同意し能はざるところであつた、半平太の

心の奥には土藩の全部を勤王黨たらしめやうといふ希望があつた、陣容全く整はざる

うちに、姑息的な手段を以て回天の業を爲さうといふのは、その結果が徒らに破壊的行動に終るのみで、好果を得る事は爲きまいと思つた、それよりもまづ土藩全體をして勤王の志あるものと爲さしめ、大義を以て藩廳に迫り、然して後正々堂々、薩長と共に相應呼して事を爲さうといふのにあつた。

『龍馬、貴公は現の形勢を何と見る』

稍久くしてから半平太は斯う云つて、龍馬の顔を見守つた。

『勿論猶豫すべき時ではあるまい、が、わしの考へでは薩長二藩も藩内は勤王家揃ひといふわけではない、毛利慶親公にしたところで、島津久光公にしたところで、云はば無事に解決を着けやうといふ御意嚮らしい、公武の間を緩和しながら幕府に向つて注意を促さうといふ所存らしい、これが能ければ此上もない事ぢやが、それでは天下の志士が承知すまい、我々にしたところが、そんな手温い事は此場合に採るべき手段ではあるまいと思ふ、よろしく蹴起して斷乎たる處分をせずばなるまいよ、彼の櫻田事件から今度の坂下門事件で、天下の趨勢は略推察する事が能きるではないか』

『では貴公も匹夫の勇を逞しく仕やうといふのか』

『さうではない、然し日和見をしてゐる機ではあるまいと思ふ、幕府を倒す倒さぬは我輩の敢て關するところではない、そんな事よりも勤王の志を鼓吹せねばならぬ、それには一國にジツと閉籠つてゐては駄目ぢや』

『よし、解つた、貴公の志の存するところはよく解つた、ともかく明日の晩同志の者を集つて貰つて、一同の意見を聴いてみよう』

その夜更けてから龍馬は歸つて行つた、半平太は龍馬が今度の視察に依つて、龍馬の心の奥に今までにない動搖が起つてゐるのを見破つて終つた、そしてそれは龍馬として當然起るべき衝動であると思つた。

翌晩武市の家には同志の面々が續々詰かけて來た、武市は一同に向つて各自意見のあるところを述べてくれと云つた、一座の面々は、一人として勤王の志厚くない者はないが、その内でも色別すれば個々各々色彩が異つてゐた、或者は熱血迸るが如く、一度手を觸れたら忽ち爆發しさうな者もあつた、或者は火の如き思ひを内に包含んで、

平然腕を撫すと云つた沈勇の者もあつた、或は又、機はいまだ來らず、よろしく持久して機會の至るを待つべしと云ふ遠謀の者もあつた、さうかと思へば、一徹短慮、何でもよいから破壊しろ、破壊の後でなければ何事も生れて來ないといふ過激主義もゐた、それを警むるに卓越した議論を吐く辯舌の者もゐた。

斯うした種々なる志士を高所から睨と睨んで、適材を適所に用ゐやうと云ふのが、首腦者たる武市半平太の手腕であり且つ責任であつた、今夜斯く一堂に集めたのも、半平太に深く意の存する所があるからであつた。

『先生、あなたの御議論も拜聴したいものです』

後の方に居た同志の一人が突然斯う云つたので、半平太は言下に答へた。

『わしは議論も策謀もない、唯勤王の大義を行はうとするのみちや、貴公等も皆わしと同じ意見で、何れを是とし何れを非とするのではあるまいが、苟も志士たるものが目前に焦慮して大義を忘れてはならん、よろしく正々堂々とやるべしちや、貴公等は自分の善いと思つた通りに行りたまへ、わしは決して是非は云はぬ、然し一言して置

くが、一人で相撲は取れぬ、一致團結してこそ大義に準ずる事が能きるのでちや』

『然し先生、當藩では我々が勤王を唱へ大義に準じやうとしてゐても、肝腎の吉田如きが上にある中は何にもなりません』

同志の吉村寅太郎といふ青年が突然斯う云つた。

『さうぢや、我々はまづ勤王の大敵たる吉田を斃さねばならん、先生が彼を説いても彼は耳をも傾けなかつた位ぢや、そんな奴はよろしく誅戮して藩を脱げやう、そして一日も早く義擧の同志に投じなければならん』

宮地宜藏といふ青年は吉村に同意して斯う叫んだ。

『彼は勤王の敵ぢや、幕府の狗ぢや、速かに打懲せ』
血氣の連中は口々に云つて一座は騒然殺氣立つた。

三

龍馬の兄の権平は、藩廳から歸宅するなり龍馬を己が居間へ招んだ。

「龍馬、今夜は些しお前に話したい事がある、まア茶でも呑みながら話さう」と静かに云つて傍にあつた茶道具を引寄せた。

「わたしも兄さんにお話したい事があります、今夜か翌の晩でも申上げやうと思つてわたところで恰度よい機会です、まア兄さんから話なさい」

「さうか、お前もわしに話したい事があつたか、ではまづお前の話から聞かう、わしの話は今夜に限つた事でもない、さうしてどんな事ぢやな」

「兄さん、わたしは國を出たいと思ひます、當藩を脱げたいと思ひます」龍馬は平然と斯う云つた。

「なに藩を脱げたい、それは何故ぢや」

「わたしは天下の爲に働きたいと思ひます、一藩にジツとしてゐては何事も能きません、國を出てもつと廣い世の中へ行きたいと思つてゐます」

「わしが今夜お前に話さうと思つてゐたのも、要は其所ぢや、此間中から所用といふて旅へ行くのは何の用ぢや、いやそれは訊かずとも大抵解つてゐる、お前は下らぬ浪

士達と交際つてはならぬぞ、近頃天下の志士と稱する者が彼處にも此所にも出来たやうぢやが、そんな者等と一緒になつて、輕卒な事をしてはならぬぞ、わしは藩廳に仕へてゐる身ぢやから云ふのではないが、苟も當藩に住んでゐる者は藩主の命に従はねばならない、藩王の意に違背した行ひを爲るのは、藩主に對して刃を向けるも同じ事になる、お前はまた年も若い、一國の政治を論じたり、國事に奔走するには早い、殊に近頃は幕府の志士や浪士に對する處置が厳しくなつて、見つけ次第どし／＼牢へ打込まれるといふ事ぢや、お前なぞも無暗に飛歩いて同類と見做されて見ろ、それこそ牢獄に投せられねばならぬ、萬一そんな不慮に逢つた時には、お父さんに對して何と申譯をする心ぢや、悪い事は云はぬ、國を飛出すなどといふ心を改めて、兄弟三人仲よく暮らさうではないか」

温厚な兄の權平は、弟の奔放な性質を心から心配して、種々に説き戒めた、然しながら龍馬の器は兄の權平よりも遙かに大きかつた、兄の云ふ事は平凡な人間の口から洩れる平凡な縁言に過ぎない、世の中を安穩に送るといふのが能事であるならば、勤

王も倒幕も何もない、権平は龍馬が浪士輩と見誤られるのを氣遣つて、その輕舉を戒めたのであるが、龍馬の心事は、そんな些細な問題に拘泥すべくあまりに桁外れてゐた。

『兄さんの御親切は厚くお禮申上げます、然しわたしは何うしてもヂツとしてはゐられない性分です、太平無事な世であるなら兄さんの御意見にも従ひますが、世の中がこんな風に騒がしくなつて來ましては落着いてはゐられません、どうぞわたしの思ひ通りにさせて下さいませんか』

『可けないく、お前が世の中に活動するのを止めるではないが、物事には機運といふものがある、機が熟さぬうちに徒らに妄動するのは、自ら火中に飛込むやうなもので、決して思慮ある人の爲べき事ではない、君公の御意もある、君公のお心の赴くに従つて事をするのが家來として盡すべき道ぢや』

『わたしは君公に背かうとするのではありません、わたしには大きな國家といふものがあります、日本の國體といふものを考へねばなりません』

『それは立派な議論ぢや、何人も口にするところの議論ぢや、然し血氣に速る若い人達は、どうも議論と實際と伴はぬで喃』

『では御承知下さいませんか』

『まづ止めたらよからうよ』

兄は龍馬の乞を聞き入れさうにもなかつた、龍馬も兄の意見に服従しさうにもなかつた、その夜はその儘うやむやのうちに床に就いた。

翌日権平が藩廳へ出仕すると間もなく、龍馬も何處かへ出て行つたが、ものゝ二刻も経つた頃飄然と歸つて來た。

『姉さん、姉さん』

格子を開けるなり龍馬は姉の乙女子を呼んだ、勝手元で晝の支度に取り掛つてゐた乙女子は、龍馬に似た、女としては大き過ぎる身體を半分ばかり現はして

『龍馬さん歸つて來たの』と云つた。

『姉さん、御用が済んだら一寸來て下さい、些し話があるから』

「今お晝の支度をしてゐるところ、お前とわたしと二人限りだから、別に急がなくともよいのだよ、さうしてどんな用なの」

「今朝権兄さん、姉さんに僕の事で何か話がありましたか」

「いゝえ、別に……」

「姉さん、僕は今年廿八になりました」

「お前が廿八になつた事は解つてゐますよ」

「男子が廿八になつて碌々として家の中に閉籠つてゐる奴がありませんか」

「お前は國を飛出したいのだね」

「乙女子は笑ひながら事もなげに斯う云つた。」

「姉さん、さうです、さうです、姉さんは僕の心の中を御存知、決して反對は唱へませんな」

「事に依つては反對を唱へます、然しお前の事だから阪本の家名に關はるやうな事はすまいと思つてゐます」

「姉さんどうか僕に暇を與へて下さい、實は昨夜兄さんにお願ひしましたけれど、兄さんはあゝいふ眞面目な方ですから、どうしてもお聽入れ下さいません、兄さんの命令に反くのは實に辛いのですが、さればとて此儘ヂツとしてはゐられません」

「それ下何處へ行くつもりなんです、京都ですか」

「姉さんも御存知の吉村が藩を脱して、今は馬關邊に居るでせう、まづ薩州へ行かうかと思ひます」

「國家の爲にお働きなさい、あたしは女だから役に立たないが、お前は此家の相續者といふではなし、充分に活動する事ができます、お前旅へ出ればお金が費ります、それは用意してあるのかい」

「さア、それです、實はまだ用意をして居りませんが、どうにか調達しやうと思つてゐます」

「お朋友の所などを借り歩くのはおよしなさい、龍馬は諸方に借錢をして國を脱けたと云はれては家の名に關りますよ、斯うお仕なさい、家の親類の廣光左門さん、彼處

へ行つて頼んで御覽」

「でも平素あまり参りませんのに、こんな場合に行くのは……」

「關ひません、彼處なら必とどうかしてくれませう、お前でいけなければあたしが行つて借りてあげようか」

「いえ、それでは恐入ます、僕が参りませう」

「そうして誰か國を脱けるお伴れでもあるのかい」

「同志の澤村總之丞といふ者と参ります、翌日の晩あたり脱けたいと思ひます」

「ではお前にお餞別を上げませう」

乙女子は斯う云つて立上ると、奥の間の箆筒を開けて一振の刀を持つて來た。

「これは阪本家に傳はる刀、これをお前に上げるから亡きお父さんと思つて、肌身離さず持つてゐておくれ、わたしも男ならお前と一緒に行きたいがねえ」

乙女子は輝く眼で龍馬を凝と見た、別れを惜しむ情愛よりも、共に天下に雄飛したい猛々しい心が眼先にちらつ

い猛々しい心が眼先にちらつ

「姉さんは權兄さんのお傍にゐてお世話を願ひます、何處に行きましても、必ず住所を知らせますから、手紙は始終下さいまし」

斯くして龍馬はその日親戚廣光左門を訪ひ旅費として金十兩を借用し、同志澤村と共に丹川の國境を越えたのは、實に文久二年三月廿四日の夜であつた。

英雄と英雄

—

龍馬は澤村總之丞と一緒に馬關に着くと、薩商白石正一郎を訪ねた、この白石といふのは商人でこそあるけれど勤王の志が厚くて、廣く各藩の志士と志を通はしてゐるのであつた。

で、この白石を訪ねたのは、先に土藩を脱出した吉村寅太郎の所在を訊きたい爲であつた、然し龍馬が行つた時は、既に舟路を大阪へと旅立つた後だつた。

「致方がない、君はこれからすぐに京都へ行つて京都の動靜を探つてみてくれ、何れ

大阪か京都で會ふ事にする』

龍馬は總之丞に斯う云つた。

『君は何處へ行くのぢや』

『乃公か、乃公はこれから九州を遊んで歩く』

『それでは一と先別れやう、國の爲隨分道中氣をつけてくれ』

斯くて兩人は西と東とに袂を別つた、龍馬はすぐその足で豊前豊後、筑前筑後、肥前肥後と漂浪に似た旅を續けた、そして薩州に入らうとした時に、薩の關門が非常に嚴重で何うしても入國を許さない、此時分は國々に他國人を猥りに入れぬ掟があつたからであるが、龍馬にしては殘念の極みであつた。

此上は止むを得ないから大阪へ行かうと、道を山陽道にとつて泊りくを重ねて來たが、土佐を出る時は僅に十兩の金を懷中にして來ただけであるから、歸路には既に無一文になつて了つた、例に依つて道場荒しを行る、野宿をやる、山中に夜を明す、郷關を出た時滿開であつた櫻も、九州から遙々大阪へとやつて來る間に、すつかり葉

となり、藤の花も菖蒲の花もいつか花が無くなつてゐた。

爾うして旅宿三文字屋に着いたのが六月十一日の正午であつた、とりあへず長道中の汗を宿の風呂で洗ひ落し、早速使を住吉の陣營に立てた、同志の一人田中作吾が日が暮ると間もなくやつて來た。

『君が郷里を出立されてからえらい事件が起きたぞ』

作吾は、一別以來の挨拶もそこ〜にまづ斯う口を切つた、旅装を宿の着物に着替た龍馬は大胡座に打寛いで盃を手にしてゐた。

『到頭行りをつた』

作吾は手眞似で刺すやうな振をして見せた、龍馬の眼は屹と据つた。

四月の八日、彼の吉田東洋を帶屋町の街上で、那須信吾外十餘の志士が襲つて目的を果した、藩廳では流石に狼狽したが、刺客はすぐに捕はれて了つた、そして、何も知らずに九州路をぶら〜歩いてゐた龍馬にも、嫌疑が掛つてゐるといふのであつた。『君が藩を脱げると間もない事件であつたから藩廳でも自然もいやといふ疑ひを掛け

てゐるのであらうが、あまり疑念が深過ぎるではないか、ちやが、油断はならんぞ」

「爾うか」

龍馬はたゞ一語爾う云つてヂツと考へてゐたが、自分に疑が掛つてゐるといふ事なぞには大した動搖も感じなかつた。

「それはそれでよいとして、京都の形勢はどうぢや」

「それが又大變ぢや」

幕府の態度に憤慨した諸國の志士は、云ひ合したやうに大阪に集まつて来た、薩の久光公は櫻田の一件以來、自國でも血氣の者が立騒ぐのを知つて、之を鎮撫る一方、暫時世の形勢を望観して居つた、然し刻々險惡に傾いて行く世の態を見ては、もはや猶豫の期でないと思つて深く心に決して上京の途に上つた、諸國の有志等は、薩公の上京を機會として事を京師に擧げやうと考へた。

早くもそれと察した薩公は、萬一の事があつてはといふ懸念から、薩州から引率して来た兵士の半を大阪に残し、四月の十六日に上京、近衛忠房卿の手を経て、幕府の

政治を正し、併せて人心を慰撫されたしとの意見を上奏した。

然し諸藩の有志の意氣は天を衝くの勢であつたから、到底成行を待つなどの餘裕を持つことは能きない、遂に二十三日に及んで平野國臣、眞木保臣、小河一敏等憂國の士を始め薩藩では有馬新七、田中謙介、柴山愛次郎等總勢八十餘人の者が武器を携へて伏見まで押寄せた、云ふまでもなく、所司代酒井忠義等を襲撃しやうといふのである。

此急報を得た久光公は、その急激盲動を心から怒つた、忽ち命を下して大山格之助、奈良原喜八郎等八人の勇士を撰抜して伏見へ立向はせ、茲に寺田屋騒動の一幕が演じられ、有馬新七、田中謙介等八人は此の騒動の犠牲となつて漸く鎮壓する事が能きた。「要る所が、薩藩の議は一橋公(慶喜)越前公(春嶽)をして幕政を輔け、公武一致して國是を定めやうと云ふにあるらしい、長藩の議は將軍上洛の儀式を復活して公武一致の政策を建てやうといふにある、ところがちや、諸國の有志はこんな手温い政策では駄目ぢやから、幕府の病氣を根元から革正さねばならん、そして直ちに攘夷を

決行して國勢を挽回せねばならんと云ふのぢや、現下のところでは此三つの議論が巴のやうになつて、何れを何れとも定まり申さん
 作吾は詳細を報告し終ると、冷たくなつた酒を一息に呷つた、龍馬はたゞ黙つて聞いてゐたが、敢て自説を陳べるでもなかつた。

二

「まアあなたは阪本さんではございませんか」

「栗田口は知定院といふ寺の庫裡の入口に立つた龍馬を見て、檜崎の長女龍子は驚愕のあまり叫ぶやうに斯う云つた。

「久濶、まづお變りもなくておめでたう」

「ともかくもお上り下さいます、母は生憎他出して居りますが間もなく歸つて参ります」
 龍子は先に立つて案内する、奥まつた八疊の座敷——そこには古びた道具類が雑然

と置かれ、見るからに窮狀に在る事が解つた、龍子はつぎの當つた煎餅坐布團を勧めながら、久しく會はなかつた龍馬に對し、其後自分等の境遇があんまり變轉し過ぎてゐる事を、どういふ風に説明していかを思ひ感つた。

檜崎將作が、閻老井伊に依つてなされた戊午の大獄の難を蒙つて獄に投せられた事、獄中に病を得て牢死して了つた事などは、既に龍馬は承知してゐた、今度京都に足を踏み入れるなり、まづ第一に檜崎家を見舞ふといふのも、實はその遺族を慰めんが爲の厚情に他ならなかつた。

然るに舊宅を訪れると、知らぬ他人が顔を出して一向に存せぬと云つた、それからそれへと訊き合せた結果、漸く檜崎家の菩提寺たる栗田口の知定院に身を寄せてゐる事を突き止めた。

「概略の事は聞いて知つてをりますが、實に何ともはやお氣の毒千萬、して當院には母上とあなたとお二人ぎりか」

「いえ、弟が居ります、然しそれはあとでゆる／＼お話を致します、何はともあれよ

くお訪ね下さいました、その篤きお志一、生忘れは致しません』

龍子は堪へきれぬ涙を袖でソツと拭いた。

「當節柄の事、實に口へ出して申すも情ない事のみで、お互ひに残念の至りぢや、母上始めあなた方にも、さぞお力落しでせうが、これも運命と断念るより仕様がな、唯懸念さるゝのは…… 其後どうして暮して居らるゝかといふ事ぢや」

「はい……よくお訊ね下さいました」

龍子は斯う云つて頭を下げたが、流石頓には云ひ出しも得ず、逡巡と躊躇つてゐた。

「いや、これは甚だ立入つたお訊ねをして濟まぬ、その邊の事情、お訊ねするまでもなく、略推察も出来ませんが、あまり懸念故に遂餘計な事まで云ふて了ふた、然し母上は御老體、御令妹や御令弟はまだお弱年、失禮ながら御遺族はあなたが背負つて立たれねばならぬ破目に立至つてをる、お氣の毒ぢや、お察し申します」

「阪本さま、よく有仰つて下さいました、只今あなたの有仰る通りの仕儀で、父の亡くなりました後のわたくし共の境涯、とても口へ出して申上げる事の能きぬ苦勞を致

してをります、斯の様なお恥かしい所をお目に掛けたくはございませんが、これも運命とやら申すのでございませう、どうかお許し下さいまし」

「なんのく、そんな御遠慮には及びません、女子の身で……あなたなればこそぢや」

「阪本さま、そんなに有仰つて下さいますと、滾すまいとする涙が自然に出てまゐります、然し世の中といふものは、つくく薄情なものといふ事が、父の亡くなりましてにつけてよく解りました、父が存命中は何やかやと出入りをしてゐた者も、父が牢屋入を致しますと、馳の道を切つたやうに來なくなりました、それも世間を憚るものと思へば、強ち無理とは存じませんが、父が亡くなりますと共に、今まで來なかつた親類の者達が俄かに世話を焼きに参りました、然しそれは、親切からではございませんでした、父の存命中、道樂に致してをりました骨董の類を目掛けてゐたのでございませう、爾うして葬式などの混雑紛れに、目星い物はみんなぬすまれて了ひました」

「なるほど怪しからぬ」

龍馬は思はず膝を乗出した。

「家屋敷も弱り目に附込んで安い／＼價で賣らねばなりませんでしたが、それでも當分はその賣代で親子がどうにか生活して居りましたが、世の中はだん／＼物騒になるばかりで、始めの程は生花や茶の湯などを看板に活計の足しにも致してをりましたが、それも駄目になつて了ふ、僅か残つた道具、着衣、だん／＼と減る一方です、そうかうするうちにわたくしと妹二人は奉公に出ました」

「奉公に……」

「はい、お恥かしい話ですが、爾うしなければ母を養ふ事さへ能きなくなつたのです」

「御尤ぢや」

「するうちに母が病氣に罹りましたので世話をする人が入用になりました、妹では充分に面倒を見る事も能きず、兎も角もわたくしは奉公先から暇を取つて歸つて参りましたのが、つひ二十日ほど前の事でございます」

「重ね／＼の御不幸、弱り目に祟り目とでも申すのでせう、實は知人の者から父上が斯々の次第と聞及びましたので、心に掛りながら遠國の事故どうする術もなく今日に

及びましたが、左様までに御窮迫とは夢にも存じませんでした、すると當院には母上と太一郎殿とがゐられるのぢやな」

「左様でございます、お陰で母の病氣も十日ばかりで全癒りましたが、年を老つたせいか、わたくしが奉公に出ますのをひどく心細がりました、どうか家にゐてくれと、手を合さなければかりに申しますのでつひ／＼斯うしてをりますが、針仕事位の事では到底三人の糊口を支へて行く事は能きませんから、母にその旨を申し含めまして、も一度奉公に参らうと思つてをります」

「なるほど、よくお打明下された、然し御安心なさい、僕が爾う承はつた以上は、決してその儘には致して置かん、亡き父上には、江戸への往復の度々に御厄介になりました、その恩の萬一をも報ずるのは斯ういふ機ぢや、と云ふて、僕も郷里を脱け出して九州まで歩き廻つて來たのぢやから、多分の持ち合せとでもありません、が、當座の間に合せ、ほんとに當座の間に合せにして頂く位なれど、何も寸志、心よく收めて頂きたい」

龍馬は爾う云つて、住吉にゐる同志から借り受けた若干の金を懐中から出して龍子の前に置いた。

「まア阪本さま、そんな事をして頂くのは御免蒙ります、それではお恥かしい事情をお話致しましたのが、何だか同情をして頂く爲にお話したやうになります、わたくしさへ奉公に出ますればどうにか生活は立つと思ひますから、どうぞそのやうな事はなさらなさいで下さいまし、あなたがわざ／＼お訪下さいました御厚意だけでも、わたくし共にとりましては此上もない有難い事と存じてをります、それにあなたも御國の爲、何かと御用の多いお身の上、その御厚意だけを有難く頂戴いたします」

龍子は凜乎として辭退した。

「あなたの御氣性としては爾う有仰るも御尤ちやが、目前に要るのは僕よりもあなたの方の身の上ぢや、僕も父上の御靈前に供へて頂く事にする、それならばお收め下さるぢやらう、差當つての入用のみと思ひ、少額で失禮とは存するが、兎も角、御靈前へお供へを願ひたい」

「阪本さま、何も申し上げません、龍は嬉しう存じます、では折角のお言葉故、改めて頂戴いたします、亡父もさぞ草葉の蔭で喜ぶことでございませう」

流石に男々しい龍子も、張り詰めてゐた氣が一時にゆるんで、そこへ泣伏して了つた、龍馬もその可憐な態を見ると、顔をそむけずにはゐられなかつた。

「母上にもお目に掛つて御見舞を申上げたいと思ひますが、實は知人と約束の時刻もありませんので、今日はこれでお別れします、どうか母上にもよろしくお傳へ願ひたい」

「左様でございますか、折角御出下さいましたのに……」

「今度はいつ來るといふ日も決められませんが、いづれ必ず参りますから、どうかそれまではどうとも致して此寺におゐるで下さい、必ず御令妹の身の上もよいやうに取計ひますから」

「有難う存じます、どうぞ此様な所でございしますが、お暇もございましたらお出を願ひます、母と弟とは、假へ命にかけても養つて参る覺悟でございします」

斯くて龍馬は同志大石彌太郎の旅宿を訪ふべく龍子に別れを告げた。

三

京都の朝廷に於ては、長藩の建議たる將軍をして諸侯を率ゐ上洛せしめ、以て大ひに國是を議定すべしといふ事、薩藩の建議たる一橋刑部卿を後見とし、越前々中將を大老として幕府内外の政を輔佐すべしといふ事、諸公卿並ひに平野國臣等の建議たる、豊臣の故事に依つて、沿海の大藩五國を五大老として以て國政を決すべしといふ事、此の三建議に就て種々御協議を遂げられた結果、薩藩の建議を以て江戸幕府に傳へしめよといふに一決した。

そこで勅使大原重徳は島津久光公を隨伴江戸へ向けて出發したのが五月二十二日であつた、そして六月七日、江戸へ到着した、その結果として七月一日、幕府は勅使に奉答、慶喜公を將軍後見役とし、松平慶永を政事總裁とする事になつた、隨つて幕府は非常な大改革を行はねばならない事になつた。

戊午の大獄以來、國事の爲に罪せられてゐた藩士は特に赦免せられる、前に閣老で

あつた安藤對馬守、久世大和守などは謹慎の身となる、反對に水戸齊昭公には追贈の御沙汰が下る、三條實萬公には左大臣を追贈せられると云つたやうに、昨是今非と世の中が變轉して來た。即ち尊王論の勢力が漸次威大になつて來たのであつた。

大原重徳、島津久光は無事勅命を全うして江戸を出發したのが八月二十一日、京都へ着いたのが閏八月七日、同じ二十三日には島津公は薩摩へ歸つて了つた。

それは土藩主たる山内容堂侯が高知から上京するに及んで、長土聯合が成立した、そして猛烈な攘夷論を奏上する、薩藩は終に閣下を辭するといふやうな形勢になつた爲である、長藩で最も活躍し、殆んど攘夷論の中心ともなつてゐたのは、久坂玄瑞、寺島忠三郎等の有志であつたが、これら急劇黨の勢力は侮り難い強さを以て京師の空氣を震動させた、

斯うした騒ぎを目前にしてゐながら、龍馬は江戸へと下つて行つた。

江戸の街には七夕祭の竹が軒毎に立てつらねてあつた、龍馬は品川の宿から、鍛冶橋外桶町に住んでゐる千葉重太郎といふ劍客の門を訪れた、千葉はその頃、幕府の軍

艦奉行をしてゐる勝安房守の門下であつたが、勝は有名な開國論者で、其説に對しては反感を抱いてゐる者も尠くなかつた、土藩邸にゐる者の中でも、勝をよく云はない人があるので、龍馬は或時千葉に勝の人物を訊いてみた。

「種々に評する者もあるが、僕は先生を偉い人物だと思ふてゐる、敬服すべき人だと信じてゐる」

千葉はよほど尊敬してゐるらしい口調で云つた。

「然し世の中の評判を聞くと、あまりよく云ふ者はないぞ、やはり幕府に使はれてゐるやうな奴だから、夷狄の技に畏服してゐるのではあるまいか」

「先生は幕府の役人ではあるが、云ふ所は國家を思ふ志士と變りはない、僕の云ふ所が間違つてゐると思ふなら、一度僕と一緒に行って、先生に會つてはどうぢや」

「よしッ、行かう、行つてどんな人物か見てやらう、仕儀によつては國家の爲に切捨てゝ了はねばならん」

「まづ會つてみるがよい、世間でいふやうな人物とは少し異ふぞ」

斯んな談話の末に、では今夜一緒に行かうといふ事になつた。

勝安房守といふ人は、井伊大老が萬延元年に、軍艦奉行、外國奉行以下二百餘人を遣米使として米國へ派遣した事があつたが、その時に渡米して、親しく米大陸の文明を見て來た人であるだけに、時勢を観るのに大きく觀てゐた、随つて開國を説き、兵制の改革、航海學、砲臺築造術などを講じて、専ら諸藩の有志を養つてゐた、そんな風だつたから、今日で云へば急進派とか過激派とかに、誤解せられ易い立場に身を置いてゐたので、どうしても攘夷黨の連中からは疑念に包まれ、徒に夷狄かぶれがして見えたのであらう、龍馬も要するに一派の奸物であらう位に思つてゐた。

赤坂永川町の邸宅を訪れた龍馬は、下婢に案内されて一室に通つた、その室は安房守の居間の次間になつてゐた、龍馬は未見の人物の相貌などを心の中に描きながら寸時待つてゐると、次の間から「こちらへ入りたまへ」と聲をかけられた。

先方は兎も角軍艦奉行といふ役を持つた先輩者であるから、禮義として刀を其所へ置き無腰のまゝで次の室へ進んだ。

「待ちたまへ、君は何故帯刀を持つて来ないのぢや」

「始めてお目に掛る貴君に對して失禮と思ひましたから」

「當今の時節はそんな禮義を重んじては居られぬ程危険な時節ぢや、何時不慮の災難に會はぬとも限らん、其やうな場合に、武士の魂たる刀が無かつたら忽ち一命は失くなつて了ひますぞ、刀を持つて入りたまへ」

龍馬はちよつと先手を打たれたやうに感じた、出る鼻を挫かれたやうに思つた。

「はッ」

なんだか斯う、大きな、抵抗し難いやうな力強さで壓しつけられたやうに、そのまますつと居間へ押進んだ、然し心の奥では、何糞、そんな語位で敗は取らないぞ、ごまかさればせんぞ、と自分で自分を勇氣づけてゐた。

「僕は士州藩の阪本龍馬と云ひます、先生の御門弟子葉重太郎からは、平素先生のお話も聞いてをりますので、一度御面會して親しく御高説を承はりたいと思つてやつて来ました」

「よく來られた、然し足下が今夜なんの爲に來られたかといふ事は、わしにはちやんと解つてゐる、足下は自分の顔を鏡なしで見ると事は能きまい」

龍馬には勝の云ふ言葉の意味が、あまりに突飛なので呑み込めなかつた。

「足下は今夜次の間へ刀を置いて來る人ではない、おそらく膝脇へ大刀を引つけて置

かなければならない筈ぢや、足下は今夜わしを殺しに來たのぢやらう、その眉、その眼、殺氣に満ち充ちてゐる」

「いや、何も必ず……」

「解つてゐる、然し阪本さん、まづ聞きたまへ、わしは決してそれを恐れるのではない、人間の生死は、これ畢竟するに命だけの問題ぢや。わしは命の事などは考へる必要はない、殺したければ殺すもよい、殺されもしやう、ぢやが、その前にまづ我輩の議論を聞いてくれたまへ」

勝は斯う前置詞をしてから、外國へ行つて親しく見聞して來た所を滔々と説き出した。歐米の海陸軍が日本人の豫想だにもなし得ぬ程發達してゐる、假りに外國を對手

に戦争をするとしても、到底段違ひの勝負を見るのみならず、その結果は暗黒な日本に變つて了ふだらう、攘夷を斷行するなどと云ふのは、歐米諸國がどんな文明國であるかを知らない人の云ふ事で、世界の太勢は日本の國に居据つてゐたのでは解らない、攘夷論などは棚の隈に收つて置いて、まづ第一に日本の海軍を擴大し、日本の兵制を改革し、日本から進んで歐米諸國に交易を求めなければならぬ、而して外國の短を捨て長を取り、我國を富ます方法を考へなければならぬ、往時ならば一騎打の勝負を争ふ事もできたし、又人間の力と力とを戦はせる事もできたが今日の世の中は人間の頭腦で戦ひ、金で戦ふのである、智惠の多い人間が勝利を占めるのである、だから、外國の奴等を敵とするには、それだけの準備をしなければいけない、現今の日本の状態は、その準備が一つも整つてゐない、足下等はわしの云ふ開國説を誤つて解くからいけない、開港するのは外敵から要求され、外國が怖しいから屈服して開港するのだと思ふからいけないのだ、彼等の長所を日本に奪ひ取る爲に開港するのだと思へば何も立騒ぐ事は少しもない、彼等だつて、日本に交易を迫つて日本の物質に接し、自分

の短所を捨てやう爲なのである、つまり智惠の双べくら、智惠の奪りくらをするのである。

『どうぢやらう、わしの議論は間違つてゐるだらうか、もしわしの論が貴意に満たぬ點があるならば、足下の議論を拜聴しませう、わしよりも足下の議論の方が正當であつたなら、わしは心よく足下の刃の下に斃れやうではないか』

勝は斯う云ひ終つて龍馬の面の正面から凝と睨みつけた。

龍馬は殆んど勝の明晰な議論に魅せられて了つた、唯恍然と聞惚れてゐるのみだつた。一言半句をさしはさむ餘地などはなかつた。

『先生』

龍馬は叫ぶやうに斯う云つて兩手を支いた。

『先生の御高説、盡く敬服致しました、實は豫ねて先生の開國説なるものを世上の人から聞いて、失禮ながらそれだけの御高説とは思つて居りませんでした、今夜お訪ねしたのは、先生がお察しの通り、御議論の如何に依つては唯一刀の下に……いや、我

ながら恥ぢ入り申し、龍馬始めて夢の醒めたやうな思ひが致します、今日唯今より先生の御門下にお加へ下さい」

「阪本龍馬君、足下はわしと一緒に大いに國家の爲に盡す考へがあるかな」

「あります」

「よろしい、今後は共に働かう」

勤王黨からは蛇蝎の如く云はれ思はれてゐる幕府、その幕府の權職にある勝安房守と、満身これ勤王とも云ふべき龍馬とが師弟の契約を結ぶ、英雄は英雄を知るとはこのことであらう。

勝 と 龍 馬

龍馬が安政元年に江戸から歸國する途上、海上遙かに黒船が走つてゐるのを見て、その雄大な武器に舌を巻いて驚き、輕卒に攘夷論などを云々すべきではないわいと思

つたことがある、勝海舟の説を聞いた龍馬は、自分の浅見を自嘲すると共に益々勝の言葉に同感して了つた、一も勝、二も勝、勝先生は確に自分の師事すべき人物、意を同じくするに足るの人物だと決めて了つた。

入門と同時にまづ航海學の研究を志した、すると恰度その年（文久二年）の十二月、勝は幕命を蒙つて、攝海を測量したり要所に砲臺を築く事になつた。龍馬は千葉重太郎や近藤和と共に幕府の軍艦迅動丸に乗込んで大阪へ急航する身になつた。

此の近藤和といふのは、龍馬の言句に啓發された焼つき屋の伴近藤長次郎の事で、今志を一にした者達と一緒に、航海の門出をするといふのであるから愉快に相違ない。

迅動丸は荒濤を突いて西へくと進んだ、嚴冬の海風は到底陸上では想像も及ばぬ程の烈しさであつた、と同時に、陸上では味はふことも能きぬ程壯快なものだつた、男子須く海上に出でよ、而して海の偉大さを見よとは、乗船してゐる龍馬等の等しく感ずる所であつた。

大阪の地を踏んだのが文久三年の一月元旦、世の中は物騒千萬、人心は恟々としてゐるけれども、御代萬歳を祝ぐ門松だけは軒毎に立ちならんでゐた。

さて大阪へ入つて見ると、京大阪に在る諸藩の志士連中の鼻息の荒いのに流石の龍馬も一驚した。なんでもかんでも攘夷を決行しなければならぬといふのである、今日は誰々貴顯の門内に血みどろになつた首を投げ込んだ、今日は難波橋の橋桁に生首が梟けられてあつたといふやうな不快な噂ばかりを聞く、京の東山は清水寺下の翠紅館といふ別荘は、これら志士や浪士の集會場所で、水戸、長州、土州、石州、對州、肥後、等の名ある志士が寄合つては時事を談ずる、一種の示威運動のやうなものだつた。

龍馬は既に去年の龍馬ではなかつた、大阪にゐる同志望月龜彌太、千屋寅之助、從弟の高松太郎などを引張つて行つて勝先生に紹介しその門下生にして丁ふ、攘夷なんて騒ぐのは時勢遅れだと説伏せて歩く。

さうかうしてゐるうちに、勝は新入門の望月、千屋、高松を連れて江戸へ歸る事になつた。

なつた、然し一月中には再び引返して來る手筈になつてゐたから、龍馬はそれまで京都に在る事に決めた。

然し唯一つ困つた事は、藩を無斷脱出したのであるから、目と鼻の間にある大阪の藩邸へも顔を出す事ができない、當時兄の權平は大阪の藩邸詰になつて出仕してゐたから、久しぶりに會つて郷里の話も聞きたし、姉乙女子の話なども聞きたかつたが、如何せん勘當同様の身分だから、京都の藩邸へも大阪の邸へも出入が協はぬ、唯人傳に消息を聞いたり、手紙に依つて僅かに慰むるより仕様がなかつた。

すると或日の事、千葉と一緒に大阪へ行つた時に、千葉の誘ふまゝに松平春嶽侯に面接した、越前侯と云へば勤王の志、最も篤い大名で、人物としても立派なものであることは、豫てから聞及んでゐたから、一度機會を得て馨咳に接したいと思つてゐたが、圖らずその機會を得たのは何よりも嬉しかつた。

春嶽侯とても龍馬の名、その人物などは夙に知つてゐて、脱藩後一定の住所とともなく、下らぬ浪人と一緒に思はるゝのを憐んでゐた折柄だつたから、兩人の訪問に對

しては手厚い待遇をした。

「貴藩主は江戸表御滞在中であるが、程なく上阪致さるゝであらう、どうぢや、余が
斡旋して歸藩の協ふやう取計ひ得させやうか」

四方山の話の末に、春嶽侯は斯う兩人に云つた、千葉は春嶽侯の察しのよいのに聊
か恐縮して「はッ」と云ふまゝ、差俯向いてゐたが、龍馬は敢て恐縮した態もな
つた。

「どうも藩邸の出入不自由なのは閉口致します、それに何かと不便の事も多いやう
ですから、いつそのこと爾うお願ひ致しませうか」

千葉はあんまり龍馬の言葉が偉さうに聞えるので、傍からちよいと袂を引張つて
は注意した、けれども龍馬は一向に無頓着だつた、然し春嶽侯は反つて龍馬の爾うし
た素朴な氣質が氣に入つた。

「よろしい、余が引受けて歸藩の取計ひを致さう」

二月に入ると江戸から容堂侯（土藩主）が上阪したので、春嶽侯は機を見て龍馬の

歸藩を周旋すると、老侯は笑ひながら苦もなく承諾して了つた、老侯が上阪の途中、
海が荒れたので伊豆の下田港へ泊つてゐた時、恰度東へ歸る勝安房守も下田へ上陸し
たので、期せずして落合つた、その折に勝は老侯の館へ行つての話の序に、大ひに龍
馬の凡才でない事を口を極めて推奨し、是非共脱藩の罪を赦して歸藩を協へさせたま
へと頼んだ。

大阪へ着くと又ぞろ春嶽侯の斡旋を受けたので、老侯も否やのあらう筈はない、そ
んな所から二月の十二日に大阪の藩邸に始めて足を踏み入れた。

二

「恙が歸つて来たな」

「誰だ、やア臆か」

臆は武市半平太、恙は龍馬、兩人は大阪の藩邸で久しぶりに面を突きのさせた。
「貴様は今まで何處を迂路ついてゐたのぢや」

「天下狭しと歩いてゐた、どうも陸上を歩いてゐたのでは狭苦しくていかんから、此頃は海の上を歩いてゐる」

「相變らず吹くぞく」

「君は關白に上書して、將軍の御上洛に先だつて攘夷を決定するやうに請願したと云ふがほんとか」

「久坂と肥後の 轟などと連署で請願した、そればかりでは不安心ぢやから、鷹司公御館へ推參して攘夷の期の日も早からん事を促して來たよ」

「君はそんなに攘夷に氣を揉んでゐるのか」

「宿なし浪人には天下の形勢もわかるまい、幕府の因循姑息を見い、我々が黙つてゐては國家が危くなる、貴様も落着いて考へろ」

「君は國家の危急を憂ひ、幕府の處置を奮慨するが、肝腎な事を一つ忘れてゐる、否、肝腎な事を一つ見落してゐるよ」

「何ぢや、何を見落してゐる」

「夷狄を見落してゐる」

「夷狄を見落してゐる者が攘夷を口にする事が能きるか」

「だから可笑しい、口に攘夷を唱へてゐる者が夷狄とはどんなものかを知らない。だから可笑しいのぢや」

「貴様の法螺も場合には面白いが、斯ういふ世の中になつて來てはさつぱり役に立たんよ、もつと眞面目に考へろ」

「その言葉は僅から君に差上げた位ぢや、僕は攘夷には賛成能きない、と云ふのは餘でもない、君は勤王の志士、まづ土藩を代表してゐるといふてもよい位な勤王家ぢやが、遺憾ながらまだ眼玉が小さい」

「吹きよるく」

「いや、吹くのではない、まつたくぢや、君等は日本といふ國ばかり一心になつて見詰めてゐるから、日本より他には何も見えない、もう些し眼玉を大きく開けて世界を見なさい、日本は世界の東に在る小さな國ぢや、日本を何層倍にしたやうな大國が、

世界には幾つもある、その大國は日本よりは學問も進んでゐるし、智惠も進んでゐる、従つて兵器武器なども日本人の知らぬ良い物を持つてゐる、そんな奴等を對手に戦争をした所で勝負は既にわかつてゐるではないか、僕が考へるには、まづ現在の日本は、奴等を對手に戦争をする準備を整へねばならん時ぢや、つまり智惠の準備、學問の準備ぢや、それをするには、どうしても彼等の長所を日本に取入れ、日本の短所を捨てて行く方法を採らねばならん、それにはまづ第一に開港する事、日本から進んで交易を求めのちや。さうして彼等のウンと蓄へてゐる金を日本へウンと取り込んで國を富ます、工業、商業、農業などが益々盛んになつて行く、爾うなれば何處の國が攻めて來ようと、一向騒ぐことも要らんわけぢや、僕は海へ出て見てなるほど世界は廣いものぢやといふことが明瞭とわかつた』

龍馬の云ふ所は、すべて勝安房守の卸物を賣捌くと同然であつた。

『どうも貴様の云ふ事は理屈には合ふてゐるが、徒に大言壯語ぢや、机の上の空論ぢや、さて實際に行ふ事はむづかしい』

あはれ龍馬の言は大言壯語として一笑に附せられて了つた、郷里にゐる時から、龍馬の云ふ事は一から十まで法螺で固めてあると思はれてゐたから、今更斯う云はれるのは敢て意外でもなかつたが、而かも龍馬の此言たるや、世界の太勢を坐ながらにして覺つた言葉であつた。

『君は去年の八月に薩州侯が江戸から御上洛の途中、生麥で事件が起つたのを知つちよるだらう』

『島津三郎の一件ぢやらう』

『さうぢや、二十一日の日に横濱に入港した英吉利軍艦から、幕府に向つて怪しからん事を要求して來よつた、なんでも先方の云ふには、その英人を殺した島津三郎を始め同類を捉まへて、英人の目の前で仕置をするか、さもなければ償金を五十萬圓出せといふのぢや、さうしてまだ其上に、鹿兒島に行つて島津家から被害者の遺族に對し、三萬圓の吊慰金を償はせるといふ條件ぢや、夷狄の奴は飽まで日本を馬鹿にしちよる、畢竟幕府が腰拔ぢやからこんな事を持ち込まれるのぢや、君のやうな悠長な議論を吐い

てゐると、いまにどんな條件を云ひ出されるかわからん、我々有志の者が攘夷〜と
やかましく云ふのも、徒に騒ぐのではない』

『それは解つてゐる、君等が云ふ攘夷論がいけないとは云はん、なるほど事件は目前
に迫つてゐるさ、聞けばその回答期限も二十日間ちやといふから、三月の十日頃まで
には何とか回答せねばならんさうぢや、然し僕が云ふのは、さういふ枝葉の問題では
ない、それらは償金を出せば済むのぢやが、爾ういふ侮辱を受けても、すぐに跳ねつ
けるだけの用意をして置かねばならんといふのさ、それには第一近海の防備をせねば
ならん、軍艦を造らねばならん、軍艦を操る人間も養成せねばならん、我々が爲すべ
き仕事は山ほどある』

龍馬は斯う云つて撫然とした。

去年八月二十一日、江戸を發つて上洛の途にあつた島津久光の供方に、英人が何か
無禮を働いたとか云ふので、その英人を斬つたのが事件の因で、その爲に償金問題を
持込まれたのが二月二十一日であつた、江戸留守居の閣老井上河内守 松平豊岡守は、

まづ英國の使節を慰め諭した上、これを將軍に急報すると共に諸藩をして近海を守護
せしめた、京都へその報が達したのが二月廿六日で、所司代は在京列藩に向つて、或
は速に兵端を開き候やも計り難く、依て銘々藩屏の任に有之候に付、それ〜
備へ向き手當方も有之べしとの令を出した。

在京攘夷黨はこの報を聞いたから堪らない、まるで石油に火を注ぎかけたやうなも
のだつた、將軍家茂は上洛中で、江戸からは頻々として不穩な情報が来る、幕府旗下
の連中は一日も早く將軍が江戸へ歸るのを希望する、攘夷黨は此機會に乗じて、將軍
が江戸へ歸つたらすぐに豫ての宿志を達しやうと希望してゐる有様で、危機はますます
す脚下に迫つて來た。

恰度此紛擾の最中に上京して來たのが島津久光侯であつた、ところが侯の鋭眼は
早くもこれら有志の斷固たる處置に出るであらうといふのを見抜いて、攘夷の事は輕
卒に決するはよくない、後見、總裁といふものがある以上、これを冷遇して浮浪の徒
の説を信ずるのは間違つてゐる、大政は幕府に一任して猥りに輕舉盲動してはいかん。

といふ説を建議した。

流石に島津侯の此言には重みがあつた、茲で京都に在る朝野の説が二派に分れ、國事掛の諸郷を始め長州其他の有志は依然として攘夷論を固く持して動かない。英船の回答期は到頭五月十日に延期せられた、その期日は即ち鎖港談判の期日であると同時に、開戦布告のやうなものだつた、遂に攘夷黨が勝利を得たわけである、島津侯は自分の建言が用ゐられないのみならず、あらぬ浮説まで立てられるのに奮慨して、三月十八日に歸國して了ふ、續いて幕府總裁たる松平慶永侯（春嶽）も二十一日に越前へ歸つて了つた。

三

龍馬は勝安房の上阪と共に又多忙しくなつた、と云ふのは他でもない、勝が上阪するとすぐに走せつけた龍馬を捉へて、勝は突然に質問を發した。

『國內の有様を何う思ふか、君が感じた通り云つてみてくれ』

勝が爾ういふ面には、心中既に成算があるらしい氣色が現れてゐた。

『幕府の處置がまづ第一にいけませんな』

龍馬は平然として口を切つた。

『黨派が分れたやうちやが、第一國に黨派が出来るといふのがいけない、黨派が出来ると勢ひ同志を募つて對手を敵視する』

『有仰る通りです、然し幕府が幕法ぢやといつて、むやみに人を縛つたり、刑罰を加へて改心させやうとするのは大間違ひな處置ですな』

『さうちや、あれでは反つて人心を險惡するばかりぢや。たま／＼穩かな説を建てて者があつても、唯口で説くけだで、その方法手段を講じないからなんにもならぬ、そこで君に一臂の力を藉りたいのぢや』

『御用に立つならいつでも立ちませう』

『君でなければ適當な人物がない、わしはつく／＼考へるに、現在の人心の向ふ所が斯んな有様ぢやからこれをすぐに何うする事もできない、殺した所で人間が減るだけ』

の事ぢや、そこでわしは、これらの人々の心を、徐ろに轉向せしめやうと考へた」

「その方法は」

「激論黨を大ひに鼓舞するのぢや」

「そんな事をしたら益々始末に困りませう、第一あなたの役柄が、そんな事をゆるしますまい」

「鼓舞すると云ふても煽動するのではない、畢竟國家の爲に盡さしめるのさ、わしは神戸に海軍所を設けやうと思ふ」

「なるほど」

龍馬は思はず膝を丁と叩いた。

「此頃のやうに人々の心が興奮してゐたのでは、理屈を説いたところが無駄、のみならず反つて佐幕黨であるとか國家を思はぬ腰拔武士であるとか、痛くない腹をさぐられるやうな結果になる、そこで、之等激論黨を一人く海軍所に引張つて来て軍艦に乗せるのぢや、鎖國攘夷まことに結構、夷狄を敵として戦争をするのは大賛成、然し

ながら軍艦で押寄せて来るのを、手を拱ねて待つてもゐられぬ、何れは艦と艦との戦争をせねばならん、それには航海術を學ぶ必要がある——と、斯ういふ按梅に説き伏せて連れて来るのぢや」

「なるほど名案、行りませう、早速行りませう」

「諸藩の有志を爾うやつて集めたなら、二百人や三百人の人数は忽ち寄るぢやらう、それを他日萬一の機會に役立てたならば、喃、使ひやうでズンと切れるわ」

「流石は先生だけあつて巧い事を考へられる、龍馬は差詰引張役を承はらう」

「その引張役なかくに難しい、君を措いては他に人がないのぢや、どうか此上共に協力してやつてくれたまへ」

兩人の間に斯うした相談が成立つたのは誰も知らない、然し海軍所は名實ともに出来上り、海軍所に通ふ者は日々その數を増して行くばかりだつた。

幕府は海軍所の費用として、年々三千圓を勝に給與したが、既に四五百人を收容する有様になつては、とても給與金では足りさうな筈もなかつた。さればとて増額を要

求するわけにもゆかないので、勝は龍馬と相談の結果、越前侯に謁見の上、借金申込をする事になつた、その使者に立つたは龍馬で、まづ福井に赴くと、當時越藩の顧問役をしてゐた横井小楠の寓居を訪れ、小楠の斡旋に依つて春嶽侯に謁見しやうとした。

事は頗る容易に運ばれ、春嶽侯は心よく申込を承諾し、五千圓を貸與してくれた。

四

神戸海軍所の設立や、有志集合の事などで一日の暇も得なかつた龍馬は、或日小閑を得たを幸ひ、京都粟田口の知定院を訪れた。

しばらく會はないうちに、龍子はひどく面やつれがしてゐた、龍馬はすぐに家計困難からと察したが、話を聞いてみると、意外な災難に出會つた事がわかつた。

「……何分にも母は老人のことではあり、それに、お恥しいお話でございますが、日日夜の家計も手廻りかねるやうな有様で、巧くその悪漢の計略に罹つて了つたのでござ

います」

「すると君江さんばかりでなく……」

「わたくしは奉公中の事で、歸つて来て母から話を聞いて失敗つたと思ひましたが、もう後のまつりでどうにも仕様がございませんでした、君江が島原の舞妓に賣られましたのは、一番始めにやつた事らしいのですが、これはまだ年も行きませんし、さほどの心配もありませんが、わたくしの次の妹が大阪へ女郎に賣られたのは、流石呑氣なわたくしも喫驚いたしました」

「あなたの次のお妹さんはお幾年でしたな」

「十六になります、それと聞いて、母に怒つてみたところで仕方なし、つくづく考へてみますと、老年の母の傍にゐないわたくし共の方が悪いのですから、實は母に叱言を云ふわけはないのでございます」

「そんな悪漢の事ぢやから、いづれ巧言を云つて欺したに相違ありません、妹御お二人もまた世間の波に打衝つた事はなし、あなたが母御の傍を離れてゐられるのも、母

御を養ふ爲ちやから、これも無理もないわけぢや、してどうなされた」

「わたくしは大阪へ賣られたのだけでも取戻したいと存じましたが、先立つものはお金です、然し、幸ひと賣るのを此方で承諾したのではありませんし、もとよりお金などを貰つたのでもございませんから、取戻さうと思へば、必と取戻せると思ひました、それからわたくしの衣類を賣りまして、そのお金を持つて大阪へ行きました」

「いや面白い」

どういふ所かわからぬが、兎も角も斯ういふ悪事を働く奴は世にいふ無頼漢である、その巢窟へ女の身の而かも唯一人飛込んで行く勇氣、龍馬は思はず知らず力瘤を入れた。

「行つてみると、いやに底光りのする眼をした男が二人出て參りました、妹を賣つた奴といふのは、その二人だつたのです、わたくしは家を出る時、既う覺悟をしてゐました、まかり間違つたら切つてやらうと思ひましてね、短刀を懐中に入れて行つたのでございませう」

「偉い、あなたなればこそぢや」

「そんなに云つて頂くと恥しくなりますわ、すると、案の定その二人の漢は、頭からわたくしを威しつけるつもりで、いきなり片肌を脱いで、いやらしい青刺を出しましてね、凄い文句をならべ立てるのでございます、わたくしは御承知の通りのこんな氣性でございませう、何負けてたまるものかと思ひましてね、ほ、ほ、女だてらに、突然に一人の漢の頬面を力任せに打つてやりましたの」

「愉快、怒つたでせうな」

「怒るよりも呆れたやうでした、だうて、まさか女の身でそんな事を爲るとは思つてゐなかつたでせうからね、一寸度膽を抜かれた態で、わたくしを睨みつけました、わたくしは、なんでも機先に出なければいけないと思ひまして、妹をすぐに返せばよし、もし返さぬならお前等二人と差ちがへて死ぬ覺悟だと云つて、短刀を抜くと二人の眼の先に突出してやりました。まつたくその時は一生懸命で、場合に依つたら二人を殺して自分も命を投げ出すつもりでした、悪漢はしばらく二人でこそく相談して

「わたやうですが、到頭妹を返してよこしました、その時の口惜しさうな顔と云つたら、今思ひ出しても胸が透くやうに思ひます」

「あゝ何といふ女であらう、大昔の巴板額ならばいざ知らず、現の世にこんな勇氣のある女があるであらうか、男子でさへこれだけの頼もしい膽の据つたのは少ないのに、なんといふ大膽な女であらう、そして、なんといふ美談を聞くものだらう、と、龍馬はつくづく感じ入つた。

「實に感心の至りです、よくそれだけの事を仕遂げなすつた、有髯の男子も遠く及ばずちや」

「いやでございますよ、そんなにおひやかしになつては」

「いや戯談どころではない、人間が必死の覺悟を以て事に當ればなんでも遂れぬ事はないといふ手本をあなたが指示されたわけちや、實は僕も非常な御無沙汰をしてゐましたが、神戸に海軍所を設けて、その仕事を引受けてゐたものちやから、一日の餘暇もないやうな有様で、思はぬ御無沙汰をしました、そんな大變事があつたとは夢に

も知りませんでしたからな」

「わたくしも大阪へ参りました時、あなたのお住居を捜して、お願ひしてみやうかとも存じましたが、お國の爲に働いてらゐつしやるお方に、こんな事をお願ひするでもなし、又、むやみにお訪ねして、御迷惑になつてはと存じましてね」

「太一郎さんはお幾年ちやつたな」

「まだ六歳になつたばかりでございます」

「十六に十三……」

龍馬は瞬時思案をしてゐたが、深く心に決したやうな面を擡げた。

「よろしい、では斯うしませう、お母さんの傍へはあなたの次の妹さんをつけて置くとして、君江さんと太一郎さんとは僕が知人の所へお世話しませう」

「え、あの君江と太一を……」

「いや、御心配なさるには及びません、立派な人物、預けて置いても安心の能き人物の所へお世話します」

「……………」

龍子は黙つて龍馬の顔をまじく〜と見てゐた、然しそれは不安心からではなく、龍馬の厚志に對して感激のあまり、すぐに言葉も出なかつたのだつた。

「その知人といふのは、軍艦奉行の勝阿房守です」

「えッ、あの勝さまへ」

「さうです、勝は天下の人物、僕は今日までにあれだけの人物に出會つた事はありません、あの人なら大丈夫、心より引受けてくれますし、君江さんや太一郎さんの爲にも決して悪くはあるまいと思ひます」

「でも、そんな事がお願ひできませうか」

「まア僕にお任せなさい」

「爾うして戴けたら、どんなにか助かりますが……」

女丈夫龍子も、流石に人の情の身に泌みては、思はず眼を伏せて了つた。

「それからあなたのお身の上や、お母さんがゐられるからは、どうしても働かねば

ならん、と云ふて、むやみな所へ奉公するも考へものです、そこで今フツと考へついた事ですが、薩藩の定宿の寺田屋、伏見の寺田屋、彼處の女將さんはなか〜學問もあるし、女としては偉物です、何れにしても奉公せねばならんのなら、いつそあの寺田屋に奉公したら如何です、僕が周旋する以上は、決して普通の奉公人のやうな待遇はさせません、爾うしたらどうでせう」

「いろ〜と御心配に預りまして、何とも御禮の申上げやうもございません」
龍子は有難さに聲さへ顫えてゐた。

活 躍

一

五月十日は攘夷斷行、鎖港談判の期日であるから江戸の人々は不安の氣が漲つて今にも江戸中が暗黒になるやうな騒ぎを續けてゐた、幕府の方針は相變らず宙に迷つてふら〜してゐる、それが反つて不安の度を彌増すばかりであつた。

と、七日に至つて閣老小笠原圖書頭（長行）が、俄に上京と稱して江戸を出發した、そして神奈川へ急行、獨斷で生麥事件の償金を英人に渡して了つた、小笠原が神奈川へ急行したといふ事を知つた幕府は、驚いて後を追ひ駈けさせた、命を受けたのが水戸家老の武田耕雲齋、品川沖で漸く追ひ着いたが小笠原は歸府の命に従はなかつた。

八日にはいよいよ鎖港談判の爲、或は品川高輪三田あたりを焼拂ふ事もあるかもしれないから、此邊の住民は勿々立退くべしといふ令を下したので、さアいよいよ開戦だと騒ぎ始める、町の人はそのれからそれへと噂を大きくして傳へるので、家財道具を取纏めて逃支度をする者が刻一刻に多くなつて行つた。

小笠原閣老は、まづ償金を渡して生麥事件を片付けて置いてから鎖港談判に及ぶ意思であつたが、各國公使は冒頭から冷嘲したり脅すのみで、鎖港談判など思ひもよらぬ事だと觀念して歸府した、幕府の連中は小笠原の話を聞いて、一も二もなく同意して了つた、斯うなると目代職たる慶篤、後見職たる慶喜の立場がなくなる、慶喜公

は京都から鎖港攘夷の命を受けて八日に江戸へ着いたが、既に此時に小笠原が償金を渡して了ひ、幕府の意向は全く攘夷はおろか鎖港の念などは毛頭ないので、どうにも手の下しやうがなかつた。

慶篤公は目代を辭す、慶喜公は後見職を辭す、茲に至つて江戸は再び指揮者を無くして了つた。

この報を得た京都は、始めて幕情がはつきりと判ると共に、到底幕府に任せては置けないといふ議論が沸然として湧いた、慶篤公の辭表は免許されたが、尙攘夷に就ては盡力すべしといふ御沙汰が下る、然し慶喜公の方はどうしても辭職の御聞届けがなく、益々攘夷の功を奏するやうに盡力し、將軍補佐の任を全ふすべしといふ優命が下つた。

斯程までに攘夷論が盛んであつた京都が、八月十八日に至つて急に方針を一變した、その事情を詳しく説くのは本篇主人公に特に關係がないから止すが、今の今まで優遇せられてゐた長州藩の兵は、俄かに堺町門の警衛を免せられ、之に反して會津薩摩二

藩の兵が警衛を命ぜられた、議奏、國事、參政、寄人等の係官は罷免になり、三條實美卿を始め東久世、錦小路、澤、壬生、四條、三條の七卿は西國へ退く、中川宮、近衛忠熙卿等が代つて朝政を攬り、不遇であつた薩州、越州、土州の三藩主は上京を命ぜられるといふやうに急轉した。即ち尊王非攘夷説が勢力を得て來たわけである。事態斯うなると、京阪の間に潜在してゐた急激な有志浪士輩は諸藩主に依つて捕へられ始めた、肥後先生武市半平太も此時獄に投せられたのであつた、で、兎も角表面上攘夷論は一時不振の姿勢となつて文久の年も暮れ、元治元年の春を迎へた。

二月に入ると間もなく、龍馬は歸國の藩命に接したが、恰度此時、勝安房守は幕命を受けて將に襲來せんとする英佛米蘭の聯合艦隊を長崎に迎えて、これに和睦を申込む重大任務を帯びた時だつたから、龍馬としては歸國するにせられぬ場合、遂に心ならずも藩命に背いて西航の途に就いた。

二月の十二日に神戸を出て十四日佐賀に上陸、二十三日長崎に行き更に翌日立山に行つた、そして二十六日に立山灣に入港した諸外國艦隊を訪ひ、馬關攻撃を中止せし

め無事任務を終へて三月四日に長崎を出發、十三日神戸に歸つて來た龍馬は、ふと檜崎龍子との約束を思出して京都へ行つた、君江と太郎は勝に依頼し、龍子は寺田屋に預け、檜崎一家の窮乏は龍馬に依つて救はれた。それから間もなく江戸に行き再び神戸海軍所に歸つて來たのが七月であつた。

二

『先生』

龍馬はあんまり暑いので露臺へ出て涼納んでゐたが、何の氣もなく空を仰いだ時、京都の方向に當つて火柱のやうな火光がバツと立つた、呀ッ、と思つて眼を据えた時には、もう消えて終つた、龍馬は急いで露臺を駆け下りると勝の居間へやつて來た。

『誰ぢや、龍馬か、何だ慌たゞしい』

『先生、すぐに大阪へ航きませう』

『どうしたといふのぢや、いつになく慌てゝゐるではないか』

「只今暑いので露臺へ出て涼んでゐますと、京都の方面の中空に火柱が立ちました、確かに何か異變があるに相違ありません、すぐに出掛けませう」

勝は爾ういふ龍馬の面を寸時見てゐた。

「先生に思ひ當るやうな事はありませんか」

龍馬は何か心に疑ふ事があるやうに云ふ。

「ないでもないが、まさか大變事があるとも思はれん」

「先生、ひよつとしたら何か長州が行り出したのではないでせうか」

「兎も角行つてみやう」

勝も龍馬の言葉に動かされて、すぐに觀光丸に出動の準備を命じて大阪へ急航した、龍馬の言葉は果然適中した、翌朝（七月十九日）京都 蛤門の變が勃發したのであつた。

去年八月十八日の變動からして、長州の兵は七卿と共に西國長門に退いたが、其後有志は密に京都附近に潜伏して、毛利父子及び七卿雪冤を哀訴した、藩からも朝廷に

陳情書を奉上了が、朝廷はすべて政事上の事は幕府に一任してあるので、陳情書は幕府の方へ廻附せられた、そこで更に幕府に對つて嘆願するべく、家老福原越後が東上した、然し既に有志の輩はこの以前から東上して、山崎や天龍寺に屯集つてゐた。

これら有志は、會津藩を非常に憎んで、どうかして八月十八日以前の形勢に復活したいと計つたのが此 蛤門の變で、畏多くも禁裏に近く大騒動が始まつたのは應仁以後未曾有の變であつた、久坂玄瑞も有志の一人として此役に戦死して了つた。

勝と龍馬は、大阪へ着くとすぐその足で河船を雇つて淀川を溯つた、途中往き遇ふ船には、長兵が差違へて死んでゐるのなどがあつた。

「困つた事をしたものぢや」

「大義を辨へずに私情に走るから斯んな間違が起きるのです、長州にだつて人物がないではないのに、なんといふ不様な事をしたものだ」

勝と龍馬は顔を見合せて長大息した。

さて斯うなると長州は朝敵にも等しい事を行つたのであるからといふので幕府は征

長の師を起す事になつた、然し因を糺せば長州とても尊王攘夷黨で、唯家老福川越後外二三の者が、有志浪士輩を取締るといふ口實の下に東上したのが不穩當な行爲と云はれ、ば云へる、そして大義を没却したのは遺憾千萬ではあるが、有志等の憤慨するものも強ち無理とは云へない點もある、要するに、朝敵と見なすよりも、私闘と解釋するものが當然である——と、龍馬は心密に思つた。

蛤門の變後、龍馬は薩州の西郷といふ人物に接見したいと思つたので、一日勝に此事を話すと、勝は早速承諾して紹介状をくれた、龍馬は勝の紹介状を携つて京都の薩邸に西郷吉之助を訪問した。

『京都の情況はどんなもんぢやつた』

勝は龍馬が京都から歸つて來ると斯う訊いた、龍馬は政況を報ずると共に、水戸の變亂(神勢館の戰亂)などを語つたが、西郷に初對面の印象は何も云はなかつた、翌日も翌々日も西郷の話は龍馬の口から出ない、紹介状まで書いて與へたのだから、何とか一口位は云ひさうなものだと勝は思つた、然し龍馬は全で忘れて了つたかのやう

な態度であつた。

『君は西郷に會ふたのか』

三日目の夜に、勝は到頭口を切つた。

『會ひました』

龍馬の返答は唯それきりだつた、勝は異な男だなどと思つた。

『薩の西郷と云へば世に聞えた男ぢやが、君の感想はどうぢやな』

『あの男は馬鹿ですな』

『なに、馬鹿……?』

『馬鹿も馬鹿も大馬鹿ですな』

『君には爾う見えるか』

『決して伶俐ではありません、然し同じ馬鹿でも、あの男のは底の知れない馬鹿です、假へて云へば、小さく叩けば小さな音がするし、大きく叩けば大きな音がすると云つたやうなもので、大馬鹿の奥も知れないし巾もわからぬといふ人物ですな』

勝は龍馬の評言にすつかり感心して了つた、他日人にこの事を話して、人を観る標準は観る人の識量の程度に依つて異ふものだと云つた、實際、龍馬の此批評たるや、評する人も、評せらるゝ人も、共に偉い人物と云はねばならない、英雄であつて始めて英雄を知るのであつた。

三

「又困つた事が起つたよ」

勝は稀しく陰氣な、そして不快な顔を龍馬に向けて斯う云つた、龍馬は唯事ではないなと直感した。

「幕府から突然江戸へ歸れといふ命令ぢや」

「何か江戸に事件が起つたのですか」

「はつきりとは云へぬが、此幕命はわしを見違つてゐる」

勝は思ひ捨てるやうに云つた。

「先生、それではもしや役儀御免といふやうな事ではないでせうかな」

「さア……、或はそんな儀ではあるまいかと思つてゐるが」

「ではあの風説がいよゝ實現されたのかもしれない」

「わしは公明正大ぢや、些しも天下に恥づる所もない」

「幕府の人達はなせ斯うも狭量なのでせうな」

「時節柄ぢや、仕方がないさ」

「然しどうも怪しからぬ、なるほど蛤門の一件は長州人の行つた事に相違ないが、さればと云つて長州人全體を白眼のは間違つてゐる、この海軍所には長州の藩士ばかりではなく、現在僕は土州、出生を調べたら諸藩の浪士が大勢ゐます、假りに蛤門の一件が土州人の行つた事としたなら必と僕等に向つて白眼が光るに相違ない、物を爾う疑ひ始めたら際限がないわけですか」

「あの蛤門の一件から異な眼で見られるやうになつたのは疑ひもないが、先達毛布を買つた件がよほど當路の人の疑念を増したらしい」

『それと云ふも京都や大阪に来てゐる幕吏に、碌な奴がゐないからです、誰かそんな事を江戸へ告げる奴がゐるからです、軍艦に乗つて一年中を暮らす水夫には、なによりも毛布が必要です』

『奉行ともあらう者が、毛布を以て長士を庇護だてをするといふ風説をしゐるさうぢや、恰で小兒でも云ひさうな事ぢやな』

『あはゝゝゝ』

兩人は顔を見合はすと呵々大笑した。

『然しながら、萬一役儀御免といふやうな事になると、折角先生の御骨折で出来上つた此の海軍所も……』

『さア、それぢやて、わしは江戸歸府の命令を受けると、すぐその事を考へた、さうして略後々の事に就ても相當の處置をする心算ぢや』

『するといよゝ、神戸海軍所を閉ぢるのですか』

『さア、まだ明言は能きぬが、左様な運命になりはしないかな』

『先生、残念ですな、折角此處まで來たものを』

『どうも止むを得ぬ、然し海軍所は閉ぢる事になつても、君が江戸へ行つて話を決めて來た異船借用の件もあるから、君達は飽くまで初志を貫徹せねばなるまい』

勝は流石に大人物であつた、幕府の疑ひを受けて一身の安危に際してゐる折柄、尙且龍馬を始め高松太郎外三四の有志を安全な地位に置かうと考へてゐた、いよゝ、神戸を去る時、龍馬に一通の手紙を示して大阪の薩邸へ行くやうに命じた。

これは決して突然した事ではなく、豫め薩藩家老小松帶刀に面會して、龍馬外數人の者が異船を借用して航海の企をしてゐた所、急に神戸海軍所の運命が極つて了つた爲、之等浪人者の目前に居る所がない、土州は政治向甚だ厳く、歸國するのは命を捨てに行くやうなもの、従つて歸國は能きない、右異船借用と共にそれに乗込む事になつてゐるから、それまでの所を貴藩邸に置いてやつてはくれまいかと頼み込んだ、小松帶刀は西郷など、相談の結果、早速承諾の旨を勝に返事して來たので、斯ういふ段取りになつたのであつた。

『小松と云ひ西郷と云ひ、なか／＼の人物ぢやから悪うは取扱はぬ、心配は要らぬから當分厄介になつて居給へ』

『先生の御恩は決して忘却いたしません、先生に依つて習得た航海術を、此儘捨て、了ふのはいかにも残念ですから、いつかは先生の意志を繼いで、ひとかどの役に立てる決心でゐます』

『どうか國家の爲充分に働いてくれたまへ、君だけは他日必ず成す事があると思つてゐる、何れ再會の機會もあらうが、随分身體を大切にしてくれ』

『先生もどうか御健全でゐて下さい』

『有がたう』

秋風徐ろに兩雄の袂を吹く悲痛な別れば、元治元年の十月、濤聲響く、海軍所の一室で濟んだ。

四

斯うして薩邸の客となつた龍馬は、馬鹿の巾がわからぬと評した西郷と日夜胸襟を開いて談すので、その交りは一日／＼と深さを増して行くばかりであつた。

蛤門の變後、長州に代つて禁闕守護の任に當つたのが薩州であるから、長が薩に含んでゐるのは當然であつた、然るに薩の西郷は反つて長州に多大の同情を寄せて、幕府が專斷で征長の帥を起さうとしたのに奮慨し、當時幕府の大坂城代をしてゐた大久保越中守に極力その不可を説いた位だつた。

西郷は蛤門の變を説いて、長州と曾津とが私闘を演じたに過ぎないと云つた、龍馬の説も又西郷と同じであつたから、西郷が爾ういふ考へならば、薩州と長州とを結びつけるのが自分の仕事だと思つた、六十餘州に大名も數多いが、大藩と云へば薩と長がその代表すべきものだ、この二つが相反目してゐたのでは、麻のやうに亂れた天下をして益々紛糾せしめるばかりだ、然しお互ひの感情は、いつまで経つても融和する機がないのみならず、寧ろ疎隔するばかりだ、幸ひ自分は中立國の土藩の出身であるから、この兩藩を結び合わせるには、まことに好都合の位置にゐる、まづ仕事の手始

めに薩長聯合から取掛らうか。

爾う思ひ着いた龍馬は、早速この相談を西郷に持ち出した、西郷は手を打つて賛成した、然し西郷一人承諾しても、藩主の許可を得ねばならぬし、藩論を一定する必要もある、それには、どうしても一度歸國して來なければならぬ、そこで西郷は龍馬を伴れて、藩船胡蝶丸に乗つて大阪を出帆する事になつた。

西郷は郷里鹿兒島に歸ると、すぐに藩論を一定した、後見たる久光公は令を一藩に下して、目下の形勢を述べ、皇國擁護の實を擧げるには敵愾心を強固にし、徒らに邦國內に兵を動かしたり、區々たる小事に角眼立てをするが如きは皇國擁護の精神七悖るものと警めた。

然し困つた事には、薩藩から長藩に對つて聯合して國事に當らうではないかと云ひ出すのは、長藩或は薩藩を疑つたり侮つたりする悞れがないでもない、と云つて、長州から薩に對つて聯合しやうではないかと折れて出て來を筈は無論ない、西郷は龍馬が此仕事の適任者である事を久光公に話し、その許諾を得た上、一切を擧げて龍馬

に一任した。

『俺の仕事はいよ／＼今から始まるのだ』

龍馬は心の中に爾う思ふと、生れて以來の愉快を感じた、そして、まづ何處へ行かうかと考へた。

『斯ういふ事と云ふものは最初の出端が拙づけてはいけない、長州にもいろ／＼な人物があるが、その人物にもいろ／＼な性格を持つてゐる、薩長聯合が眞に意義のある事と領いてくれる人物に會はねばなるまい、それは誰であらうか、誰の紹介に依つて誰に會つたらばよいか』

龍馬はそれからそれへと龍馬獨特の才智をめぐらしながら鹿兒島を發つた、麥畑には雲雀の聲がしてゐた、森には老鶯の澄びた聲が聞えてゐた、處々には田植も濟んでゐた、筑前から太宰府へ着いたのは、五月も末に近かつた。

龍馬は先づ人を通じて五卿に謁見し薩藩の近況を具申した。五卿といふのは三條公始め七卿が、文久三年八月に亡命した残りの人々で、七卿のうち澤卿は其後間もなく

生野の義舉に加擔し、錦小路卿は病没されたのである、蛤門の變後西郷は幕府征長の總督である徳川慶勝公に説いて征長を擧を中止させるべく盡力した、その時、西郷は長に恭順を表せしめやうと、單身防州岩國まで出向いて藩主吉川監物に會ひ長藩に恭順を表せしめよと説いたその結果として、長は責任者たる福原越後、益田右衛門佐、國司信濃の三人を犠牲とし、五卿を太宰府に移し、藩主毛利父子は萩城に謹慎した、これで終局を告げたにも係らず、幕府は再び征長の帥を起したので、長藩士中にも有名な彼高杉晋作は遂に疍癩玉を破裂させ、奇兵隊を率ゐて馬關の政廳を襲ひ、萩城に迫つて藩内恭順黨を撃ち、藩主毛利父子を擁護して山口に奉じた。

爾うした経緯からして五卿は太宰府に在つたので、龍馬は第一に五卿に薩長聯合の急務である事を縷々として説明した、五卿は龍馬の明快にして條理整然たる議論にすつかり感じて了つた。

恰度此時、五卿を慰問の爲とあつて長藩から小田村、時田、兩藩士が來合せてゐたので、龍馬は折もよしと思つて兩士にも聯合説を陳べたて、どうか、御歸藩になつた

ら、此旨御同志にお傳へを願ひたいと云つた、兩士は歸藩するとすぐに聯合説を同志の者に告げた、眞先に双手を擧げて賛成したのが高杉晋作、次には桂小五郎(木戸侯)伊藤俊輔(博文公)井上聞太(馨侯)などの豪傑連であつた、龍馬はまことに好機會を得たものだと思ひながら、閏五月の朔日に馬關に行き、時田を介して桂小五郎に「ひたいと云つた、時田は早速之を桂に報じたので、桂は山口を發つて馬關にやつて來た、そして兩雄初將の一段となつた。」

思へば龍馬の使命も決して軽くはなかつた、唯聯合の必要を説いただけでは使命の全責任を果したとは云へない、聯合の橋渡しをするには、双方の感情が波立たないやうに、而かも長藩の方から進んで薩藩へ結びつくやうにせねばならぬ、其間双方の感情を巧く融合させながら結びつけやうといふのであるから、猪口才子では無論能きないし、いかに豪傑でもこればかりはむづかしい、龍馬の性格たるや精細綿密ではない、一分の隙もないといふほどの才子でもない。寧ろ豪放不埒に近い、とは云へ、西郷式な豪傑とも趣を異にしてゐる、一口に云へば非凡の思想の持主であると云へやう、

さればこそ斯うした役を引受けて、何等の苦慮をも要せず、淡々として行つたのである。

然し桂小五郎に聯合を説いた時には、豫ねて風説を聞いてゐる人物であり、随つて當方も説き甲斐がある對手だけに、滔々懸河の熱辯を揮つた、桂小五郎も元より凡庸の士ではない、小田村、時田等に聞きた以上に立派な人物で、議論も堂々たるものだから、聯合の意志をます／＼固くした、で、兎も角西郷にも機會を得て會ひたいと思つたので、次會を期して別れた、その時、龍馬は當地に土方楠左衛門（久元伯）が來てゐるといふのを桂から聞いたので、早速その宿（綿屋彌兵衛方）を訪づれた。

土方とはこの四月、龍馬が上京して薩邸へ入つた時に面會したきりであつたから、土方も突然の來訪にひどく驚いたらしかつた。

『君に馬關で會ふとは思はなかつた、どうしてこんな所へ來てゐるのぢや』

『君もなんの用でこんな所に來てゐる』

『僕か、僕は中岡と一緒に京都から來たのぢや』

『中岡も來てゐるのか』

『途中まで一緒に來たが、小倉で別れた、僕は馬關へ來る要事があり、中岡は鹿兒島へ行く要事があつたので、船で鹿兒島へ行つた』

『さうか』

土方が馬關へ來たのは、やはり薩長聯合の要事であつた。

この中岡といふのは、龍馬と共に土藩勤王家中でも屈指の人物で、號を迂山と稱ひ、愼太郎が通稱であつた、龍馬とは同藩ではあるし、志を同じくしてゐる者だから、云ふまでもなく親しい間柄だつた、脱藩して後、長州に屬して京都に在つたが、幕府が長州征伐の帥を再び起すとの報を聞いて非常に心配し、土方と共に種々相談した結果、これは薩長の小怨を解いて聯合し、以て幕府に當らなければいけない、それには薩の西郷と長の桂とを相識の間柄にする必要がある、君と僕と二人で薩長に遊説に出掛けやうではないか、僕は薩州へ行つて西郷を伴つて來るから、君は桂と馬關で待つてゐてくれたまへ、と云ふ話が纏まつて京都を出たのであつた。

龍馬は土方から來意を聞いて、期せずしてその志が同じであるのを驚き悦んだ、それが閏五月の六日であつたから、中岡が小倉を二日に出帆した日數から指を屈つてみると、長崎を経て鹿兒島へ着くのが恰度六日頃になる、すれば西郷を伴つて馬關へ來るのは、早くとも十五六日は待たねばならぬ。

土方は龍馬や桂小五郎等に會つて、薩長の和解もはや大丈夫成立と見込んだので、此旨を太宰府に在る五卿に報告せねばならないと云つて九日の日に馬關を發つた、桂と西郷を會はせる役目はすべて龍馬に依頼した、龍馬も心よく引受けた。

ところが、待ちに待つた西郷が來ないで、中岡慎太郎が唯一人悄然として歸つて來た。

中岡は西郷に會つて桂と馬關で會ふ必要を説いた、西郷は心よく承諾して、十五日に中岡と一緒に鹿兒島を發つたが、十八日に佐賀に着くと、急に京都の藩邸から西郷に上京せよといふ藩命が下つたので、西郷は引返す事になつた、中岡はその上京を暫時でも延ばして桂に會つてくれと頼んだが、西郷は藩命故是非もないと云つて去

つて了つた。

桂は聞くと共に不快の色を見せた。

『大方こんな事であらうと思つてゐました、僕も要事の多い身體ですから、西郷さんの爲に爾ういつまで待つわけにはゆきません、僕は失敬して山口へ歸ります』

龍馬と中岡は左右から交々陳謝したが、桂は奮然として山口へ歸つて了つた。

『中岡、こりや斯うしてはゐられん、僕と一緒に上京してくれ、桂が馬關へ來て西郷を待つてゐた日數もかなり長かつた、然るにこんな結果になつては、長州が薩州を怨むのが以前より一層ひどくなる、これから京都へ行つて、西郷に談判せねばならん、折角骨を折つても水泡に歸して了ふ』

『困つた事になつたなア』

絶好の機會も間髪のうちに急轉して了つたので、流石の龍馬も、聊か拍子抜けの體であつた。

薩 長 聯 合

「なんとか巧妙い考案はないかな」

土俵際で引落され、我と我力で倒れたやうな形になつた桂西郷の會見策に氣抜けがした龍馬は、忽ち精氣を挽回すると共に、龍馬一流の才智を揮ひ出した。

『よし、うまい策があるぞ、名策く、此策を一つ用ゐてみやう』

龍馬が獨領いた名策といふのは、かねてから長藩では武器を外國商人から購ひたい希望を持つてゐたが、購ふ機會がないのに苦心してゐた、幕府は「長州征伐く」と騒ぎ立てる、この聲を聞く長州が、幕軍が攻め寄せて來た時の準備を急ぐのは當然である、然し、唯一つ情ない事は、外商との交渉をする肝要な場所に、幕府長崎奉行の眼が光つてゐる、少し怪しいと睨むとすぐに干渉してその目的を果させない。

龍馬の考へついたはその點であつた、長州でこの目的を達しやうとするには唯一つ

の手段がある、而かも容易に遂行できる事である、それは即ち薩州に頼んで、薩の名を借りて幕府の眼を韜まし、注意を怠らしめればよいのである、その斡旋は龍馬が引受けるから、一つ諸君で御相談なさいと云つてやる。

その使者に立つたのが焼織屋の息子近藤長次郎（利）であつた、近藤は龍馬から授かつた名策を持つて長州へ行つた、そして伊藤俊輔、井上聞太に會つてこの話をする、二人は桂や高杉に會つてこれを傳へる、遂に衆議一決、其斡旋を龍馬に依頼した。

龍馬は心の中に手を拍つて中岡と共に上京し、薩邸に入つたのが六月八日であつた。

まづ第一に、約束を變へて馬關に來なかつた事を西郷に詰問した、然し西郷とても藩主の命に反く事は能きない、急飛脚が來たのであるから、上京してみねば藩主からの命令の何であるか、解らない、残念であつたが心ならずも絶好の機會を失つたのであると云つた。

「然らばその交換として、僕が今度上京するに就て長州から依頼を受けて來た事があ

るが、それを是非共承諾して貰ひたい」

「それは全體どういふ事ぢや」

「どういふ事でもよい、兎に角承諾してくれたまへ」

「よろしい、承諾しやう、ぢやが出来ぬ相談を持ち込んで駄目ぢや」

「出来る相談ぢや、容易もなく出来る事ぢや、他でもない、長州では萬一の用意に軍備を急いでゐる、然し長の名では外國人から軍器を買ふ事が出来ない、そこで貴藩の名を借りて長崎奉行の眼を瞞かさうといふぢや」

「なんぢや、そんな事か、よいともく」

「然らば承諾の旨を早速桂の許へ知らせてやる、先方では僕の返事を待つてゐるのぢやから」

「懸念には及ばん、西郷が受合ふた」

龍馬はすぐに此旨を桂へ報じたので、桂は藩廳に相談もせず、獨斷で伊藤井上の兩士を長崎へ派遣し、首尾よく銃器若干と汽船ユニオン號（櫻島丸と改稱）を購入した。

これが爲に、一時馬關での不快な感情は一掃されたばかりでなく、以前よりも一層藩の感情を柔和げた。

「長州征伐の再舉は、幕府が朝廷の勅許を得て行ることになつてはゐるが、それは表面で、云は、幕府や會津桑名が強めて奏請したやうなものぢや、斯程な事を幕府の名を以て押通さうとするのはあまり、亂暴が過ぎる、此上は兵を以て幕府の亂暴を懲しめねばなるまい」

或日西郷が、龍馬と對座してゐる時、思入つたやうに斯う云つて、鼻の上に太い皺を寄せた、龍馬はヂツと聞いてゐたが、胸の中に不圖ある事が浮かんた。

「兵を以て懲しめる……貴藩が獨力で？」

「さうぢや」

西郷は勿論と云つたやうな語氣で言下に頷いてみせた。

「それはいかん、それは君のお考へが違つてゐます」

「何故ぢや」

『なるほど貴藩は大藩には相違ないが、幕府を對手に兵を起すには糧食が要ります、まづ以て糧食の準備から調へて掛らねばなるまい、貴藩の兵がいかに強くとも、空腹では合戦が能きぬ、それには長州が貯えてゐる糧食を購つて之に充てるのが一番、爾うすれば長州でも自然と猜疑の眼で見るとやうなことがなくなる、此方からも銃器や汽船を購ふのに便利を計つてやつたのぢやから、長州でもその位の融通は必としてくれるに相違ない、斯うしてゐるうちに、お互が自然と歩み寄つて一團になるといふ方法は何なもんぢや』

『なるほど、それもよからう、ではその役目も君がやつてくれるかな』

『引受けませう』

龍馬は即座に承知した、そこで西郷と龍馬は胡蝶丸に乗つて九月二十四日大阪を出帆、十月三日に宮市驛に着いた所、偶然にも小田村素太郎に出會つたので、西郷は薩へ、龍馬は小田村と一緒に山口へ行つた。

小田村は直ちに藩廳に向つて薩藩の請を上申すると、藩廳は協議の結果承諾に決し、

參政廣洋藤右衛門をして龍馬に面接せしめ、恰度馬關に在る桂小五郎に、薩よりの意を傳へた、龍馬は馬關に行つて桂と糧食讓與の一切の手續を了した上、今度こそは薩長聯合には最も好い機會であるから、貴下に於てもどうかその意志で充分に結合盡力に意を用ゐてくれと云つた、桂は龍馬の誠意に心から感謝して山口へ歸つた。

まづこれで長州の氣持も略解つたので、この機を外さず、薩州から使を長州に派つて聯合を勧誘するやうな段取にしたいものだと思つてゐると、間もなく急報が龍馬の宿泊つてゐる薩商白石正一郎方へ届いた、その報に依ると、西郷は既に藩論を纏めた上鹿兒島を發足し、藩主島津忠義公も近く兵を率ゐて東上關下に入るといふのであつた。

龍馬は白石(勤王家)に告げて、僕が上京後、京都の薩邸から誰か使者が来るかもしれないが、それは長州の桂に會ひに来る使者であるから、もし来たならば此所で會ふやうに取計つてくれと云ひ置いて、すぐに西郷の後を追つて東上した、京都の薩邸に着くなり、まづ糧食問題は無事に快諾を得た事を話したので、西郷は龍馬の盡力を

感謝した。

『それは濟んだとして、兩藩聯合の機會は今ちや、此機會を外してはなるまい、すぐに誰か適當な人を長州に派つて、桂を薩邸へ迎へるやうにしては下さるまいか』

『桂が果して来るかな、折角長州まで使ひを出して来ないとなると困るな、以前に待呆けを食はした一件があるでな』

『いや、その御心配は御無用ぢや、糧食の交渉を濟ませてから、豫め桂の意嚮もさぐつて置いたから、八分までは来てくれる事と思ふ』

『はて、派るとしたら誰を派つたものぢやらう……さうぢや、黒田がよい、黒田を派る事にしやう。』

二

桂小五郎を薩邸へ迎へる使命は黒田了介（清隆伯）に白羽の矢が立つた。

龍馬は西郷に八分通りは来るだらうと云つたが、それは龍馬の豫想到過ぎなかつた、

馬關で桂と會見した時、薩邸へ来てくれるやうに頼んだわけでもなし、言質を取つて歸つたわけでもない、唯、聯合は正に今なりと匂はせたと過ぎなかつた、然しその時、何かしら来てくれるやうな氣がした、否、必らず来てくれるに相違ないと思つた、だが、いよゝ使者を立てる段になると、果して桂が来てくれるかどうか懸念され出した、萬一來てくれないやうな事があると、それが萬止むを得ない要事の爲としても、前の西郷が約を違へた時と同じやうな感情を薩の方で持つ事になりはしまいか、そして折角機が熟した今日が、急に又後戻りをするやうな事になりはしまいか、そんな結果に陥ちては大變だ、これは黒田の後を追つて、自身出向く必要があると思つた。

黒田了介は龍馬の添書を持つて大阪を出帆し、馬關の薩商白石方を訪れた、白石は萬事呑込顔で、早速長に飛報を送つた、長州からは高杉晋作がやつて来る、間もなく山口からは桂小五郎が出て来た。

『御遠路まことに御足勞ではありますが、是非京都の薩邸まで御出下さるわけにはまゐりませうまいか、此儀曲げて御承諾を願ひたい、全體當方から貴藩へ出向くのが至當』

ではあります、何分時節柄故、幕府の眼に止ると事が面倒、貴君が御出で下さるなら、大阪藩邸から薩船を以て天保山沖まで御出迎へ致し、更に藩主の用船で淀川から伏見まで護衛致します、西郷は伏見へ出張して、京都薩邸まで御同行致す事になつてをります」

黒田は斯う云つて、すぐにも桂に承諾を求め連行東上する氣勢をほのめかした、高杉と桂とは暫時腕を拵んだまゝ黙考してゐた、と、話の最中に、ひよつこり龍馬がやつて来た、一同その意外なのに少し驚いた態であつた。

「性來船に乗るのは好きぢやが、斯う往つたり來たりすると聊か疲勞れる」

龍馬は席へ坐るなり斯う云つて大笑した、が、既に黒田に依つて西郷の傳言を長士に傳へた後である事を感得すると、桂の返答如何が氣遣はれぬでもなかつた。

「西郷氏からの申出はもはや御聞及びになりましたかな」

「只今黒田氏から承はりました」

「實はその御返事承はるよりは、僕が御當地へ出向いて、御異存でもあらば直接にお

話をした方が埒が早いと存じて、黒田氏の後を追ふて參つた次第ぢや、過日も懇々申上げた通り、機會は正に今です、此機會に際して何の躊躇もありません、機會は爾う度々は參りませんぞ」

力に満ちた龍馬の聲は、對手の肺腑を突刺すやうに響いた。

「君の誠意はよく解つてゐますが、今此處で即答も致しかねる、一應同士の者とも相談の上御返事をするから、暫時お待ち下されまいか」

「御同士の方々は何れに居られます」

「宿に残つてゐますから、これから一寸行つて來ませう、阪本君が御同道下されると、其場で同士の意向もお解りにならうと思ひますが、御一緒にお出下されまいか」

「お差支なくば此方は願ふてもないこと、さらば御一緒に參りませう」

そこで桂、高杉、龍馬の三人は黒田を白石方に待たせて置いて長士の宿に出向いた、桂は同士に對つて、西郷から招かれた理由を一應説明した後、嘗て當藩から薩の名を借りて銃器汽船を購つた事、當藩からも糧食を供給する事などを附加へ、兩藩は非

常に接觸しつゝあるから、此上は聯合して皇國の爲盡してはどうか、又、自分が京の薩邸へ招かれて行く事の可否に就ても、忌憚なく諸君の意見を陳べて貰ひたいと云つた。

賛成者もゐた、不賛成者もゐた、乙論甲駁なか／＼決が採れない。

「薩州は薩州、當藩は當藩、各自進んで可とする所へ進んだらよい、長州は幕府の勢に怖氣がついて、到頭他藩の力を藉りた、他力を藉らねば幕府に對抗ふ事が能きぬのかと云はれたら、後世までの恥辱ぢや」

「幕府が百萬の兵を以て攻め寄せて來たら、或は必らず勝つとは云へぬだらう、勝敗は我々の關する所ではない、我々は矢竭き、刀折れるまで戦へばそれでよいのぢや」

「さうぢや、我々は唯朝敵を討つのみぢや、天我々に運を授けたまはゞ、他藩の援けを乞はずとも必ず勝つ」

「長州武士の強味を見せるには、他藩の力を藉りぬ方がよい」
不賛成派の勢はなか／＼旺盛で、流石の柱も寸時手が着けられなかつた。

「諸君、まアお待ちなさい、諸君のお言葉を拜聴するのに、一々御尤なお言葉ではあるが、これ畢竟するに、皇國に殉ずるお言葉でなくて、藩に殉ずるのお言葉ぢや、藩主の爲に殉じ一國の爲に殉ずるのは戦國時代の武士であつて、一天萬乗の君主を戴く臣民の採るべき手段ではない」

龍馬は儼然襟を正して斯う口を切つた、一同の眼は龍馬のソバカス面に注がれた。

「狐城寡兵百萬の敵に當る、なるほど勇ましいお言葉ぢや、薩藩の力を藉りるのは後世までの恥辱、これも立派なお言葉ぢや、然し今一應熟考して戴きたいのは、幕府を藩としての敵と見るか、或は朝敵として見るか、この差別を熟々考へたならば私怨を以て敵とするは間違つてゐると思ひます、況んや薩州と貴藩との間には、怨みといふほどの怨みが含まれてはゐない、幕府といふ大きな力が暴威を逞しうするのを防ぐには、それに相當するだけの力が要る。假し敵はずともといふ意氣は、武士として寔に爾うありたいものぢやが、それは自ら火中に飛び入る夏の蟲と同じで、自ら亡ぶるに等しい、而も皇國の爲に殉ずるのではなくて藩の爲に身を犠牲にするまでの事では

う、藩はもとより大切ぢやが、一死皇國の爲に盡す有志は今少し慎んで戴きたいのぢや、薩州が此度桂君を迎えて協議をしたいといふのも、つまりは朝恩に報ゆる爲、一藩と一藩との問題などは眼中に措かず、もつと大きな勢力を以て國に盡したいとの希望ぢや、それ故此場合、貴藩に於てもこれを排するといふは義の道を缺きはしまいかと思ひます、徒にヂツとしてゐて敗れるを待つよりは、國家の爲に進んで聯合の道を圖る方が遙かによいと思ひますから、此處は是非共薩州に酬ゆるやうお考へを願ひたい』

不賛成派の者も、此議論を聽いては一言をさしはさむ者が無い、桂は遂に招に應じて上京するに一決した。

三

大阪の薩邸では、藩船「春日丸」を出して天保山沖に待つてゐると、やがて桂一行を乗せた船が黒煙を吐きつゝ來航した。

すべてが最も秘密に行はれなければならぬ些でも異しいと睨まれたらすぐに引捕へられる、殊に京阪には諸國から浪士と稱するものが大勢入込んでゐるので、幕府は無論の事、會津藩士などは浪人狩りの爲に武装して巡邏してゐるから聊かも油断が能きない、桂一行は春日丸に移乗ると、再び薩藩主の用船に乗り移つて淀川を遡り伏見に着いた。

西郷は時刻を見計らつて京から伏見へ來て待つてゐたので、桂も薩の誠意にすつかり安心すると共に大ひに喜んだ、斯うして京都薩邸に着いたのが慶應二年一月六日であつた、それから毎日酒浸しで御馳走になる、斯う優遇されるとは思つてゐなかつた桂も、日夜の歡待に聊か狐につまゝれた感がした。

種々な御馳走を取替へ引替へ出されるのは嬉しい、酒は灘の銘酒だから何よりも有難い、長の旅路の疲勞は毎日の風呂ですつかり癒つて了ふ、西郷を始め其他の藩士が話對手になつてくれるから倦怠を覺えるやうなことはない、すべて至れり盡せりではあるが、唯一つ解せぬのは、肝腎の用件を言ひ出してくれないことであつた。

薩州から招き、自分は招かれて来たのだから、客扱ひを受けるに不思議はない、然しわざ／＼招待して置きながら招待した理由を云ひ出さぬのはどうしたものだらう、海山の珍味をならべられても、灘の美酒を飲ませられても、要件が済まぬ間は舌鼓を打つて飲食する氣になれない、一體何でわざ／＼長州三界から呼出したのだらう、いや、何だつて俺は長州三界から出て来たのだらう。

薩の招待の目的が那邊にあるのか見當がつかなくなつた桂は、三日経ち五日経ちするうちに腹が立つてたまらなくなつて来た、然し桂とても長州の全責任者として上京する位の人物であるから、腹が立つた位で軽々しく動きはしなかつた、薩の方から何も云ひ出さぬなら、此方も沈黙つたまゝ歸るまでのことだと腹を決めてゐた、何れ阪本龍馬がやつて来るに違ひない、幹旋者がやつて来ないうちに勝手に歸るといふは禮義上能きないから、阪本が来たら早速歸らうと思つてゐた。

龍馬は十八日に大阪薩邸に歸つて来た、而かも長藩士三吉慎藏を伴つて来たので、藩邸留守居役の木場傳内は思はず眉を擡めた。

「桂氏が来られたのはいつ頃か御承知か」

「六日に京へお上りになつたとか承はりました」

「では僕もこれからすぐに上京しやう」

「暮から今年にかけて幕府の捕吏は非常に厳しくなりましたから、そのまゝ行かれたなら途中が危険です、殊に貴君の行動に就ては一層注意してゐるといふ話も聞きました、當藩の藩士として上京せられるやう、私から萬事手筈をして置きませうから、夜になつて行かれるか、或は明朝未明に淀川を遡られることになさい」

傳内は細々と注意した、何しろ當時は、國內の二大問題たる長州處分及び兵庫開港が、幕府の双肩に大石のやうな重量で押し掛つてゐる折柄だつたから、その間に暗中飛躍を試みる浪士志士連中に對しては一層神經を針のやうに尖らせてゐた。

龍馬は傳内の厚意を謝した後、その厚意に従つて翌日未明に出發する事にした。

「三吉君、これから幕府の役人の所へ行つてみやうか」

龍馬は微笑を湛へながら慎藏に斯う云ふと。慎藏は眼を睜つて、さも驚いたやうに

龍馬の顔を見かへした。

「只今薩邸御留守居から承はつた所によると、そんな危険なことは……」

「役人も小役人ではない、大阪城代といふ肩書のある役人ぢや」

「大久保殿の御宿所へ行かれるのか」

「左様さ。ちよつと面白いではないか、なに、別段心配せんでもよい、僕は嘗て勝安房守殿の紹介で舊知の間柄ぢや、我々に對する幕府の密偵がどんなに厳しいか探りに行くのさ、一番はやわかりがするからな」

龍馬は勝との關係上、幕臣中でも勤王の志ある者とは知友の間柄であつた、幕府の動靜を探るには、これほど早い手段はない、三吉は聞いて呆然とした、二人は日が暮れるのを待つて大久保越中守の宿を訪れた、假城代と舊知の間柄であるとは云へそれは表面上的の間柄ではない、傳内から密偵の厳しさを聞かされた者が、それを承知で外出するといふのは、龍馬だからこそ能きるので、凡人では一寸むづかしい。越中守は龍馬の來訪に愕いた。

「危険ないく、たつた今手配りを済ませたばかり、此方では君等が京阪地へやつて來るから、速く逮捕しろといふ命令を受けて、半刻も経つたか經たぬ間だ、よく潜り抜けて來られたものだ、一刻も早く大阪を立ち退きたまへ、淀川筋にも舟を出してあるから、よほど巧く通らんと捕まる、見れば刀も帶して居らんやうだが、何か護身用の器を持つてゐないと逃げるのに困るだらう。兎も角一刻も當地にはゐない方がよい」

「いや御注意大きに有難う、ではこれで御免蒙る」

龍馬は平然として大久保の宿を出た。

「三吉君、だいぶ危険が迫つてゐるやうぢやから注意せんといかんよ、僕は高杉君から餞別に貰つた短銃を持つてゐるからよいが、君も何か手ごろの器を持つてゐた方がいい」

「明日淀川筋を廻れるかな」

「それは大丈夫ぢや、薩藩から舟を出して貰ふから、幕吏も手出しは能きないさ」

十九日未明、薩藩の旗章を立てた船に乗つた兩人は、淀川を廻つて八軒屋まで行く

と、幕吏は果してやつて来て乗客を検査し始めた、龍馬と三吉は訊かれるまゝに薩士なりと答へたので、幕吏も手を出すわけにはいかなかった、兩人は平然した顔で、兩岸の冬枯れの景色などを見てゐた、そうして無事に伏見へ着いた。

四

伏見寶來橋寺田屋伊助といふは、伏見薩邸の近くにある船宿で、女將おとせといふのは當時有名な女傑で、龍馬は以前から此所に宿泊つて至極懇意にしてゐた。

龍馬と三吉とは、船から上るとすぐに寺田屋へ行つた龍子はいそ／＼と出迎へた。

龍馬は翌日すぐに京都薩邸を訪れ、小松帶刀の邸に客となつてゐる桂に面會した。

『どうでした、談は纏まりましたか』

斯う云ひながら桂の顔を見た龍馬は、早くも桂の面に不快な色の漂ふてゐるのに不審を打つた。

『君のお歸りを待ちくたびれてゐました』

『どうも遅くなつて、實は三吉君が京阪視察の薩命を受けて東上するといふので、三吉君と同行する爲意外に遅くなりました』

『僕はもう歸藩しやうと思つてゐます』

龍馬は内心冷ツとした、これは談判不調に終つたのかと思つた。

『どういふ結果になりましたな』

『今日で十五日間ばかり居りますが、いまだに聯合のお話がない。君が馬關でのお話黒田氏が馬關へ來られて。西郷氏からの傳言といふのを聞きました、さて來て見ると全でお約束が違ふ、十五日間も京都へ遊びに來る閑暇は、他日は知らず、今日のところではありません、とんだめに逢つたものだと思つてゐますよ』

『では西郷氏からも小松氏からも何のお話もない……?』

『酒は毎日、御馳走は毎日、まさか長州の田舎から出て來た僕を、御馳走攻めにする計略でもありません。先方から何も打出さぬのに、僕の方から云ひ出せば、わざわざ長州から援けを求めに來たことになり、哀みを乞ひに來たことになり、相』

談したいから来てくれと云ふ以上、招び寄せた方から云ひ出すのが至當だらうと思ひます、僕はたゞ君の歸つて来るのを待つて、早速歸藩しやうと思つてゐましたよ」

「……………」

龍馬の面には、今まで見たことのない怒りの色が燃えてゐた、兩人の間には寸時沈黙が續いた。

「まことに失敬ではあるが暫時お待ちを願ひたい」

斯う云つて立ち上つた龍馬は、すぐに西郷の邸に行つた。

「桂君をわざ／＼招び寄せたのは御馳走をする爲ですか」

龍馬は眞正面から斯う喰つて掛つた。

「桂君はどう云ふてゐられる」

「どうも斯うもありません、何故に十五日間も捨て、置くのです、僕があればほどに幹旋する趣意が、まだ君には解らんのか」

「まあ爾う怒らんでもよい、俺は唯慎重に事をしたいからぢや」

「何にしてからが實以て怪しからん、僕は桂君に面目を失くして了つた、慎重も時による、既に言はず語らずのうちにお互ひの話は決つてゐるのぢや、今更慎重も何もない、桂君が來られたらすぐに盟約すべきではないか、爾うお互ひに高く持してゐたのでは、折角成るべきものも成り立たなくなる」

「君の心中はよく解つてゐる、まあ爾う腹を立てるな、俺の方も決して高くとまつてゐるわけではない、謀事は須く深遠なるを可とする、彼の蛤門の戦では、敵と味方に分れた間柄ぢやから、萬一それを根に持つてはゐまいかといふ懸念もあつた、俺の方でいかほど大度量を以て臨んでも、先方でそれを請入れる雅量がなければ折角の聯合も忽ち崩れる、其所を充分に確めた後でも遅くはない、聯合の事たるや焦眉の急ではあるが、確固とした聯合を成立させるには焦つてはいけない」

「それならば解つたが、既にお互ひ同志が疑ふてゐる時ではあるまい、此所まで進んでゐる以上は一刻も早く成立させる方がよいではないか」

「疑り合ふてゐたものが、一瞬にして忽ち聯合する、そこに妙味があるのぢや、然し

君の苦心もよく察してをる、では、明日我輩の邸へ集まることにせう、小松、大久保(利通)も来て貰ふから、萬事はその節取決めやう』

『今度は間違ひはあるまいな』

『大丈夫、誓つて間違はぬ』

『よし、それで僕も面目が立つ』

龍馬は再び小松の邸に引返して、此趣を桂に傳へたので、桂も漸く心が溶けて歸藩を思ひ止つた。

翌二十三日は約束通り西郷邸に集合し、茲に薩長聯合の盟約はめでたくも成立した。

龍馬の喜びもさることながら、後日王政復古の大業に與つて力あつたことも、史上に輝かしい事實である。

龍子の膽

『お龍さん、お風呂加減がちようどよいからお入浴なさい』

寺田屋の女將おとせは、風呂場のもやくした湯氣の中から大きな聲で斯う云つた、龍子は三吉慎藏の室で話對手になつてゐたが、女將の聲に坐を立つて階下へ下りて行つた。

『お歸りなさい、三吉さんが先刻からお待ちかねでございます』

『さうか、すまぬが茶を煎れて持つて来て下さい』

『畏まりました、唯今すぐに持つて参ります』

龍子が階下へ下りると、龍馬が薩邸から歸つて來たのに出會つた、龍馬は龍子に茶を頼むとそのまま、勢よく二階へ上つて行つた。

『やあ、お歸り、首尾はどうちやつた』

三吉は待ちかねたやうに訊く。

『喜んでくれ、上々の首尾ぢや、到頭成立つたぞ』

『それはめでたい、君の歸りがあまり遅いので、何か意見の衝突でもあつて、面倒な

事になつたのではないかと思ふて喃

「明日は君を薩邸に伴れて行かう、西郷、小松、みんな立派な人物ぢや」

兩人が話をしてゐる所へ龍子は茶を煎れて持つて来る、龍子も口へ出して訊ねはしないが、薩長聯合の事は平素から氣になつてゐたので、今日の首尾はどうあらうと心配してゐたが、上首尾との話にいそ／＼と下りて行つた。

「今夜は別して寒さがひどいやうだから。湯ざめをしないやうによく温もりなさい」

おとせは長火鉢の前へ坐つて、湯上りの濁を番茶にしめしながら、入替つて入浴る龍子に斯う云つた。

「はい／＼」

湯殿の方から龍子の返辭が聞えたが、後は又静かになる、もう八ツ頃であらう、寒の夜は殊に冴え返つて、遠くの方で物影に脅える犬の吠える聲がする。

「一寸お頼み申します、もし、一寸お頼み申します」

おとせは隣の家を訪ふ聲かと聞耳を聳てたが、どうやら自家の店前らしい。

「どなた様です」

「お女將さんはおのでになりますか」

「はい、どうぞお入り」

「申しかねますが、一寸此所までお出を願ひます」

男の聲だが姿は見えない、おとせは不審に思ひながら戸口をガラリと開けて一歩外へ踏み出すと驚いた、後鉢巻、槍を持つてゐる士もあれば、抜刀を下げてゐる士もある、而かも大勢だ、おとせはびつくりして思はずアレと聲を立てやうとしたが、その口をふさぐやうに一人の幕吏がおとせの前へズツと出た。

「聲を立てるな、神妙に致せ」

低くはあるが威壓するやうな聲で云つた。

「はい、何ぞ御用でございますか」

「其方の二階に、浪人者が二人潜んでゐる事を確めて參つた、只今在宿か、有體に申せよ」

「そんな方はおゐでになりませぬ」
 「黙れ、お上を偽はると承知せんぞ、確にゐる事を突とめて参つたのだ、どうぢや、
 ゐるだらう」

「薩州の御武家様が二階に二人ゐられますが、浪人者などは一人もをりませぬ」

「只今何をしてゐる」

「まだお寢みにはなつてをりませぬ」

幕吏はこそくと何か囁いてゐたが、まだ起きてゐると聞くと、踏込んで行かうとする者がなかつた。

二

龍子は湯の中へヂツとつかつてゐたが、湯殿の窓の外に大勢の足音がするので、何気なく伸び上つて見ると、異様の扮装をした捕手が四五十人もゐるのにさてはと氣がつくと濡れた身體を拭く隙もなく、その上から浴着をひっかけ二階へ駆け上つた。

「もし、阪本さま、大變々々、捕手が四五十人押寄せて参りました、御要心なさいまし、手槍や大刀を持つてをります」

「ほんとか」

龍馬は三吉と共に立上つた、龍子は足音を忍ばせて階下へ下りて行つた。

「おい、三吉君、慌てるな」

三吉は龍馬の聲に應じて、護身用の手槍を持つて身構へる、龍馬は右手に短銃を握つて室の入口に進んだ。

捕吏の一人は抜刀を提げながら二階へ上つて来た。

「伏見奉行嫌疑の筋あつて罷越した、神妙に致せ」

「無禮者、我等兩人は薩藩の武士ぢや何か考へ違ひをしてはをられぬか」

「黙れ、薩州の士とは偽であらう、土州と長州の浪人者と知つて罷越した、奉行所まで同行致せ」

「浪人者ではない、疑はしければ薩邸へ行つて訊きたまへ、すぐに分明する事ではない」

か

「では如何なる理由で手槍などを持つてゐるのぢや」

「我輩は武士ぢや、武士が刀槍を持つてゐるに不思議はない」

「龍馬が嘲罵やうに云ふと、捕吏は何と思つたかこそ〜と階下へ下りて行つた。」

「三吉、襖を外せ、灯火を消せ」

三吉は龍馬に斯う囁かれて障子襖を取外し、灯火を滅した、爾うして階段の上り口に向つて手槍を半身に構へる、龍馬は短銃の引金に指を掛け、いざと云は、打たうと闇中に擬した、捕吏は果して階段の中途まで上つて來た。

「肥後守の上意だ、神妙にしる」

「我々兩名は薩士ぢや、伏見奉行の支配を受ける理由はない」

「申すべき事があらば奉行所へ行つて申せ、強つて従はぬとあれば繩を掛けるぞ」

「無禮な事を云ふな」

捕吏は突然四角な手焙火鉢を兩人にめがけて投げつけた、炭火が入つてゐないと思

ひの外眞赤にいこつた炭火は四邊にパツと散つた、龍馬と三吉は、その火花に依つて階下の大勢の捕吏が居るのが解つた。

「無禮者奴ツ」

云ふなり龍馬の指は引金を引いた、續いて一發、又一發——、三吉は闇の中を突進する、階下からは六七人の捕吏がどや〜と上つて來た。

「危ないぞ、手槍を持つてゐるからむやみに進むな」

「やられたツ」

捕吏の一人は短銃で負傷したらしく、階段からひどい音を立て、轉げ落ちた。

と、捕吏の一人は横合から龍馬に切つて掛つた、闇ではあるが、氣配にそれと知つた龍馬は、短銃を持った手で遮つたので、最後の一弾が空に向つて飛出す、その拍子にパツと發火した火で拇指を負傷した、彈を装やう寸隙もない、三吉はそれとめがけて突出す、再び龍馬に切りつけやうとした捕吏の腰の邊をグツと突刺したので、悲鳴をあげて斃れた。

どたくと階下へ逃げ出す捕吏の後を追つて、『待てッ』と叫びながら三吉が續かうとするのを、龍馬は小聲で制めた。

『一同が相談してゐる間に逃げないと命を失はれるぞ、静に、此方へ來給へ』

龍馬と三吉は足音を忍ばせて裏階子段から階下へ下りたが、さて逃げる場所がない、その時龍馬の腦裡にフツと浮んだのは、此家の物置小屋の背後が、恰度隣家の庭に面してゐる事だつた。

『よしッ、三吉、此方へ來い』

臺所口から物置小屋へ入ると、刀で羽目板を切破つた、漸く身體が潜れる位の穴をつくると、そこからすつぽりと拔出したが、隣家の人に挨拶をする隙などはもとより無い。突然戸締りのしてある戸をこじ開けて家内へ入ると、家の内では此騒動に吃驚して寝衣のまゝ一所に集まつてゐた。

『賊に追はれ難儀をしてゐます、失敬ながらお隣の庭へお通し下さい』

龍馬が口早に斯う云ふと、其家の人は怖しさに戦慄ながら、黙つて庭に面した戸を

開けてくれた。

『御免下さい』

兩人は一禮して庭に飛下りる、寺田屋から二軒目の庭の塀を乗り越えようと、そこには寺田屋の表通りから裏手に當る細い往來になつてゐるので、捕吏が追つて來るにしても道を迂回しなければ來られない所だつた。

『これから河岸傳ひに走れるだけ走らう』

塀にびつたりと身を寄せた兩人は、四邊を見廻して人の氣のないのを確かめると、一散走りに駆け出した、凍てついた道をヒタ／＼と走る足音は、寂と寢静まつた夜の底に何とも云へぬ物凄しい音を立てる、それを聞きつけた耳敏い犬が消魂しい聲で吠え出したので、彼所からも吠える、此所の犬も吠える。

到頭犬の鳴聲に依つて兩人の逃げた道が判つたらしく、二三町後の方から追跡して來る足音が聞え出した。

『三吉、この一本道も逃げて駄目だ、何處かに隠れやう』

「隠れる所がない、舟でも繋いであるとよいがな」

「あるく、兎も角彼處に身を忍ばせやう」

龍馬は傍の材木置場に目を止めて云つた。

「追手の姿はまだ見えぬ、今のうちだ」

兩人は大きな材木が多数立てかけてある中へ入つて行つた、そしてヂツと耳を澄ませてゐたが、追手の足音は聞えて來ない、半刻あまりも息をころしてゐたが、方向を間違つたかして人の氣配がしないので、三吉は竊と立ち上ると材木の蔭から往來を差覗いて見た。

物の音といふ音が此世から無くなつて了つたかのやうに寂閑としてゐる、音かとも思へるのは、霜の降る音でもあらうか、誰更けに更け渡つてゐた。

「人の氣配はない」

三吉は龍馬の耳元に口を押つけて云つた。

「然しうつかり出られない、夜明には間もあるまい、何刻であらう」

「わからん、斯うやつて夜明までゐたとて仕方がない、もはや活きる路はないと決つた、僕は聯合が成立つたのを冥土の土産にして、潔く死ぬ、阪本君、君も一緒に死ぬか」

「死ぬのはいつでも死ぬる、が、まア待ちたまへ、僕はまだく仕残した仕事がある、今死んでは志の百分の一も達せぬ事になる、それでは如何にも残念ぢや、生きられるだけ生きやう、逃げられるだけ逃げやう、然る後運命が盡きたら死ぬまでぢや」

「然し、徒に幕府の捕吏に捕へられて生恥を晒すよりは、此所で腹掻き切つて死んだ方がましぢや」

「待てく、爾う急ぐ事はない、どうも追手の來る様子もないから、思ひ切つて此所を脱け出し、薩邸に此由を告げてくれたまへ、僕の顔は幕吏に見覚えがあるので僕は出られない、幸ひ君はまだ顔を見知られてゐないから都合がよい、薩邸は此所を二町ほど行つて南へ曲つた所ぢや、ものゝ五町とはあるまい、途中で萬一捕吏に出會つたらばそれまでの運命、對手を殺つつけた上で割腹するがよい、僕も君が引返して來る

まで待つて、來なければ此所で割腹する』

『では君の意見に従つて、救を求めに行つて來るか』

『爾うしてくれたまへ、もう夜明に間もあるまい』

『うつすらと明るみがして來たやうぢや』

『君、往來に捨草鞋が落ちてゐるぢやらう、捜してみたまへ、あつたらそれを穿いて旅の人になりすますのぢや、血が着いた所は河の水で流し落したまへ』

『なか／＼よく氣が着くな、では草鞋を拾つて來よう』

『馬の草鞋でもなんでもよい、急場の間に合せぢや』

三

『あなたは三吉さま、よくまア御無事でございました、爾うして阪本さまはどうなさいました』

三吉が薩邸に行つて來意を陳べると、すぐに奥から出て來たのは、思ひがけもない

龍子であつた。

『おゝ、あなたはお龍さん』

三吉は爾う云つたまゝ、凝視した、續いて薩士大山彦八が出て來た。

『昨夜の凶變はこの婦人より委細承はつた、實は其後兩君生死の程も判らぬので、夜の明け次第搜索隊を出さうと相談して居つた所、此旨西郷氏へも人を使はして報せました』

『いろ／＼と御配慮千萬忝ない、それにしてもお龍さんは如何して薩邸におゐでになるのぢや』

『この婦人は深夜の事でもり、捕吏にでも捕へられてはと存じ、一夜を薩邸に宿らせました、何は兎もあれ、早速船を仕立て、救ひに參らう、貴君は薩邸にて暫時御休息なさい』

『場所は此處より』

『あの材木小屋なれば存じてゐる、御懸念なく御緩と御休息なさい』

「然らば何分お願ひ致します」

大山は三吉及龍子を厚く待遇すやうに云ひ置き、同志を率ゐてわざと陸を避け、小舟に薩州の章旗を立て河を下つた、夜が白々と明けはなれたばかりで、殊に深い霧が一面に下りてゐたから、一間先は見分け難い程だつた、一行は間もなく材木小屋に着く、大山は舟から上つて足音を忍ばせながら内へ入ると、龍馬は胡坐をかいたまゝ材木に寄掛つて微睡してゐた。

「阪本君」

大山の呼ぶ聲に半ば我にかへつたやうに半眼を開けた龍馬は、漸く意識が明瞭して來るとハツとなつて立上つた。

「御無事でゐられたか、お迎えに參つた」

「お、君は大山君、三吉といふ長州人が今君の邸へ行つたが」

「それ故お迎えに參つた、兎も角も舟へお乗りなさい、霧が深いから恰度都合ぢや」
「忝ない」

大山は事なく龍馬を救つて藩邸へ歸つた、侍ちかねた龍子はいそぐと走り出た。

「お、お龍さん」

「御無事でおめでたう存じます」

「一體これはどうしたのぢや」

龍馬は不審さうに眼を睨る。

「お龍さんは既に昨夜の中に急を藩邸へ報せに來られたのださうぢや」

「二階でお役人と何か押問答をされてゐました時、まさかおめく捕えられるやうな事はあるまいと存じましたが、何しろ大勢に取圍まれてゐらツしやるのですから、何れはお命に係はるやうな事になると思ひまして、裏口から窺と抜けて薩邸へ參つたのでございます、然し夜中の事ではあり、どうしやうにも夜の明けるのを待つより外はないと観念してゐましたが、よくまア御無事で……おかみさんはどうしてゐられるんでせうか」

龍馬はまづこの女の氣轉の利くのひどく感服した、そして此騒動に對して比較的

平然としてゐるのに驚いた、あの真夜中に而かも、大勢の捕吏が立ち廻つてゐる中を、どうして抜け出したか、よく脱け出したものだと思つた。

昨夜龍子の急報を受けると共に、すぐに京都薩邸の西郷に向けて飛脚を立てたその返事が来た、西郷自身すぐに行くから龍馬三吉兩人の保護に赴けといふ命令であつた。

「阪本さま、あなたのお手から血が……」

龍子は吃驚したやうに走り寄つた、爾う云はれて氣が着くと、昨夜白刃を短銃で受け止めた手から血が流れてゐる、よく見ると受けそんじたかして切れ口があつた。

「なに、大した事はあるまい」

口では斯う云つたものゝ、今まで氣を張りつめてゐたので何とも感じなかつたが、急にすきくと痛みが烈しくなつて来た、龍子は創口を水で洗つて白布でぐるぐると巻いた。

「熱を持つてゐるやうですから、膏藥でも張つて置かぬといけません、此所に膏藥はございませんでせうか」

「そんな事をせんでもすぐに癒ります、それよりも誰か寺田屋に使を派つて様子を見て来て頂きたい」

「ではわたくしが一走り行つて参ります」

「さうして下さい、おかみさんも安心するぢやらうから」

龍子は一同に挨拶をすると、そのまゝ氣輕に出て行つた、大山や三吉は、龍子の大膽で臨機の處置に才氣が溢れてゐる事を極力賞揚て、あゝいふ女性にはまだ出會つた事がない、女にして置くの惜しいものだといふ云つた、龍馬も二人の話を聞いてゐて、流石に不快な氣持はしなかつた。

四

「どうして〱四五十人どころではありませんよ、たしかに百人位はゐましたらう、然し大きな聲では云はれぬが、わたしが二階に二人、まだ起きてゐられますと云ふたら君行け、いや君が先へ行つて見ると、お互ひに譲り合ひをして、すぐに踏込んで行く

者がないのさ、意氣地のない奴ばかりが揃つて来たものですよ、わたしはその體たらくを見て、こんな捕吏なら何十萬人束になつて来たとして、お二人に敵ひさうな筈はないと、もうその場ですつかり安心はしたものの、さて騒動も沈静まつて見ると、今朝まで心配のし續けさ、お二人は確に逃げて了つたことが判つた、がお前さんの姿が見えないのには随分心配しましたよ』

寺田屋女將おとせは、預かり人の龍子がゐなくなつたのに、ひどく心を勞つてゐたが、ひよつこり戻つて来たのを見ると、盗られたものが戻つて来たやうに喜んだ。

『ほんとにすみませんでした、何しろあんな騒動の最中ですから、それにおかみさんは戸外にゐると下男から聞きましたので、つひ云ひ置いて行くのを忘れて了ひました、それにしても後の始末が大變でしたらうね、怪我人でもありませんか』

『まア行つて御覽なさい、概略掃除はしたけれど、それは／＼大變な狼籍、一人残らず引上げたから、わたしは急いで二階へ上つてみると煙が充満籠つてゐるでせう、短銃の音は四五度したが、匂ひが鐵砲を打つた煙の匂ひとは異つて、いやにキナ臭ひの

さ、見るとお前さん、阪本さんのお室が火事になり掛つてるぢやありませんか、びつくりしてね、大きな聲で下僕を呼んで手傳つて火を消す騒ぎ、なんでも捕手の人が下から階上へ火鉢を投げつけたと見えて、その炭火が座布団と云はず畳と云はず、敷いてあつた寢床の上まで落ちたからたまらない、それが煙ぶり出してゐた所へ行つたからほんもの、火事にならずに済んだもの、随分亂暴な事をするものだと思つてね、今朝もお隣家の人と話をしてゐたのですよ』

『お隣家と云へば、阪本さんや三吉さんはお隣家を二軒ばかり抜けて通つたから、序に挨拶をして置いてくれと云つてゐました』

『さア、それを今朝聞いてね、早速御挨拶に行きました、でもまアよく逃げられたものだね、やつぱりお國の爲に盡すお方には、ちやんと神様がおまもり下さるのですよ』
『さう／＼、つひ忘れてゐましたが、阪本さんが右の手に怪我をなさいました、なんでも切りつけて来たので、それを避けやうと短銃を持つた方の手で受けとめたのださうです、するとその途端に銃弾が飛出したとかで、御自分はその銃弾が筒口で破裂し

た爲に怪我をしたと思つてゐらしつたらしいのです、ところが今朝になつて、血が流れてゐるので洗つてみると、やつぱり刀を受けそんじで切られた創といふ事がわかりました、いゝえ、別に心配するほどの創でもないやうです」

「あんなに劍術の達者な方でも、闇の中では思ふやうにならなかつたと見えますね、然し闇だつたから捕手の方も捕えることが能きなかつたのでせう」

「ではおかみさん、一寸行つて参ります、お人手がない所ですから、暫時御介抱してあげたいと思ひます」

「さうとも、随分お大切に、よろしく申上げて下さいよ、斯うツと、何かお見舞を……爾う、鶏卵でも少し持つて行つて下さいな、あたしがお見舞に上る筈なんだが、わざと御遠慮して置きますから、どうかお前さんからよろしく有仰つて下さい」

「畏まりました、では行つて参ります」

「何か又お入用の品でもあつたら、使ひをよこして下さい、いつでも届けますから、これは阪本さんに、これは三吉さんに差上げて下さい、それからね、これはお前さん

からお屋敷の方々への手土産に持つて行つて下さい」

「まあおかみさん、そんなにして頂いてはすみません」

「そんな他人行儀は止しにしてまあ持つて行つて下さいよ」

「ほんとにすみません、では御親切にあまへて頂戴してまゐります」

流石は寺田屋のおとせと名が通つてゐるだけに、何から何まで行届いた仕向けであつた、龍子は鶏卵の折箱や菓子折箱を持つて、再び伏見屋敷に引返した。

伏見薩邸の門は、既に西郷から差送られた一隊の兵士に依つて嚴重に警戒されてゐた、西郷も同志吉井幸輔と共に、馬を飛して見舞に來た、龍馬負傷の手當は、醫師が

來て完全に處置して行つた、龍子はその日から龍馬の病床に看護する役目になつた。翌日になると、早くも龍馬三吉の兩人が薩邸に潜伏してゐることを嗅ぎつけた幕吏

がやつて來た、應接には大山彦八が出た。

「當方取調べの筋あつて兩名を逮捕致すのだから、何卒兩名御引渡しを願ひたい」

「只今も申上げた通り、當屋敷には左様な人は居りません」

「お隠しなされても當方は突止めた上で罷越したのちや、速かに御引渡しを願ひたい」
「存じ申さん、在らぬものは何處までも在らぬ、何處でお調べになつたかは知らぬが在らぬ者を引渡す事は能きませぬ」

「伏見奉行の上意に依つて罷越した、寺田屋より貴邸へ逃げ入つた事は確かに調べてある、浪人者をお蔽まひになつてはよくあるまい」

「どのやうに申されても當屋敷には居らぬ勿々御引取り下さい」

「ではお訊ね致すが、御門前平素にも似ず、嚴重に固めあるは如何なる次第か承はりたい」

「これは意外なお訊ね、時節柄京大阪何れの藩邸と雖も、兵を以て守護するのは當然の事です、ちとお立入り過ぎたお訊ね、當藩は幕府の支配は受けてをりませぬ」

確かに隠れてゐる事が、みす／＼判つてゐながらどうする事も能きない、こんな問答を繰返してゐたとて到底引渡す筈はないと思つた幕吏は、残念さうな顔で引取つた。

伏見奉行では當屋敷に目を注げてゐる、いつまでも置いては危険と思つたので一週

間目の二月一日になつて、西郷は同志入山彌助に兵を率ゐさせ、伏見から京の薩邸に兩名を引取る事にした。

龍馬の疵は案外に重く、身體の方まで障りを來たしたので、當分静養せねばならなくなつた、それに就ては萬事の世話をする人がないと困る、西郷始め一同は龍子を京の薩邸へ伴れて行くやう龍馬に勧めた、龍子はもとより希望どころ、龍馬とても否やのあらう筈もなかつた。

結 婚

「二十三日の遭難に危ない生命を生き延びたのもあなたのお蔭、其後も斯うやつて親切な看護を受けてゐる、僕はこの世に生れて三十二年、今日まで人間の厚情や親切に感じた事もないではないが、あなたから受けた親切はとりわけに臆に銘じた」
龍馬は床に仰臥して天井に眼をやりながら斯う云つた。

「まア何を有仰るかと思へば、この位の事で爾う仰山に有仰つて頂くと、穴へでも入りたく思ひます、わたくしは唯、あなたから受けた海山にもかへがたい御恩の萬分の一でも酬ひたいと存じまして、御病氣の看護位で萬分の一の御恩に酬ひる意志ではございませんが、わたくしとして能きだけの事は、どんな事をしても御恩報しをしなければなりません」

「僕はそれほど恩を着せた覚えはないが、然しそんな事は兎も角として、今日のやうな場合、君がゐてくれなんだら、凡らく無聊を慰むる事も能きんし、徒に病床に呻吟してゐなければなるまい、僕の姉もあなたに何處か似た所のある女子ぢやが、これは又あゝり亂暴すぎて困り者ぢや、男勝りといふのも種々あつて一概には云へん」

「あなたのお姉さまにもお目に掛りたいものですが、斯う隔れてゐてはね」

「いつか逢ふ機会もあるぢやらうさ、僕も幼少の折は鼻垂と云はれて、それは／＼意氣地のない男ぢやつたが、姉に勵まされたと云ふのか、姉に薰陶されたと云ふのか、兎も角姉の力もだいぶんにあつてゐる、姉には不可ん所もあるが、僕は姉が一番好

きぢや」

「お姉さまもあなたのような弟御さんを持つて、ほんとに幸福でございます、わたくしのやうな者を姉に持った君江や一太郎は、それに双べれば氣の毒にも思ひます」

「お龍さん——」

「え」

「あなた僕の妻になつてくれんか」

「まア……」

「僕は愚圖／＼考へてゐるのが嫌な性質ぢやから、思ふた事は卒直に云ふ、どうぢやらう、あまり感心せん良人ぢやが」

「まア飛んだことを有仰います」

「あなたに異存がなければ、薩邸にゐる間に皆に披露したいと思ふ」

「まるで夢のやうなお話でございます、あなたおなぶり遊ばすのではございませんか」
「僕が今日まで云ふた言葉に嘘があるかな」

『もしもさうなつたら、どんなにか幸福でございませう』
 『さうか、それでは君に異存はないな、阪本龍馬龍子を娶る、大ひに祝すべしちや』
 龍馬は獨で恐悦がった、由來豪傑といふものの心理は比較的單純なものである、殊に人生の戀に對して爾うである、龍馬は早速此旨を西郷、小松、大久保、其他知友に披露した、梅花馥郁として薫るにも似た純潔な戀は斯くして成立した、薩の豪傑連は酒樽を抜いて鯨飲三斗、俱に共に會心の友の婚儀を祝つた。

斯うしたためたさの一方には、聯合の答使を長に送らねばならぬ議があつた、龍馬の病床を圍んだ會議の結果は、藩士村田新八、川村與十郎（純義伯）の兩人を送る事に決定した、龍馬がもし病褥の人でなかつたら、無論行くべきではあつたが、どうしても十日間位は外出を禁せられてゐたので、やむなく桂へ宛てた手紙を村田新八に托した。

二

二月も末に近くなつた頃は、疔瘡も大分癒て來たので、かねて聯合の事で一度歸藩せねばならなかつた西郷、小松、吉井、三吉と共に、龍馬夫妻も同行する事になつた。
 一行は三月四日、藩船三邦丸に乗つて大阪を出帆、六日馬關に着いたが、此所で三吉を上陸させてから、更に航を續けて十日鹿兒島に着いた、龍馬夫妻は小松帶刀の邸に寄寓するに決つた。

然し龍馬の健康はまだ常態に復さない、何となく精氣に乏しい。

『温泉に行つたらどうちや、潮漬の温泉は疔によく利くといふ話を聞いた、しばらく其所へ行つて來てはどうちや』

吉井幸輔が頻りに勧めるので一ヶ月ばかり療養に行く事にした、假りに龍馬の生涯を四季に譬へて見たならば、凡らく此一ヶ月間は花咲き鳥唱ふ春季とも云へやう、束の間の夢とは云へ、祿々として沈香も焼き得ぬ鈍物が、七十年の生涯にも勝る幸福な一ヶ月間であつた。

鹿兒島の東北九里許りを隔れた濱の市から、日當山の温泉に一日を費し、十七日か

ら十日間ばかりを潮浸温泉に暮した。

「温泉宿の者が云ふてゐたが、此少し先に陰見の瀧といふ大瀧があるそうぢやから、今日はそれを見物に行かう、瀧壺の上には、和氣清麿公の庵といふのがあるさうぢや」

「今日はお天気も好いし、暖かですから、ぶら／＼歩くにはちようど宜しうございませう、昨日買ひました釣竿を持って参りませうか」

「お前が釣るつもりなら持つて行きなさい、わしは短銃を持つて行く」

「まア、そんなものを持つてゐらしつてどうなさるのでございます」

「鳥がゐたら打つてやるのさ」

新夫婦は春風に吹かれながら瀧道に向つてぶら／＼歩いて行つた、瀧は五十間あまりもある大瀧で、簾々たるその響きを聞いてゐると、まつたくこの世の事は何もかも忘れて了ふ、龍馬は久しぶりに快活な氣持を取戻したやうに思った。

木といふ木は、生氣を吹き込まれたやうに芽を出して、冬眠から覺めた天地が長閑に在る、龍子は溪川の流に釣を垂らして山魚を釣り上げる、龍馬は樹間に囀る小鳥

を打ち落して快哉を叫ぶ。

斯うした樂天境に毎日濕つてゐたが、龍子は一度有名な霧島山に登つて、噴火の跡を見たいと云ひ出した、龍馬も天の逆鋒に興味を湧いて、どんなものか見て置くもよからうと思つて同意した、で、早速潮漬を發つて霧島温泉に行つた、その日は一泊して翌朝山登りをしたが、云ひ出した龍子は忽ち險岨な路に屁古垂て了つた。

「馬の脊越まで行けば樂ぢやさうなから今少しの辛捧せい」

「でもすべり落ちさうで歩けません」

「そんな事を云ふては困る、では降りるか」

「降りるのも危なくて降りられません」

「困つたなア、女のくせに悪い量見を起すからいけないのぢや、さア／＼手を曳いてあげるから辛捧しなさい、もう彼處に見えてゐる、あれが馬の脊越といふのぢや」

「この邊はみんな焼土でございますね」

「火山の灰ぢや、噴火の跡穴も、もうすぐぢや」

龍馬は龍子を慰め勵ますけれど、爾ういふ自身も、ともすると泣りがちであつた。
 「泣いても喚いても頂上までは行かねばならんよ、一度大聲あげて泣いてみなさい」
 「何とでも有仰いまし、こんなひどい艱路といふことが知れてゐたなら、登るのでは
 ございませんでした、もう斯うなつたら命の續くかぎり登ります、頂上まで駆け競
 べと致しませうか」

「負惜しみを出したな、そんな偉さうな言を云ふと手を放すぞ」

兩人はこんな口ざれを云ひながら漸く噴火口に達した、渡り三町許りの大きさで、
 摺鉢のやうになつてゐる、来てみれば唯物凄いはかりで何の面白味もない。

「霧島の美しく咲いてゐる所へ登りませう、こんな所つまらない」

龍子は興ざめ顔に云つた。

「お嬢さまのおもりに来てやうなものぢや、ではお氣に召す通りに致しませうかな」
 兩人はそこで、擦り切れた草鞋を穿き換へ、再び勇氣を出して頂上に登つた。

「何ぢや、これは……」

「これが逆鉾でせうか」

「これは天狗の面ぢや、ひとを馬鹿にしよる、青銅で作つたものぢやな」

「動きますよ、押して御覽なさい」

「なるほど動くな、お前其方の鼻を持ちなさい、わしは此方の鼻を持つから」

「どうなさるの」

「上へ持ち上げてみやう」

充滿の力を出して引抜くと、僅か四五尺位の長さのもので、兩人は力まけがして
 倒れさうになつた。

「阿呆らしい、こんなものか」

「おほ……」

あんまり有名なだけに、その實物を見るとなんだか馬鹿にされたやうな氣がして二
 人は顔を見合せて笑つた。

「霧島の咲いてゐるのを見ただけでも来た甲斐はありました」

「霧島も美事ぢやが、斯う四方を見渡した景色は何とも云はれぬ佳い眺めぢや、わしの身體も既う癒つたやうぢやから、これから又活動かねばならん、斯ういふ高い所へ來ると、世界中を飛び廻つて見たくなる、わしは高い山の上にあるか、さもなければ海の上で暮らしたいよ」

龍馬は眼の届く限り廣々とした四方を見廻しながら、さも快さうに斯う云つた。

三

薩長が聯合する以前は、お互ひに疑心暗鬼を生んでゐたが、ひとたび聯合が成立つと共に、今迄のやうな氣持はずつかりなくなつて了つた、薩州から答使を送つたに對して、長州でも之に應酬しなければならぬと思つた、如何にして酬ひたならばよいかと相談の結果、玄米五百俵を長船櫻島丸に積んで廻送する事になつた。

それが鹿兒島に届いたのが五月であつた、薩州ではこれを受取るか受取るまいかで又協議を開いたが、遂に辭退する事に一決した、然し黙つて返したのでは誤解を招く

恐れがある、四角四面な口上を云つて返しても角が立つ、この使者に龍馬を選んだのは西郷であつた。

「又貴公を煩はしたい事が出来た」

西郷は斯う前置をして玄米辭退の使者に立つてくれと云つた。

「そんなお使ひはなんでもない、僕が巧く誤解をせぬやうに云ふて來る」

龍馬は事もなげに云つた。

「妻君はたしかに預かるから安心したまへ」

「いや、恰度よい折ぢやから長崎まで伴れて行かう、實は月琴の稽古をしたいと平素から云ふてをるで、長崎の知人の所へ預けやうと思ふてゐたところぢや」

「それなら恰度好都合ぢや、汽船を待たしてあるから、すぐに出發してくれたまへ」

「では明日の朝早く出帆しませう」

龍馬は斯う受合つて自分の室へ歸つて來た、龍子は針仕事に餘念もなかつた。

「おい、いよ／＼お前の希み通り、月琴の稽古に取掛かれるぞ」

『まア、ほんとでございますか』
 『明日の朝櫻島丸に乗つて長州まで行く事になつたから、長崎まで伴れて行く、わしは使を頼まれたのぢや』

當時月琴を弾くのは一つの流行になつてゐた、今日で云へば洋琴を弾くやうなもので、かなり高襟流が重に稽古をしたものであつた、龍子又頗る快活な女であつただけに、流行を追ふて月琴に興じたものであらう、殊に長崎はその流行の本源地とも云ふべきであつたから、長崎の知己の許に龍子を預ける事にした、龍子にしてみれば、小松の邸に寄寓してゐる事に、何の不快も感じはしなかつたが、一朝良人が國事に奔走する身になつた曉には、留守中を小松の邸に暮す事は、かなり氣兼ねでもあつた、もつと待遇が悪くともよいから、氣兼ねの少ない所にゐたかつた、爾うした氣持は、豫ねて龍馬にも話してみたが、龍馬も妻の氣持が強ち我儘からばかりでない事を感じてゐたから、長州行の幸便船に乗せて行く事になつたのであつた。

六月四日に櫻島丸は鹿兒島を出帆して長崎に寄つた、龍子は知己の出迎人に引取ら

れてその家へ行つた。龍馬はすぐに馬關に航し、桂小五郎に會つて薩州辭退の意を陳べた。

『それはどうも困つたな、實は玄米を贈るに就ても、何物にしたものぢやらうと種々と評議を重ねたが、前に糧食讓與の談判もあつた事だし、いつその事玄米でも贈つたらどうぢやらうといふ説を出した見があつた、いやそれではあまり露骨が反つて誤解されやせんかといふ説をなす者もあつた、あゝぢや斯うぢやとなか／＼一決しなかつたが、兎も角此方の意の存る所さへ判ればよいのぢやといふ説に一致して、さてこそ玄米を贈つたやうな事情さ』

『あんたの方の事情はよう解つとる、薩州でも御厚意はよう感じとるが、貴藩も目下事多い最中、萬一の時に役立てた方がといふ意もあつて辭退するに決した、此邊はくれぐれも誤解のないやうと、西郷もえらう心配しとつた、つまる所がぢや、貴藩から薩州へ米穀を贈るといふのは禮にかなふた致し方、又薩州でこれを辭退するのは義にかなふた致し方、兩藩で禮義を重んじた致し方でまことに結構な事ぢや』

『結構な事かはしらぬが、さうかと云ふて又もとへ引取るのも異なるものぢやな』

『さアそこちやて、問題はそこちやよ』

『何が問題ぢや』

『よいかな、お互ひに禮義を重んずるのは至極よいが、それでは貴重なる米穀が船底で腐つて了ふ、まことに勿體至極もないわけぢや、そこで宙に浮いたその米穀を僕が貰ふことにする、爾うして社中（海援隊）報國の費用にするのぢや、なんと妙策ではないか』

『なるほど、問題といふはその事か』

『そうぢや、この策はいけませんかな』

『あはゝゝゝ、それもよからう、では社中に寄贈することにせう』

『ありがたく頂戴する、これこそほんとの他人の禪で角力を取るといふのぢや、あはゝゝ』

勝安房守が建てた神戸海軍所が閉鎖されると共に、そこに養成されてゐた連中は四



方に散じたが、なほ同志の者が一團となつて『社中』といふ名稱の下に航海術の研究を續けてゐた、いふまでもなく龍馬が大將株で、扶助を薩州に受け、長崎を根據地として海上を濶歩してゐた、この社中の費用に貰つて了つたのであつた。

社中の用船として、洋型帆船ワイルウエブ號を購つた、小松帶刀が特に七千八百兩を龍馬に貸與し、龍馬はこの帆船に薩章を立て、社中同志を乗せてゐたのであつたが、不幸にも五島鹽屋岬の沖合で颶風に會つて沈没して了つた、龍馬は頗る愴氣てゐる折から、偶然にも使者に頼まれて、圖らず玄米五百俵を得たのである。

然るに、偶然は此事ばかりではなかつた、龍馬が馬關に逗留してゐる時、高杉晋作は幕府を對手に戦闘を開始した、幕府は小笠原圖書頭長行を征長大將とし、五六千の兵士を以て小倉にやつて來た、これを聞いた高杉は何條黙して居られやう、早速門司田ノ浦を砲撃した、それが第一戦の開始で、小倉の幕軍は陸上から長船をねらひ撃ちをする、高杉は上陸してこれに對抗する、小倉の幕兵は大里に退く、と、云つたやうなわけで、陸上戦は幕府の失敗に歸した。

そこで幕軍は、陸戦をやめて迅動丸、鳳翔丸、富士丸などの軍艦を以て海上戦を挑んで来た。

高杉は此時龍馬に援戦を申込んで来たので、龍馬は『よし来た』とばかり快諾した。

七月三日の朝は、殊に濃霧がひどくて咫尺も辨せぬ位だった、龍馬は大砲を櫻島丸に乗せて此濃霧の中を出動して、幕艦の背後に近づいた、巨弾の一發は霧の中に反響して十發二十發にも聞えたので、幕艦は何處で打つてゐる大砲だかわからない、敵砲には相違ないが方向がわからないから應戦する事ができない、奇計は美事に成功して幕艦を走らせた、その後は重に援護射撃を行つて長軍の進退に多大の便利を與へ、又龍馬自身大里を襲撃して小倉の兵を退却させたりした。

結局この戦闘は、幕兵と大將小笠原と内訌を生じた爲、甚だ不利な状態に陥ち、自然幕府の敗軍となつて終りを告げた。

長藩主は龍馬の軍功に感謝する爲、特に龍馬を引見して謝辭を述べ、羅紗の西洋服地などを贈つた、龍馬は大ひに面目を廣くして薩に歸つた。

四

慶應三年二月、龍馬が長崎に来て薩の藩命を帯びて汽船購入の事に奔走してゐた時、土州の參政後藤象次郎と始めて會つた、さうしてすつかり後藤の大人物に感心し、土藩中後藤を措いて他に人物はあるまいとまで賞揚した、此頃から土州も漸く薩長の仲間入りができる位の勢力を帯びて来た。

龍馬はその率ゐる所の『社中』を海援隊といふ名に改め、今少しく世間からも重大視されるほどのものにしたといふ希望を抱いてゐたが、まだそれを實行する機會がなかつた、然るに後藤象次郎と知るに及んで、この海援隊の事を具體的に話してその援助を暗に求めた。

後藤もとより志の深い者であつたから、まづ筆を取つて辭令書を龍馬に與へた、その文句は、阪本龍馬事才谷梅太郎(變名)『右者脱走罪跡差免、海援隊長被仰付之』といふのであつた、後藤は藩主容堂公の許可を得ずして專斷で之を交付した、海援隊

士は二十八人水夫を合せれば五十餘人もあつた、隊士の重なる人には、千屋寅之助、澤村總之丞、高松太郎、中島作太郎（信行）新宮次郎、長岡謙吉、岡内俊太郎（岡内男）などで、澤村は英語に巧みであつたから外人對手の係とし、長岡は文章を能くしたので龍馬の秘書官と決めた。

これで舊『社中』も大分組織的になつたので、更に進んで一汽船を宇和島藩に購入せしめ、『伊呂波丸』と命けて船長に國島六左衛門といふを任じ、渡邊剛八、小谷耕藏の兩人を士官に任命した。

四月、この伊呂波丸に銃器彈藥を満載して大阪に向け長崎を抜錨した、龍馬を始め海援隊士が乗込んでゐたが、途中、讃岐箱崎の海上を過ぎる頃、急に濃霧の圈内に入つて了つた、警笛は霧の中に籠つて怪獸の叫ぶやうな音を立てた。

と、東の方向から、橋上に白色の燈、右舷に青色の燈を掲げた大きな汽船が航走して來たと見る間に、はや一大音響と共に伊呂波丸に衝突した。

『機關室だ、機關室の所に衝突した』

甲板の上を大聲をあげて水夫が通つたと思ふと、既に海水は滔々として浸入して來た。

『沈没、船首が下つたぞ』

悲愴な叫び聲が又起つた、龍馬は衝突と共に、その一大汽船に飛び移つた、隊士の連中も續いて之に従つたので、溺死だけはまぬかれた。

『積荷だけでも貴船に移して頂きたい、今の間ならまだ間に合ひます』

龍馬は斯う船長に向つて頼んだが、船長は言を左右にしてどうしても應じない、伊呂波丸は見る／＼海底に沈んで了つた。

『まことにお氣の毒な事が出来ました、此船は明光丸と稱つて紀州藩の所有です、弊藩の役人は長崎に居りますから、萬事は長崎に於て相談致しませう、拙者は主命を帯びて航を急ぐものですから、お懸合になるなら長崎の役人と掛合つて頂きたい』

頼ノ津に入つた汽船は、龍馬を其所へ上陸させるなり、斯う云つて出帆して了つた。隊士中の左柳高次、腰越次郎の兩人は、龍馬が紀藩船長の暴言不遜な態度を承諾し

て、ひとまづ頼ノ津の旅宿に投ずると、すぐに龍馬の前に出で、決然たる色を浮べて除隊してくれと云つた。

「除隊、何故に除隊するのぢや」

「隊長はあの無禮な船長の言葉を何と聞きます、實に我々隊士を侮るも甚しい、僕等兩人は、これから明光丸の後を追ひかけ、船長始め船員一同を撫で切りにしてやります、除隊して貰へば一個の浪人、海援隊に迷惑を及ぼすやうな事もありますまい」

「解つた、君等の奮慨するのも尤ぢや、然し安心してゐたまへ、僕の胸中既に勝算がある」

「そんな悠長なことを云つてはゐられません」

「まア爾う焦く事はない、必ず、龍馬の命に掛けても彼等を屈服してみせる、何れは血をみねばなるまいが、それも談判の結果ぢや」

「いかに主用があればと云へ、着のみ着のまゝの我々を頼津へなげあげて置いて」

「解つちよる、まア萬事は俺の指揮を待つてくれ、それとも隊長の命令に服従せんと

いふのか」

「決して爾うではありません」

「そんなら待つてくれ」

龍馬は前にワイルウエフ號を失くし、再び借用した伊呂波丸が此災厄に會つたので、心中焦々してゐると、紀船の態度が言語同断と來たから、益々此返報必ずせねばならぬと決心した。

で、いよいよ頼ノ津を便船に依つて出發しやうとした時、當時在京中の千屋、高杉の兩人に宛て手紙を書き、内に航海日記の抜書を封じて後日の證とした、馬關に着くとまづ長州の三吉慎藏から慰問の書面を送つて來た、隊士一同は非常に興奮してゐる折だつたから、唯わけもなく涙を流して喜んだ

「隊長いよく長崎の談判も目前に迫りました。どうか我々の胸のおさまるやうにお願ひ申します」

「あらかじめ隊長にお断りして置きますが、若し此談判に敗れた時は、我々は明光丸

の船長高柳を始め皆殺しにします』

最初からひどく奮慨してゐる左柳と腰越は、長崎へ出帆間際になつてもまだ激怒してゐた。

「諸君は汽船と衝突した時に非常に狼狽さがしてゐた、其後も船長の處置に對して怒り切つてゐる、爾うむやみに狼狽たり怒つてゐては何事も爲す事は能きないぞ」

「では船長の、あの我々に對する無禮に腹は立たないのですか」

「腹は立つ、癪にも障る、然し激昂して了つては物事を考へる餘裕があるまい、俺が汽船に乗移つて船長と應待した時、まづ第一に船長をせめた言葉を覚えてゐるか」

「知つてゐます、隊長は船長に對つて、貴船に號燈がないのは不法だと詰られました」

「それぢやよ、俺が船に飛び移ると、すぐに號燈を消してやつた事は誰も知るまい、消えてゐたのではない、俺が消して了つたのぢや、まづ第一に機先を制して置けといふのは此所の事ぢや、諸君は狼狽さわぐばかりで、機智を働かす事を知らんから困る」
隊士等は龍馬の言葉に、呆然として瞠目した。

五月八日、長崎に向け馬關を出帆しやうとした時、龍馬は三吉に手紙を以て、龍子を暫く預つてくれと云ひ遣つた、爾うして十三日に長崎に着いた。

奇 才 縱 横

一

明光丸 船長高柳楠之助は水先案内長尾と共に圓卓の向ひに腰をかける、之に對して龍馬及隊士橋本麒之助が腰をかける、談判はいよく公式に開かれることになつた。

「この圖線の上を長崎に向けて走つてゐるので、航海上の規則に従つてゐます、然るに貴君の船は南方から六島に向つて進んで來ましたから、わたくしは之を避けやうと思つて船を右に廻しましたが、貴船は一直線に進んで來てわたくしの船に迫りました、そこで左の方に轉じました時に衝突したやうな次第で、どうも止むを得ない事だと思ひます」

「わたくしの方は右舷の青燈をみとめましたから、貴船の方向が既に替つたと思ひま

した、ところがあなたの方は急に右の方から旋回して来たので、わたくしの方は左へ之を避けました、すると、突然あなたの船は左に廻轉したので此衝突を來したのです』龍馬は海圖の上の圖線を指して、飽くまで航海の規則に従つたと主張する高柳を睨みつけながら斯う抗辯した。

『わたくしは水先を勤める者ですが、霧が深かつたので貴船の船燈が、漁船の燈であるか商船のであるか見わけがつきませんでした、だんく近づくに従つて蒸汽船であることが判りました、そこで、赤燈を見せやうと思つて、左へ轉回したのです、わたくしの方で左へ轉じたにもかゝらず、妄に突進して來たのはどういふわけです』『わたくしは當夜の當番士官で橋本といふ者です、船長は先程から海圖を指示されて規則に従ふてゐると云はれるが、わたくしの見たところでは規則の鍼路を取つてはゐられないと思ひます、わたくしの方は御手洗の瀬戸を抜けてから、鍼をオーストレンソイドに取つて直行したので、わざ／＼南方から廻つて六島に向ふ理由はありませぬ、貴君の圖線は違つてゐますな、殊に衝突前に船の運轉を中止るべき筈なのに、一向運

轉を止められた様子がみえませんでした、あれでは故意と衝突させたやうに思はれます』

『爾う有仰るが、御存じかは知らぬが、大汽船は小船と異つて運轉が自由でありませぬ、衝突したと思つた刹那、貴船を破壊してはならぬと思つたので、すぐに船を後に退かせましたが、速力が加はり過ぎて離隔れて了ひました、見ると、あなたの船の船首が傾きかけてゐるので、急いで救助しやうと船を進めたのが再び右舷に當つたのです』

『然らば今一應訊ねるが、わたくしが貴船に飛乗つた時、左右の舷燈が消えてゐたから、あなたにその理由を訊きました、あなたは返答をされなかつた、我士官は勝房州公にも學び、外國へも行きました者がゐますから、航海の規則は知つてゐるつもりです、なほ今一つ疑はしい事は、最初衝突と共に我士官四五人が貴船に飛乗つた、爾うして此汽船は何處の船か、何といふ船名かと大聲で訊ねましたが、誰も返事をする者がゐませんでした、甲板上には誰がゐたのですか』

「衝突の時には、わたくし自身甲板に登り哨船を出して救ひを命じました」

「水先當番はあなたでしたな、衝突の折に甲板上には誰がゐました」

「水夫の傳五郎といふ者がゐましたが、その他には誰もゐませんでした」

「それでは甲板上に當直士官はゐなかつたわけですか、當直士官も在らぬのに暗の夜に航行するのは危険千萬です、衝突の原因が漸く分明になりました、もはや談判は之で打切りませう」

第一、衝突の際に我士官等甲板上に登りし時、紀船の甲板上には一人の士官もあらざりき、第二、衝突の後自ら船を退く事凡五十間許り更に前進し來りて我船の右舷を突く、此二箇條の證言を紙に書いて朗讀した、高柳船長も斯う言質を取られては致方もなかつた、そこで談判終結を告げると、早速長崎奉行能勢大隅守の所へ行つて相談をした、どんな相談をしたか知らぬが、奉行は紀船の請を容れて仲裁に立たうとした、然し龍馬は斷然はねつけて了つた。

翌日、翌々日 更に何の音沙汰もない、さては荏苒日を延ばして不得要領にごまか

して了ふのであらうと、早くも覺つた龍馬は、少しの裕餘も與へずに此事を後藤象次郎に話をして、之を土州紀州の藩問題に移して了つた、問題はますます大きくなると共に、愈々むづかしくなつて來た。

龍馬の奇智は鋭鋒を表し始めた、まづ小唄を作つて丸山公園の酒樓で唄はしめやうと隊士等に命じた、隊士等は蠻聲を張りあげて「船を沈めたその償は、金を取らずに國を取る」と唄つた、妓等はすぐに絲に合せて客席に唄つた、一種の示威宣傳を行つたのである、後藤は龍馬の請を承諾すると、直ちに紀州藩に通告した、紀藩からは藩士茂田一次郎といふ男が代表者としてやつて來た。

後藤と茂田との談判を全部筆記した上、恰度長崎に來港中の英國水師提督に見せ、公明な審判を受けやうといふ約束の下に談判は開かれた、まづ後藤は徐ろに口を切つた。

「海圖の御議論や船の進退に就ては、既に今日までに論せられた事でもあるから、只今は何も申上げない、先日奉行、衝突の顛末を上書せられた由ちやが、その上書中に

弊藩の船に船燈を點してゐなかつた事を記し、これ衝突の原因なりと斷せられた、如何なる理由で斯様な枉事を記されたか承はりたい』

『右様の事もあつたやうに記憶致すが、それらに就ては、すべて御面會後の談判に委せとりあへずその變事のみを上書致しました』

『然らば何故に舷燈が無い故云々と記されたのか』

『それは弊藩の疎漏、平に御用捨に預りたい、明日わたくし奉行に謁した上、上書を取戻す事に致しませう』

『どうか左様御取斗ひ下されたい、それから、衝突沈没の事はまだ我國に於て裁判された事ありません、幸ひ來港中の英國水師提督に萬國の比例を訊ね、然る後天下の公議に依つて裁決致したいと思ひます』

『御尤なお言葉です』

『で、萬國の比例に照し、又天下公議に依つて裁決致した上、もし弊藩に於て償ふべき責がありましたら、弊藩は必ずその責を負ひませう、然し萬一貴藩に於てその責が



あつた場合には貴藩に於てもその責に任じ下さるぢやらうな』

『承知致しました』

『最後に申し上げたいは、衝突致した場合、尊藩よりは唯一人の士官さへも留めず、弊藩の船士を着のみ着のまゝに鞆ノ津に置き去りに致して更に顧みなかつたのは、實に言語同斷のなされ方と存する、如何に主命が重しとは云へ、如何に主用が急くとは云へ、人間の情として忍びざる行爲ではあるまいか、尊藩と弊藩とは、もとより恩も怨みもない、此一條だけは他日必ず詳かに致したいと存するから、御歸藩になつたら尊藩主にお傳へを願ひたい、これはわたくし一人の言葉ではありません、土佐一國の士民の言葉とお聞き下さい』

後藤は最後に氣味の悪い言葉を投げつけ、この筆記を交換捺印の約を結んで引取つた。

明光丸船長高柳は、後藤と茂田との間に結んだ筆記交換の期日が来たにも係らず、言を左右にして捺印をせず、なほ一週間の猶豫を龍馬に申込んで来た、萬事に抜目のない龍馬は、ぐづぐづしてゐると高柳が茂田に悪智恵をつけると思つたので、此事を後藤に話し、宜しく機先を制すべしと云つた、後藤は早速龍馬の秘書官たる長岡謙吉を伴つて茂田の旅宿を訪れる、龍馬はわざと高柳を誘ひ出してその席上に在らぬやうにした。

高柳は龍馬と別れて旅宿へ歸つてみると、留守に後藤が来て、茂田から筆記交換をしたばかりでなく、英國水師提督に會ふ期日の約束、その結果もし出金の場合、茂田より證書を入れて五ヶ月以内に金を渡すといふ一札まで取つて歸つた後だつた、高柳は茂田にその失敗を語つたが既に遅かつた。

『何れの途勝算はないのぢや、それよりも誰か適當な人に仲裁を頼む方法を考へなければならん』

茂田は高柳が言質を取られてゐる事を早くから知つてゐたので、結果償金問題にな

るとは覺悟の前だつた。

『然し一應英提督に訊ねてみた上の事にしてはどうです』

高柳船長はまだこんな事を云つてゐた。

『それも考へものぢや、英提督が我に有利な裁決を與へてくれればよいが、もしも不利な場合には、暗闇の恥を明るみへ出すばかりでなく、内外に擴める事になる。はてな、誰に頼んだものであらう』

茂田はもう船長の云ふ事などは考慮のうちに置かないで、調停者を頭裡で物色してゐた。

『そうぢや、大藩に頼むで仲裁して貰へば、仲裁者に對しても多少遠慮をするだらう』
茂田は斯う考へた、然し、同じ頼むにしても、藩士では用が辨じない、社杯を着けずに仲裁に立つ者でなければならぬ、それには商人が適當であると思つた。

當時、薩州の御用商人で羽振りの利いた五代才助といふ男がゐた、土州の岩崎彌太郎と共に大商人として有名であつたが、茂田はこの男に着眼した、で、早速五代に會

つて此事を依頼すると、五代はんあまり、好い顔もしなかつたが、兎も角紀藩を代表してゐる茂田が、特に自分を見込んでの依頼であるから、男としても引受けねばならなかつた。

五代は後藤を訪ねて和解の由を申込んだが、後藤は一言の下に拒んだ、五代は翌日も訪ねて、何とか話を決めたといと申入れた、後藤はそれでも肯かなかつた。

龍馬は、五代が後藤の所へ和解を申込んで来たのを聞いて、薩州とは考へたなと思つたとして面白くなつて来たぞと思つた、然し、そんな事は全で知らない體で高柳船長の所へ手紙を遣つた。

『今日も鬱陶しき天氣に御座候、然れば昨日官長まかり出で、茂田君と御約定申上げ候通り、今廿七日英國水師提督に對面の儀は、第十時より彼の船に御同行申したく存じ奉り候間、此段御通達申上げ候、當方へ御入來下され候や、又は當方よりまかり出で申すべきや、御返事此使ひの者へ御聞かせ下されたくかくの如くに御座候以上、才谷梅太郎、五月廿七日、高柳楠之助殿』

五代も見込まれて仲裁者の位置に立つた以上、何とかして解決をつけねばならないので、茂田と後藤との間を盛んに往來した、その結果、到頭明光丸士官より詫證文一札を後藤に差入れ、茂田は自身に後藤の所へ来て、償金八萬三千兩を出す事を約した、後藤は龍馬と相談のする、薩州と云ふ名に對し之以上話を續けるのは止める事にして漸く解決を告げた。

三

慶應二年十二月、畏くも孝明天皇崩御あらせられたので、廿七日朝廷大喪を發すると同時に、明治天皇御踐祚遊ばされた在京の志士の痛哭悲憤の情は、今までよりも一層激しく、なんでも此機會に際して皇運恢復の策を講じなければならんといふ説が沸然として起つた、その志士中でも、最も熱烈であつたのは中岡慎太郎で、西郷南州を始め大久保一藏、吉井幸輔等を歴訪して火災のやうな議論を吐く、薩に下つて後見久光公の上京を促し、その足で太宰府に行つて大喪を五卿に告げる、西郷も又これ

と前後して郷里に歸つて久光公の使命を帯びて土州に容堂公を訪ひ、上京の論を述べる。

爾うした飛躍に依つて、三年五月には薩、土、宇、越の各藩主が京都に集る事になつた、然しながら四藩主とても全部同一の意見ではない、硬派論もあれば軟派論もある、硬は薩で軟は土であつた、遂に二藩主は意見の衝突を生じて容堂公は歸藩する事にまで立至つた。

中岡は氣が氣でない、土州を薩長から仲間外れの位置に置くのは國家の爲によくない、誰か土州老公を動かす者はないかと思つた、と、たま／＼中岡の胸中に映つたのは同志乾退助（板垣伯）であつた。

『あの男だつたら老公に推薦してもよからう』

中岡は吉井幸輔に斯う相談してみた、吉井は即坐に賛成したので、中岡は江戸に滞在して中であつた乾に至急上京しろといふ飛脚を立てた、乾は間もなく京都へやつて來た。

『老公は病氣と稱してまさに歸藩せんとしてゐる足下の意見があらば聞かしてくれ』
中岡は、薩と土との意見の衝突を話した後乾に向つて訊ねた。

『よろしい、萬事僕に任せたまへ、僕は江戸を發つ時、既に斯かる事の豫想をして居つた、爾うして既に死ぬ覺悟をしてゐる、老公もし僕の言をお用ゐ下されずば、僕は潔く公の面前で割腹する』

乾は昂然肩を怒らして云ふ。

『乾、君からそのやうな言葉を聞かうと思つてわざ／＼江戸から來て貰つたのではないぞ、君は自分の事ばかり云ふてゐるな、君の一身はどうなつてもよいのぢや、君が老公の面前で諫死しやうがせまいが、そんな事はどうでもよい、君は自分の名を高くしたいとばかり考へてゐる、天晴壯士よと世間で唱はれたいとばかり考へてゐる、何故國家の危急を顧みないのぢや、何故目下の急務に就て考へないのぢや』

中岡は血を身體中に漲らして、怒つた、乾は暫くヂツと考へてゐたが、やがて屹然と襟を正した。

「いや、僕が悪かつた、僕は老公の事ばかりに氣を取られてゐたので、遂心にもない事を口にしたのだ、よろしい、然らば僕の一命は同志諸君に捧げやう、倒幕ちや、此上は倒幕ちや、君がもし僕の言葉に信を置かぬといふなら、僕は西郷の面前で誓約する、君と一緒に西郷の所へ行かう」

「よし、愉快ちや、乾はやはり乾ちやつた」

中岡は早速西郷の所へ使ひをやつて乾同道で行くと云つた、西郷は小松の別邸で會ふから来てくれといふ返事をよこした、二人は小松帯刀の別邸に行つて西郷に會見、乾はその面前で誓約した。

翌月に入ると、龍馬が後藤象次郎と同行で長崎から上京した、中岡は龍馬に倒幕舉兵の密約が出来た事を話した、双手を舉げて賛成と思ひの外、龍馬は異つた意見を持つてゐた。

「討幕舉兵、なるほど壯舉には相違ない、その意氣やまことに好い、然しながら之を實行するに當つては、まづ幕府の勢力といふことにも考へ及ばさなければならん、僕

が見るところによれば、目下幕府の海軍力は侮るべからざるものがある、假し薩州長州土州の三藩が力を合せて立ち向つても、どうやら一籌を輸する感がある、斯う云へば、多くの有志は奮慨するぢやらうが、たゞわけもなく奮慨したところで、力の相異は又如何ともなし難い、萬一舉兵の曉、不幸にして敗軍となつたらばどうぢやらう、その結果は唯負けたでは済むまい、再舉を計るでは済むまい、爾う考へると迂濶には事を舉げられぬので、僕の意見としてはぢや、これは議論で行くより仕様があるまい、正々堂々と眞正面からヒタ押しに議論で攻め寄せるのぢや、爾うして大政を奉還せしむるのぢや、もしその議論が通らぬ時に、兵力を用ゐても遅くはあるまい」

龍馬の説は中岡を屈服させるまでには行かなかつた、中岡は龍馬の議論として聞いてゐるのみだつた、龍馬の方でも、強ゐて中岡を屈服させやう意思はなかつた。

四

「大政奉還——まづ君が議論の要所を記して示したまへ、君の説にして佳ければ老公

にも献じやう、又薩州長州の士にも相談する』
 後藤土州參政は、龍馬の云つた大政奉還の言葉に對して斯う云つた、龍馬は長岡秘書役に八策を草せしめた、その所謂八策たるや、後藤を益する事甚だ大なるものがあった。

- 第一 天下有爲の人材を招致し顧問に備ふ
- 第二 有材の諸侯を選出し朝廷の官爵を賜ひ現今有名無實の官を除く
- 第三 外國の交際を議定す
- 第四 律令を選み新たに無究の大典を定む律令既に定れば諸侯伯皆此を奉じて部下を率ゆ
- 第五 上下議政所
- 第六 陸海軍局
- 第七 親兵
- 第八 皇國今日の金銀物價を外國と平均す

後藤參政は一見して忽ち『妙策』と手を拍つた、そして土州公にも献じ、諸藩重役とも協議をしやうと約したが、土藩在京の重役を旗亭に招いて龍馬の八策に就て協議を重ねた結果、多少の修正は加へられたが、要するに龍馬の策を敷陳したに過ぎなかつた、小松大久保中岡は無論この八策に異議のある筈はなかつたが、擧兵の念はます／＼熾烈を加へてゐた。

龍馬は更に考へた、土藩在京の重役連中は大政奉還の約定はしたが、まだ藩主の意向がわからない、一方には擧兵の期が迫つてゐる、それには後藤を歸藩させて老公に説く所あらしめ、一方西郷等には再上京まで擧兵を待つてくれと約束させるより他に手段はない、で、この旨を後藤に云ふと、後藤も快諾して歸藩するに決した、そして薩邸に赴いて此度老公を説くべく歸藩するに就ては、擧兵の件もなほ再議すべき事もあり、別に汽船購入の事や何かで、多少日數を費すかもしれぬから、擧兵の事は僕が再び上京まで待つてくれたまへと申込んだ、小松等は、土藩論を一定すべきやう心から祈ると云つて承諾したので後藤は安心して歸藩した、それは七月三日の事で

あつたが、その月の七日、對外關係の重大事件が突如として長崎に起つた、而かもそれが土藩に關した事件で、龍馬に大關係を及ぼす事件であつた、事件の内容は斯うであつた。

七月七日の夜、長崎は丸山の妓樓で、福岡藩士金子某なる者が英國水夫を斬殺して遁走したが、翌日金子某は自殺して了つた、然るにその水夫を殺した者の誰人であるか判らない、況して加害者が自殺したことなども判らう筈はなかつた、長崎奉行は非常に狼狽して、犯人の探索に着手したが、偶然にも、それは實に偶然にも、海援隊所屬の横笛丸といふ船が、當夜號笛も吹鳴さずに港を解纜して了つた、そして同隊士の一入佐々木榮といふ者が他の船に乗つて鹿兒島へ行つた事を發見したので、犯人必ず隊中にありと睨まれた。

英國公使からは幕府に向つて交渉して來る、幕府は土藩に向けて調査方を迫つて來た、土藩在京の重役共は色を變へて驚愕いた、土藩の大監察である佐々木三四郎は急遽大阪に下つたが、恰度薩の西郷も在阪中であつたから、まづ西郷の旅宿を叩いて、

生僧藩船が大阪に來てゐないので貴藩の船を借用したい由を頼むと、西郷は心よく三國丸を貸してくれる事を承諾して、なほ外國人との談判は餘程注意してやらぬと仕損じる、なんでも彼等に言質を取られぬやうにしたまへと注意してくれた。

幕府からは閣老板倉周防守を始め、外國奉行平山圖書頭、大監察戸川伊豆守などが大阪へ來て、英公使からの談判に就て、土藩重役を呼寄せて取調べの事になつた、その取調べの態度は、全然犯人を土藩士と見做した態度で、列席した佐々木三四郎は、既に此點だけでも不快を感じた、幕府役人へは一應評議の上御返答を致しますと答へて置いて、すぐに三國丸に乗込んで歸國すべく神戸へ行つた。

此事件の報を得た龍馬は、假し眞疑は分明せぬとしても、嫌疑者が海援隊士の一人と云はれてゐる以上は、隊長としての責任觀念からも長崎へ出張せねばならなかつた、然し表向きは脱藩者の龍馬、歸國の藩命に接しても肯ぢない龍馬であるから、藩主に對して公然歸國なし難い、そこで越藩主松平春嶽侯に謁して候から老公容堂に宛てゝの手紙を書いて貰ひ、その使者の役目を受けて三國丸まで届けに行く事にした。

八月朔日、薩船三國丸は兵庫埠頭に煙を吐いてゐた、龍馬は出帆間近であることを察しながら、佐々木三四郎を訪ねて來意を陳べたが、佐々木は藩の役人であるから、公然龍馬を伴れて歸つては藩廳への意嚮も如何かと躊躇した、左う右うしてゐるうちに、船は錨を抜いて進航し始めた、もはや如何ともし難い。

「後藤參政が脱藩赦免の沙汰書を貴公に與へたは内輪の事で誰も知らない、貴公が春嶽侯の御書面を船まで持參して來たのを、そのまゝ乗せて來たとも云はれまい、何か方法はなないものかな」

佐々木は頻りに首をひねつた然し船はそなん事にはお關ひなくすん／＼進航して、土佐は須崎港に入つた。と、不圖佐々木の眼に映つたは、藩船夕顔丸が碇泊してゐる姿だつた、佐々木は夕顔船長由比に會つて、暫く龍馬を潜まつてくれと頼んで置いて上陸、すぐに高知へ行つた。そして藩廳に一寸顔を出してから老公の邸に赴いた。

要談が終ると、佐々木は老公の顔色を窺ひながら龍馬同航の旨を云つた。

「さて／＼内外共にやかましい事ぢや」

老公の言葉はそれだけだつた、佐々木はホツと安心した。

外國奉行等を載せた幕艦回天丸は八月四日に須崎港に入つて來た、容堂公は自邸に一行を引見した、間もなく英公使の便乗した軍艦は堂々として須崎に入港したので、港内は急に薩の三國、幕の回天、英艦の三大船の爲に物々しい有様を現じた、高知市民は前代未見の此有様にすつかり興奮して了つた。

「假へ幕府の役人たりとも、洋装にて上陸した者はすぐに銃殺する」

誰の口から出たものか、斯んな揚言がそれからそれへと傳はり擴がる、乾退助の如きは新銃隊といふのを組織して嚴然しく警戒すると云つたやうな有様、藩廳でもこれを見て萬一を慮かり、幕艦英艦の乗組員を上陸せしめないやうにして、藩から後藤參政唯一人を英艦に赴かしめた。

談判の結果は、もとより海援隊士の誰と判つてゐるわけでもないから、長崎奉行所に於て嫌疑者を審問することに決定し、英公使は長崎に向つた、續いて佐々木三四郎も英國書記官と共に夕顔船に乗つて公使の後を追ふた、岡内俊太郎、阪本龍馬も同船

してゐた。

龍馬は船中一策を案じ出した、それは、藩金千兩の懸賞に依つて水夫斬犯人を探つたならば、或は英國の嫌疑も晴れやうかと云ふのであつた、佐々木は直ぐに賛成して、長崎に上陸すると、市街の各所に廣告ビラを張りつけた。

一方『横笛船出帆始末書』を作つて長崎税關所に呈出する、嫌疑者なる佐々木榮を鹿兒島から召遷する、その召遷に行く岡内に依囑んで、序に二分金の新貨の見本を持つて歸らしめる、など、龍馬は四方八方に明晰な頭腦を働かせた、此新二分金といふのは、當時薩州で私鑄してゐたもので、龍馬は此見本を取寄せて土藩にも私鑄させやうと考へたのである。藩内に入れぬ身でゐながら、常に藩事を思ふの情は、決して見のがせぬ所である。

八月廿五日長崎を出た岡内等は九月二日鹿兒島から佐々木榮を伴れて戻つた、新二分金を一枚貰つて歸つて來た、翌日佐々木榮は長崎奉行の審問を受けたが、續いて隊士渡邊剛八、千屋、土佐商會主岩崎彌太郎も召喚せられたが、何れも嫌疑者たるの資

格がない、三日から十日に渡つて漸く審問が終つたが、結局大山鳴動して鼠一匹さへも出ずに了つた。龍馬は隊士一同を内田屋といふ旗亭に招んで祝盃を舉げた。

と、その翌朝、又もや騒事が起きた、海援隊士の島村雄二郎が諏訪神社の境内を通掛つた時、英米の水夫が妓を捕へて拉し去らうとしてゐる、妓は泣き叫んで救を隊士に求めた、島村は之を妨げやうとして水夫を傷けたといふのである、龍馬は聞くより『失敗つた』と心中に叫んだ。が、斯うなつては妙策を考へてゐる餘裕がない、寧ろこれは、ありのまゝを英米兩領事館に訴へ出た方がよからうと思つた。

佐々木に相談すると、それより他に途はあるまいと同意したので、夕顔船長由比を英米領事館に走らせ、島村を奉行所に自訴せしめた。

然るに、奉行は勿論、英米領事も非常に喜んで、從來の犯人が罪の是非曲直の分明せぬのは、踪跡をくらまして了ふ爲で、反つて外國の猜疑を招いたのであるが、斯ういふやうに自訴して貰ふと、直に事件が明瞭になるばかりでなく、罪が水夫にある事もよく吞込める、以後もどうかすぐに自訴して貰ひたいといふので事なく濟んで了つ

た。
佐々木は龍馬の賢案が的中するのに頗る敬服して了つた。

大 政 奉 還

三年の九月も末に近い頃、龍馬は藝州船震天丸に乗つて土佐は浦戸の港外に錨を投げた、龍馬は甲板上に出て郷里の風景をしみじみと眺めた、文久二年三月、朧月夜に丹川の國境を越え脱藩してから六年を経た。この間は須崎の港に入りながら、船底深く潜れてゐなければならぬやうな身であつたから、郷里を目前に控えながら上陸することも能きなかつた、兄の権平、姉の乙女子、久しぶりに逢ひたひとも思つた、然し藩廳の空氣はまだ封建的な勢力が残つてゐるので迂濶に高知へは踏み込めない。龍馬はまづ桂濱の旅館に投じて、手紙を參政渡邊彌久馬に出した。龍馬が浦戸に来たのは、長崎在留の時、和蘭商がライフル銃を船に載せて入港したので、かねて擧兵

の事もやと思つて、薩藩留守役から五千兩を借り、一千三百挺のライフル銃を買つた。代價は一萬八千餘兩であつたが、内金として四千兩を入れ、殘金は延拂ひの契約をして引取つた。勿論龍馬個人として買つたのではあるが、これを土藩の用に供しやう目的であるは云ふまでもない。

『手銃一千挺藝州蒸汽船に積込み浦戸へ相廻申候、參りがけ下の關に立ち寄り申候處、京都の急報有之、今月末より來月初めのやう相聞へ申候、二十六日頃は薩州の兵二大隊上京、長州も三大隊ばかり上阪との約定相なり申候、御國の勢はいかに候や、早々拜顔の上萬情申しのべたく、一刻を争ひ急報奉り候』
此書面を受取つた渡邊參政は、同僚と共に桂濱に來た。そして龍馬を或寺内に移らしめて面會した、龍馬は船に積んで來た銃器を萬一の場合藩用に供せられたいと申入れた。渡邊は深く龍馬の忠誠に感服して、之を機として貴君亡命の罪を解くと約した。後幸ひにもこの銃器を役立てるやうな事は起らなかつたが、龍馬の誠心は之を以ても知れる。

龍馬が潜伏してゐるのを早くも聞きつけた同志の者は、夜に乗じて續々と訪れて來た。それらの手合は何れも形勢の日に切迫してゐるのを告げて意氣軒昂たる様であつた。この有様を見た龍馬は、益々事の急激を感じ、すぐにも大阪へ向けて出帆しやうとしたが、何となく生家の事が氣になつて仕様がな、或はこれが郷里の土の踏みおさめではあるまいかとも思はれたので、同志小澤（尾崎三良男）を誘ふて久方ぶりに本町の生家に行つた。

兄の權平、姉の乙女子の驚愕は云ふまでもない、殊に仲よしの乙女子は、仁王様と稱はれたほどの男氣性であつたが、此時ばかりは涙を流して喜んだ、手紙こそ絶えず出してはゐるが、逢つての積る話はなか／＼に盡きない、その夜は到頭徹夜で話して了つた。

『今度はいつ頃逢はれませうね』

別れ際に乙女子は名残惜しさうな顔で云つた。

『どうせお國の爲に働くのですから、まづその時／＼が一生のお別れですね、明日の

命の事などは考へてもみないし、いつでも死ぬ覺悟だけは持つてゐます、然し大政奉

還は僕の一生の事業ですから、これが無事に済むまでは死にません』

『その心掛けが肝要ぢや、生命は捨て所によつて重くも軽くもなるもんぢやからな』

權平は戒飾するやうな態で云つた。

二

京都へ着いてみると案の條殺氣満々としてゐる、龍馬はとりあへず土藩邸に中岡を訪れた。

『龍君、この通り整ふてゐるぞ』

中岡の指す方を見ると、藩章を印つてある提灯が五六十個も置いてある、後藤は既に大政奉還の建白書を幕府に差出してある、一日一刻も早く大樹公の辭職が實現されなければならぬ機、龍馬の胸中は嵐の前の静さにも似た冷靜になつてゐた、まだ公然藩主の赦免がない身であるから、藩邸内に住むわけにはいかぬ、伏見の寺田屋では不

便でしやうがない、恰度幸ひ、河原町三條下ル所に近江屋といふ醬油店があつて、その二階を貸すといふ事を同志の一人が聞き捜して來たので、早速其所を借りることにした。

後藤參政が藩論として大政奉還を幕府に建白したに就ては、志士連中のうちに反對者もゐた土州の致し方は時勢に對してあまり因循姑息的である、今日は既にそんな遅とした手段を採つて居るべき時ではない、薩長を始め諸國の志士は舉兵の準備が整つてゐる、そんな手暖い手段で幕府が動かせるものならば、今日までに覺醒してゐなければならぬ筈である、熟睡してゐる者を覺ますのに、靜かに揺り動かしても目覺めるものではない、どやしつけるに限る、横面の二ツ三ツ叩きのめせば少しは正氣づくものだ。

反對説を唱へる者は皆一樣に斯う云ふのであつた、龍馬の借住居近江屋へは、毎日のやうに同志が詰かけて來て時勢を論じ合ふ、過激論をする者には懇々と説諭するが、なるほどと感心させるには、建白書の採用如何の問題になつて來る。

『もし大樹公御採用ないとしたならばどうぢや、いや、凡らく御採用ないに決つてゐる、それをべん／＼と首を伸ばして待つてゐるとは貴公にも似合はぬ愚な考へぢや』待ちきれないで焦々してゐる手輩は嘲るやうに斯う云つた。

『時機といふものを捉へるのはむづかしいものぢや、大樹公もし御一家の私情の爲に天下の公論を無視されるやうなれば、その時こそ舉つて立つべき時ぢや、一度立つた以上は何の遲疑する事があらう、唯一直線に進めればよいさらば舉兵の名も正しい名となり、理論の上から云ふても公明誰を憚かる事もない』

龍馬は斯う云つて同志の逸る心を抑へつけてゐた。然し一日二日と日は用捨なく經つて行つた。

『西郷大久保の兩氏は土藩到底頼むに足らず、此上は長を説いて兵を擧げやうといふて、既に桂氏と相談の上、三田尻に兵を集めるといふ噂ぢや』

『それは噂だけぢやらう、まづ月の半までには何とか決る、考へても見給へ、頼朝が鎌倉に幕府を開いて以來、七百年といふ長い間政權は武家の手にあつたのぢや、それ

を一朝にして奉還せしめやうといふのぢやもの、五日や十日で易々と運ぶものではない、焦いては何事も仕損じる、まア待ちたまへ』

斯う慰撫するものゝ、胸中流石に安穩でない龍馬は、藩邸に出掛けて後藤に會ひ、大樹公もし建白書を御採用ないとならば、せめて職を退いて人心をやすめさせなければ、如何なる大事に立至るやもしれん、爾うなつた曉、僕は西郷等に合はせる面がない。やむなく海援隊一手を以て朝恩に報ふ覺悟、先生には地下でお面會致す事にならうとまで極言した、後藤は勿論死を以て建白したからには、必ず奉還に盡力するから、海援隊一手云々は、僕の死後にしてくれ、妄に動いて事を破るのは此際最も慎んで貰ひたと云つた。

果然、十月十三日、將軍慶喜公は在京四十餘藩の重臣を二條城に召した、後藤參政は登營後の情報に龍馬に報する事を約して藩邸を出た。

土藩の志士は悉く龍馬の假寓に集まつた、一同の面上には殺氣が漲つてゐた、氣の早い連中は擧兵の手筈を相談し始める、危機は目と眉の間に迫つて來た。

夕刻になつて一封の手紙が龍馬の許へ届いた。

『唯今下城、今日の趣とりあへず申上げ候、大樹公政權を、朝廷に歸すの號令を示せり、此事を明日奏聞、明後日參内、勅許を得てすぐさま政事堂を假に設け、上院下院を創業する事に運べり、實に千歳の一遇、天下の爲大慶之に過ぎず、此段申上げ奉り候、後藤象次郎、才谷梅太郎様』

『そらどうぢや』

龍馬は讀み終ると共に、一坐の連中を見廻しながら斯う云つて、後藤の手紙を坐中に置いた、一同はもう一度讀み返さうと手紙の廻りに額を集めた。

『愉快、實に愉快、三百年の徳川幕府も遂に滅した、祝盃、酒を買ふて來い』

『待て』

龍馬は同志中島作太郎の歡喜するのを制めた』

『大樹公の御心中を思ひたまへ、僕は只管同情の念に堪へない、皇國の爲祝盃を擧げるのはよいが、幕府の倒れたに依つて祝盃は擧げたうない、幕臣の内には奮激のあま

り如何様な企てを爲る者が無いとも限らぬ、僕等は、大樹公の御身を護らねばならぬ、大樹公の公義に對しては公義を以て報ゆるのが武士ぢや』
一坐は肅然として襟を正した。

三

大政は奉還せられた、表面は土藩主山内容堂侯ではあるが、その原動力は土藩脱藩天下の浪人者、或時は幕府軍艦奉行の生徒になり、或時は薩州の客分ともなり、又或時は幕府征長の師の矢表に立つて長州を助けたりした阪本龍馬の胸三寸から出た案である。

新政府は設けられた、龍馬は早速官制起草案に取掛つた。そして出来上つた案を携へて西郷を薩藩邸に訪れた、職を三大別して關白、議奏、參議を置き、關白は公卿中より一人を定め、議奏は親王公卿諸侯若干人を定め、參議は公卿諸侯大夫士庶人若干人と定めた、而して假りに重なる豫想人物の名を列記して批判を乞ふた。

坐には西郷南州、大久保一藏、小松帶刀の三人がゐた。

「我輩等の役目も定めてあるな、然し起草者の貴君の役は何處にも記いてないがどうしたのぢや」

西郷は草案を手にしながら爾う云つた。

「僕はないさ」

「何故ぢや」

「僕は役人は大嫌ひぢや、何刻に登營して何刻に歸るといふやうな几帳面な事は、とても僕のなし能はざる所ぢやよ、僕一人が土佐人ではない、土佐にだつて役人になる男はゐるさ」

「然しながら官職を捨て、何か爲る事でもあるのか」

「さうぢやな、まづ僕の役目は、世界の海援隊長といふ所ぢやらうな」

この一言には、流石大度量の西郷も、一寸口に蓋をされたやうな容だつた。
起草案は中岡慎太郎の手から岩倉具視卿に呈出された後、王政復古の際、總裁、議

定、參議の三職を定められたのは、此の起草案に基因したのだ、龍馬が明治まで生きてゐたとしたならば、總理大臣もやつたらうし、又は海軍大臣もやつたらう、或は屈指の大富豪岩崎と肩を並べてゐたかもしれない、要するに大政治家としての器であり大商人としての器でもあつた。

心がらのどけくもあり野べはなほ

雪解ながらの春かせぞ吹く

之は大政奉還の時に詠じた龍馬の和歌であるが、半面に於て又詩人的素質をも持つてゐたと云へる。

ところが、此國家の柱石ともいふべき傑士を、淺薄な思想から割出して徒に幕府の仇と推定した馬鹿者がゐた、姓名を佐々木唯三郎と稱ひ、會津の藩士であつた、當時、京都の守護職の取締役をしてゐた近藤勇といふ者があつたが、自ら新選組といふのを組織してその組長となつて市中を濶歩してゐた、現今で云ふ壯士のやうなものであるが、この近藤と佐々木とは、蠻勇的な所が酷く似てゐるので、お互ひにその蠻勇

さを誇り合ふやうな事をしてゐた。

斯うした點から云つてもその人物がいかにか低級であるかわかるが、此男が龍馬の首を狙ひ出したのは大政奉還が因で、それから以來といふものは、頻りに龍馬の動靜に注意を怠らなかつた。

『先生、到頭彼奴の居る所を突止めました』

佐々木の輩下の一人櫻井大三郎といふのが、祇園先斗町の酒亭で飲んでゐた佐々木の所へ注進に及んで來た。

『さうか、何處にゐるのぢや』

『河原町の醬油屋の二階にゐます、才谷梅太郎といふ奴が確にそうです』

『間違ひあるまひな』

『決して間違ひありません、土藩の連中が常に出入してゐますから彼奴に相違ありません』

『よしッ、それでは彼奴の家に在るのはいつ頃か探つて來い』